

仙台市文化財調査報告書168集

大蓮寺窯跡

—第2・3次発掘調査報告書—

1993年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書168集

大蓮寺窯跡

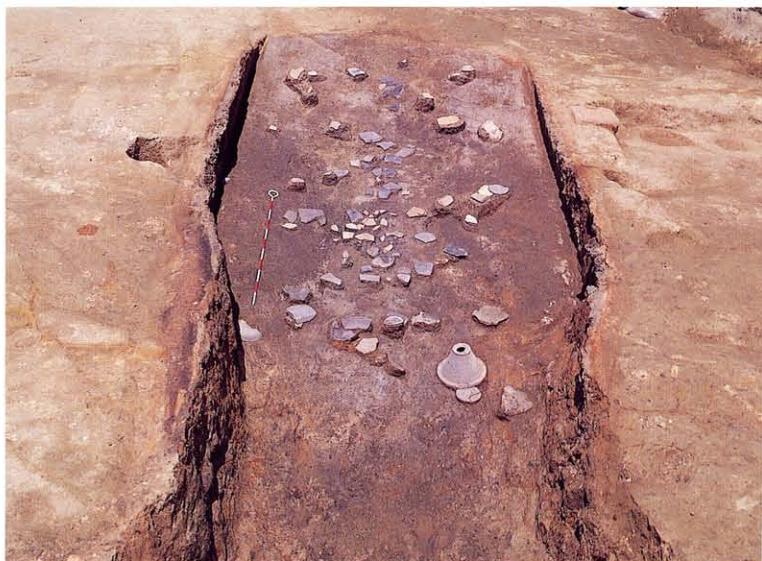
—第2・3次発掘調査報告書—

1993年3月

仙台市教育委員会



1. 2号窯跡



2. 5号窯跡



3. 单弁八葉蓮華文軒丸瓦



4. 5号窯跡出土須惠器

序 文

日頃、仙台市教育委員会の文化財保護行政に対しまして多大なご協力をいただき、感謝にたえません。

仙台市は、平成元年4月に政令指定都市に移行してから5年目を迎え、東北の中核都市としてますます発展をとげております。近年都市化の進展につれ、一方では各種の開発に伴う遺跡の発掘調査が頻繁となり、その結果、さまざまな先人の文化が解明されてきております。その反面、貴重な文化財がしだいに失われつつあることも否めないところであります。

さて、本書は曹洞宗大蓮寺の本堂新築に伴って実施した大蓮寺窯跡の発掘調査の報告書であります。この調査では7世紀の終りから8世紀の初めころの窯跡3基と多量の瓦などが発見され、当地方の多賀城創建以前の歴史を解明するうえで欠くことのできない大きな成果が得られました。これらの調査成果が今後の研究の一助となれば幸いです。

本市には、このような貴重な文化遺産が多数発見されております。私たちの祖先が残してきた文化遺産を市民の宝とし、永く後世に継承し、活用していくことは、現在の私たちに課せられた重要な責務であります。また、これらを「新しいまちづくり」に積極的に生かしていくこともきわめて大切なことであると考えておりますので、今後とも市民の皆様のご支援とご協力をよろしくお願い申し上げる次第であります。

最後になりましたが、発掘調査と整理に参加いただいた皆様と、報告書作成にあたりご指導とご助言を下さいました関係各位に心から感謝申し上げます。

平成5年3月

仙台市教育委員会

教育長 東海林 恒英

例　　言

1. 本書は、大蓮寺本堂改築・擁壁工事に伴う大蓮寺窯跡の第2・3次発掘調査報告書であり、すでに公表された記者発表等に優先するものである。
2. 本文の執筆、編集は篠原信彦が行ない、調査担当の田中則和、佐藤甲二と協議を経て記載した。
3. 発掘調査、報告書作成にあたり次の方々の御指導、御助言、御協力を賜わった。(敬称略・順不同)

曹洞宗大蓮寺　宮城県多賀城跡調査研究所　東北大学文学部考古学研究室
仙台市博物館　古窯跡研究会
五十嵐保裕　須藤　隆　進藤秋輝　高野芳宏　丹羽　茂　木本元治
渡辺泰伸　辻　秀人　戸田有二　藤原二郎　佐々木政雄

凡　　例

1. 本書中の土色については「新版標準土色帖」(小山・竹原:1976)を使用した。
2. 本書の第1図の地形図は、昭和60年測量の仙台市都市計画図(1/2500)「31-4」よりトレースして1/3縮小したものである。
3. 本書の第2図の地形図は、国土地理院発行の1:50,000「仙台」の一部を縮小して使用した。
4. 本書使用の図中・本文の方位は真北で統一している。
5. 本書中のスクリントーンは以下のとおり表している。

 熱変化による還元・酸化焰の範囲  灰原の範囲

6. 本書中の遺構略号は以下のとおりである。

S D : 溝　　跡　　S K : 土　　坑　　S O : 窯　　跡

7. 本書中の遺物略号は以下のとおりである。

E : 須恵器	F a : 軒丸瓦	F b : 丸　瓦
G a : 軒平瓦	G b : 平　瓦	G c : 隅切り瓦
G d : 稔斗瓦	H : 塼	

8. 多量の瓦類が出土したため、分類された瓦は代表的なものを掲載した。
9. 本調査に係る実測図・写真・出土遺物等は仙台市教育委員会が一括して保管している。

目 次

巻頭カラー

序 文

例言・凡例

調査要項

I. 調査に至る経過	1
II. 地形と環境	1
1. 位置と地形	1
2. 歴史的環境	1
III. 調査経過	3
IV. 発見された遺構と遺物	7
1. 窯 跡	7
2. 灰 原	40
3. 溝 跡	42
4. その他の遺構	59
V. 出土遺物について	61
1. 瓦 塚 類	61
2. 須 恵 器	77
VI. 遺構について	82
VII. ま と め	86

調査要項

遺跡名 大蓮寺窯跡（C-415）
所在地 仙台市宮城野区東仙台6丁目13-26ほか
調査期間 第2次調査 平成2年8月6日～9月14日
第3次調査 平成3年4月22日～5月18日
対象面積 約750m²
調査面積 約520m²
調査主体 仙台市教育委員会
調査担当 仙台市教育委員会社会教育部文化財課
調査職員 田中則和第二係長 佐藤好一 木村浩二 篠原信彦 太田昭夫 金森安孝 佐藤甲二 渡部弘美 工藤哲司 斎野裕彦 長島栄一 工藤信一郎 荒井 格 五十嵐康洋
調査補助員 森 剛男 前田裕志
調査参加者 相沢美佐子 阿部美代寿 石井多賀子 伊勢みつ 伊藤貞子 井田千賀 上原若子 大友節子 小野寺貴子 小嶋登喜子 片根義幸 加藤 久 菊池佳子 菊地つね子 熊谷友治 小池房子 後藤幸子 斎藤慶子 佐々木匡 佐藤和夫 佐藤 剛 在川宏志 七宮 清 須佐文恵 平 照子 高橋ヨシ子 千田あや子 早坂みつえ 洞口れい子 谷津妙子 横田正治
整理参加者 相沢せい子 砂金よしえ 石井多賀子 井田千賀 白井美津子 大平いちみ 小野妙子 加藤若子 金沢君代 後藤幸子 斎藤珠美 佐藤啓子 須佐文恵 杉船比佐子 関内久子 平 照子 高橋朝子 千葉きよ子 中島いく子 細谷 広枝 湯浅ます枝 吉川陽子

I. 調査に至る経過

大蓮寺窯跡は仙台市街地の北部を東西に走る台ノ原・小田原丘陵の東端部に位置している。この丘陵一帯は、台ノ原・小田原窯跡群と呼ばれる古代の窯業地帯で、多賀城跡や陸奥国分寺跡・同国分尼寺跡などに供給した瓦を大量に生産した場所として古くから知られている。

大蓮寺窯跡はこの台ノ原・小田原窯跡群の東端に位置しており、1975年の調査で5世紀代の須恵器を焼いた窯跡が発見され、全国的にも有名となっている。^(註1)近年、この丘陵地帯も急速に宅地化が進み遺跡が減少しつつある。

今回の調査は、曹洞宗大蓮寺の本堂解体新築、擁壁工事に伴う遺跡の発掘調査である。この地点は大蓮寺窯跡の範囲内に位置し、以前にも内藤政恒氏によって窯の存在や採集された瓦が紹介されている所として知られ、さらに5世紀代の須恵器窯も発見されていることから十分に窯跡の存在が考えられた。そのため、工事に先立って事前調査を実施することで協議を進め、平成2年8月3日の擁壁工事に伴う試掘調査で多量の瓦が発見され、灰原と確認されたため8月6日より本格的な発掘調査へと移行した。

II. 地形と環境

1. 位置と地形

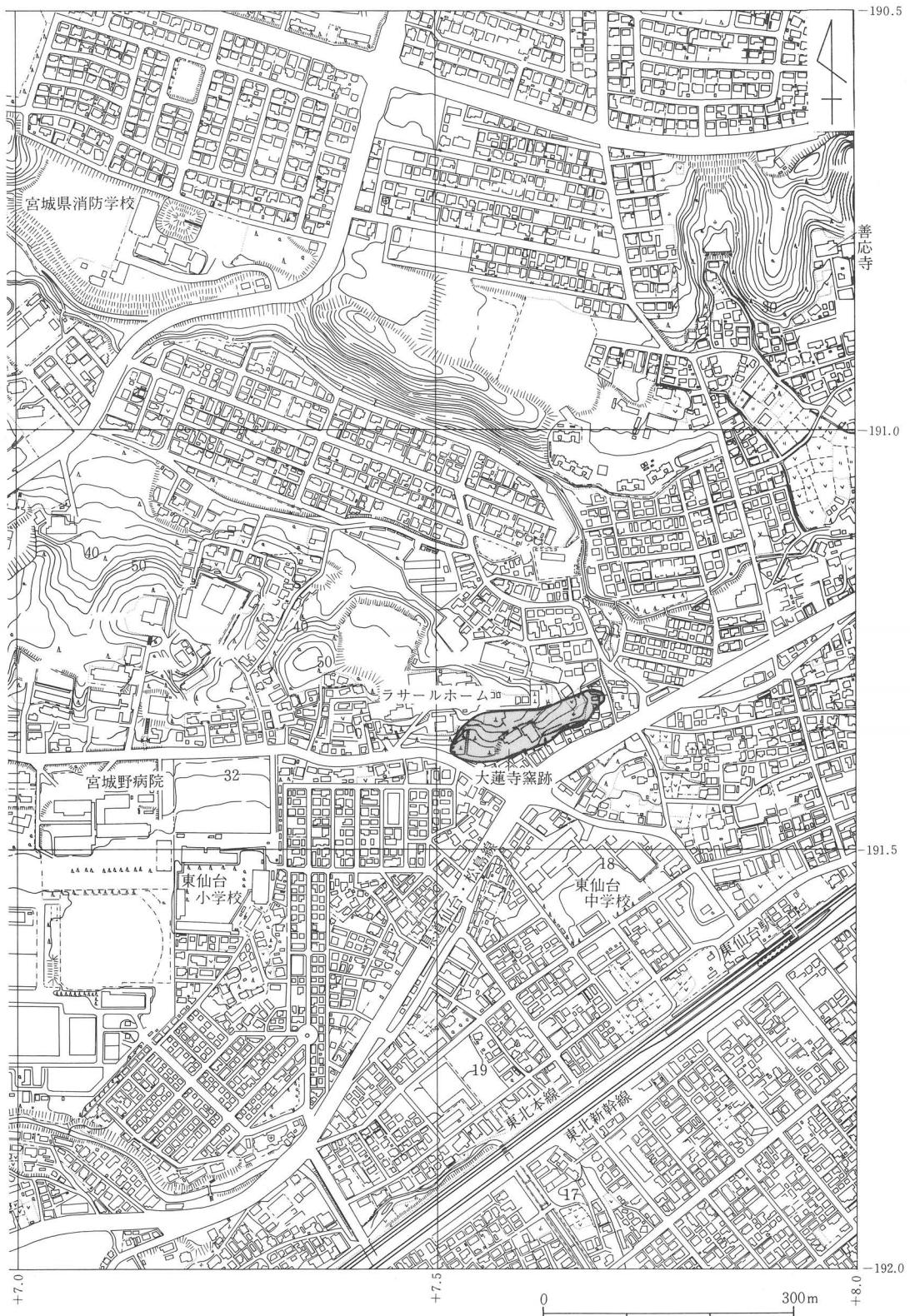
大蓮寺窯跡は仙台市北東部、JR東北本線東仙台駅の北西約400mの仙台市宮城野区東仙台6丁目13-26ほかに所在する遺跡で、仙台市街地北部を東西に長く延びる丘陵の東端部南側斜面に位置している。

この丘陵は奥羽山脈より派生して太平洋側に延びる七北田丘陵で、北側を七北田川、南側を広瀬川によって浸食された丘陵の東端部で、通常台ノ原・小田原丘陵と呼称されている。この丘陵を構成する地層は第三紀鮮新世の亀岡層、竜の口層などからなり、丘陵南側は河岸段丘の発達が著しく、4つの段丘のうち最も高位の台ノ原段丘にあたる。

本窯跡はこの台ノ原・小田原丘陵の東端部で舌状に張り出した標高27~40m程の南側斜面に立地している。この周辺は、仙台市中央部の北側に近接し、近年宅地化が急速に進み変貌の一途をたどっており、北側には鶴ヶ谷団地などの大きな団地が連なっている。

2. 歴史的環境

大蓮寺窯跡の立地する台ノ原・小田原丘陵は、古代の窯業地帯として古くから知られており、多数の窯跡群が発見され、総称して台ノ原・小田原窯跡群と呼ばれている。



第1図 遺跡位置図

本窯跡は台ノ原・小田原窯跡群の東端部に位置し、5世紀代の須恵器を生産した窯跡として全国的にも著名な遺跡である。さらに西側の堤町にかけては、安養寺下窯跡(4)、安養寺中囲窯跡(5)、神明社窯跡(6)、蟹沢中窯跡、桟江遺跡(7)、与兵衛沼窯跡(8)、庚申前窯跡(9)などの瓦窯跡・須恵器窯跡群が多く点在している。堤町では近世から現代まで堤焼の窯があり、古来より窯業に適した地であったことがうかがわれる。

生産遺跡のほかにも丘陵及び平野部では多くの遺跡が分布している。縄文時代から弥生時代にかけては遺物が少量出土する遺跡が知られている程度であり、現在のところ遺構は確認されておらず詳細は不明である。古墳時代以降の遺跡については多数の遺跡が発見されている。

本遺跡の北東約1.8kmの所には、古くから布目瓦が出土して寺院又は官衙の存在が考えられてきた燕沢遺跡(3)があり、古墳時代の堅穴住居跡、平安時代の堅穴住居跡、掘立柱建物跡などの遺構や繩文土器、土師器、須恵器、单弁蓮華文軒丸瓦やロクロ挽き重弧文軒平瓦、丸瓦、平瓦などの遺物が出土している他、一般の集落ではあまり見られない漆紙文書が出土している。^(註4)また、同700mの所には善應寺横穴群(2)が位置し、約20基が調査されている。推定でも50基以上あると考えられており、^(註5)7世紀後半から8世紀初めにかけての遺物が出土している。

一方、本遺跡の南側の遺跡としては、南南西約3kmの所に奈良時代後半に建立された陸奥国分寺跡(11)・同国分尼寺跡(12)がある。南約4.5kmの所には弥生時代から平安時代の集落跡である南小泉遺跡(13)があり、その中心部には東北地方第3位で全長110mの前方後円墳である遠見塚古墳(14)が位置している。さらに南約7kmの所には7世紀後半から8世紀初頭の官衙遺跡である郡山遺跡(15)が位置している。

東北東約7kmの丘陵上には、陸奥国府・多賀城跡(20)や多賀城廃寺が位置しており、七北田川・砂押川流域の自然堤防上には古墳時代から中世にかけての鴻ノ巣遺跡(17)や新田遺跡(18)、山王遺跡(19)など多くの遺跡が分布している。また、七北田川左岸の丘陵上には国指定史跡である岩切城跡(16)が位置している。

以上のように、大蓮寺窯跡周辺には古墳時代から中世にかけて連綿と続く多くの遺跡が存在している。

III. 調査経過

今回の調査は2年次にまたがる調査であり、第2次調査は本堂南側斜面に建設の擁壁工事に伴う調査、第3次調査は本堂改築に伴う調査である。便宜上、第2次調査区をA区、第3次調査区をB区とする。

第2次調査（A区）



No	遺跡名	立地	時代	No	遺跡名	立地	時代
1	大蓮寺窯跡	丘 陵 斜面	古墳(中期)～奈良	11	陸奥国分寺跡	自然 提防	奈良・平安
2	善應寺横穴群	丘 陵 斜面	古墳～平安	12	陸奥国分尼寺跡	自然 提防	奈良・平安
3	燕沢遺跡	丘 陵	繩文～平安	13	南小泉遺跡	自然堤防・後背湿地	弥生・古墳・奈良・平安・中世
4	安養寺下窯跡	丘 陵 斜面	奈良	14	遠見塚古墳	自然 提防	古 墳
5	安養寺中畠窯跡	丘 陵 斜面	平安	15	郡山遺跡	自然堤防・後背湿地	繩文(後)・弥生・古墳・奈良・平安
6	神明社窯跡	丘 陵 斜面	平安	16	岩切城跡	丘	中世
7	折江遺跡	丘 陵 斜面	奈良・平安	17	鴻ノ巣遺跡	自然 提防	古墳・平安・中世
9	与兵衛沼窯跡	丘 陵 斜面	平安	18	新田遺跡	自然 提防	古墳～中世
庚申前窯跡	丘 陵 斜面	奈良		19	山王遺跡	自然 提防	古墳～近世
10	千人塚古墳	丘 陵	古墳	20	多賀城跡	丘	奈良～中世

第2図 大蓮寺窯跡と周辺遺跡

平成2年8月3日、本堂に通じる階段の西側で試掘調査を実施し、多量の瓦を発見したため本調査へ移行した。8月6日、重機により表土を排除した。調査区東側で1号灰原、1号溝跡、2号溝跡などが検出され、1号灰原・1号溝跡で多量の瓦や須恵器が出土している。調査区西端では断面に3号溝跡が検出されただけである。窯跡については、焼土の範囲が確認された1号窯跡だけであり、窯跡の残存が極めて悪い状況のものであった。8月21日になって傾斜面の最下部にも遺物が出土し、遺構の発見も予想されることから重点的に精査した。その結果、2号窯跡の前庭部が検出され、地下式の窯跡であることが判明した。さらに1号窯跡と2号窯跡の間にある大きな木の切株下から半地下式の3号窯跡が検出された。9月1日、2号窯跡燃焼部の北側を重機にて拡張して調査し、焼成部は階段状の施設の床面で11段が確認された。階段の上には、平坦面の奥行に合わせて平瓦、丸瓦を分割して数段に重ねられており、焼台と考えられた。9月14日、2号窯跡の調査を最後に第2次調査を終了した。

第3次調査（B区）

試掘調査により本堂解体新築予定部分に窯跡が確認されており、本堂の解体を待って平成3年4月22日より調査を開始した。今回の調査区は第2次調査区北側にほぼ接するように位置している。すでに南東斜面を大きく削平し、平坦に整地して大蓮寺の本堂が建てられていたため、その北側は調査対象から除外して土置き場として利用し、南側を重点的に調査するために20×6mの調査区を基本とした。本堂解体後の基礎がまだ残っているため重機にて排除したが、地山の砂岩まで搅乱が及んでいる部分が多くかった。調査区中央付近にて窯跡が検出され、さらに北側まで延びていたため不整形の調査区となった。

調査区より2基の窯跡等が検出され、西端のものを4号窯跡（S O 4）、中央のものを5号窯跡（S O 5）とした。さらに東端で焼土混入の落ち込みを検出して1号土坑（旧名称 S O 6 窯跡）、2号土坑として調査した。4・5号窯跡は地下式の窯跡であるが、すでに窯体の上部は削平を受け、天井部及び窯壁の上部は失われて下半部が検出されたに過ぎない。

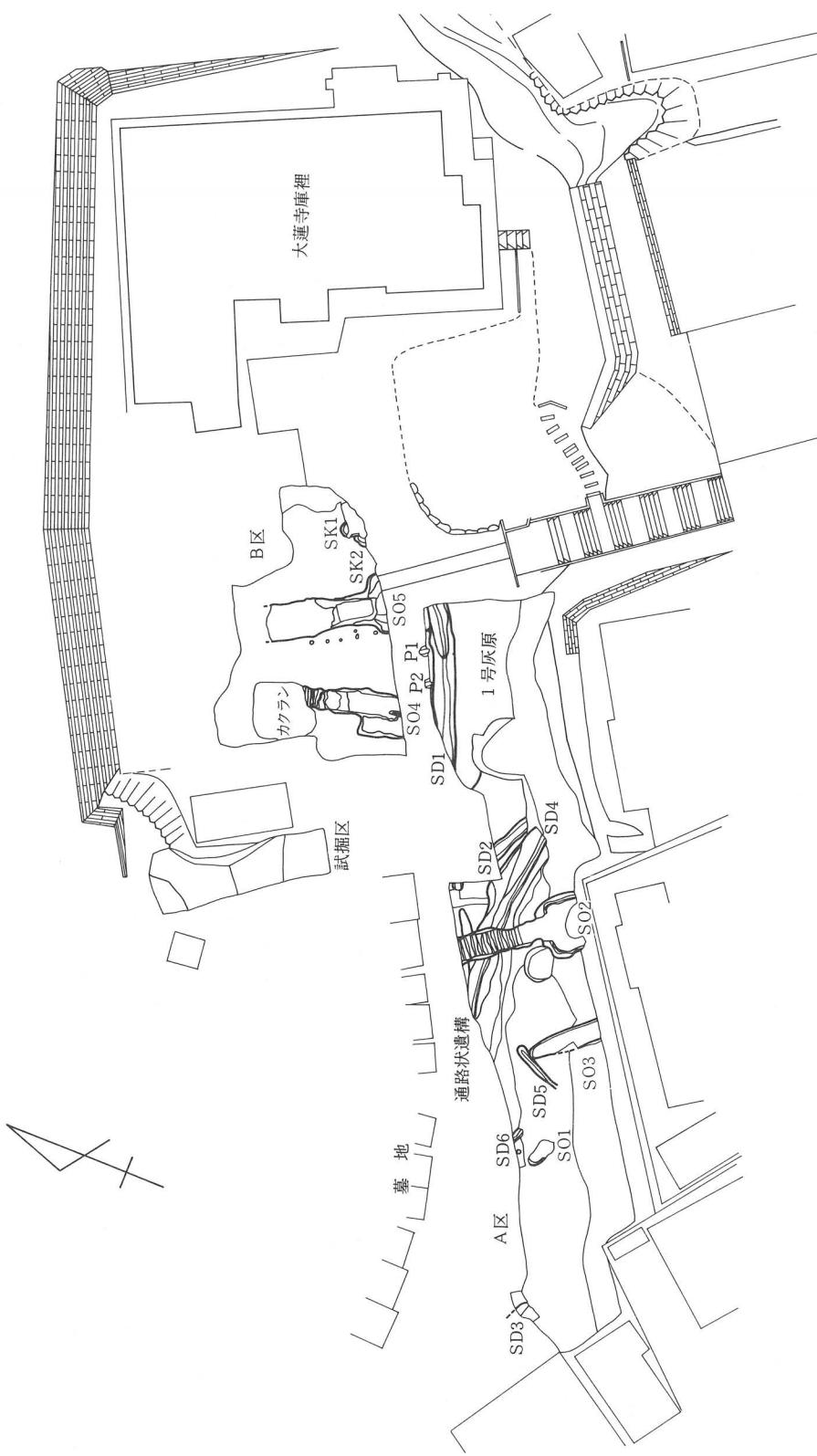
4号窯跡は大きな隅丸方形状の搅乱により焼成部のほとんどと煙道部が壊され、焼成部の一部から前庭部にかけて検出されている。焼成部は2号窯跡と同様に階段状の床面で、焼成部から燃焼部にかけて多量の平瓦片が出土している。

5号窯跡は焼成部から前庭部まで検出され、焼成部の一部と煙道部は削平のため壊されている。焼成部の床面は2・4号窯跡の階段状の床面ではなく無段のもので、両側の側壁際に排水の溝が付いている。遺物は比較的須恵器が多く出土し、その他単弁蓮華文軒丸瓦やロクロ挽き重弧文軒平瓦、丸瓦、平瓦などが出土している。

4・5号窯跡は床面や壁を立ち割り、床面の枚数や窯跡のつくり替えなどの調査を最後に5月18日、第3次調査を終了した。

0 10m

第3図 遺構配置図



IV. 発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は、窯跡5基、灰原1カ所、溝跡6条、通路状遺構1カ所、土坑2基であり、そのうち窯跡は地下式3基、半地下水式2基である。

1. 窯 跡

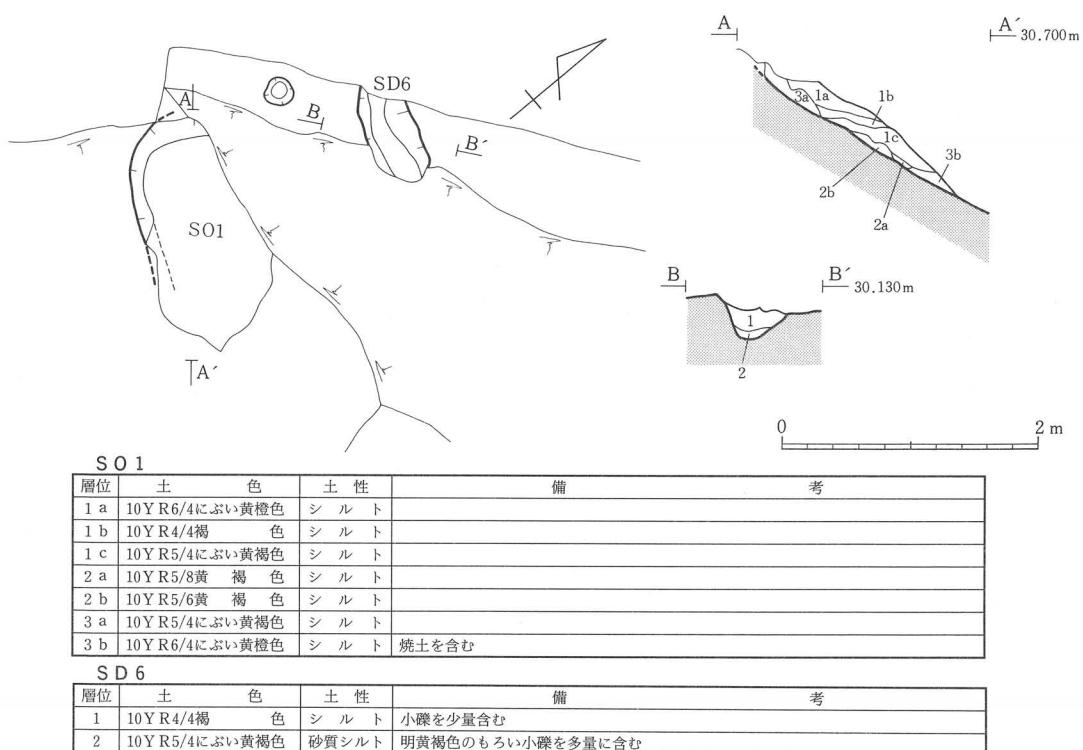
1号窯跡 (S O 1) (第4図)

〔遺構の確認〕 A区西側の標高29.4~30.4mの白色粘土層で検出された窯跡で、東側6mには3号窯跡が位置している。

〔構造・規模〕 焼成部から奥壁にかけて部分的に検出され、窯跡の大部分はすでに壊されている。半地下水式の窖窯と考えられ、残存長1.8mを測る。

〔堆積土〕 3層に分けられるがほとんど失われており、堆積土は約30cmの厚さである。1層はにぶい黄褐色シルトであり、2層は床面に堆積する黄褐色シルト、3層も床面を覆う焼土を含むにぶい黄橙色シルトである。

〔焼成部〕 焼成部の奥壁の床面部分が検出されただけでほとんど壊されている。残存長1.8m、残存幅1mを測る。壁も西側の壁から奥壁にかけて残存する程度で、床面より約30cm立ち上がる。床面の傾斜角度は約28°である。遺物は出土していない。



第4図 1号窯跡・6号溝跡

2号窯跡（S O 2）（第5～14図）

〔遺構の確認〕 調査区A区の中央部付近の最も低い部分で検出された窯跡であり、西側約6mには3号窯跡が位置している。標高は前庭部床面で26.8m、焼成部床面最上部で29.2mである。

〔重複〕 窯跡の上部中央を斜方向に走る通路状遺構と1・4号溝跡があるが、直接の重複関係はない。前庭部の南側は攪乱穴により一部壊されている。

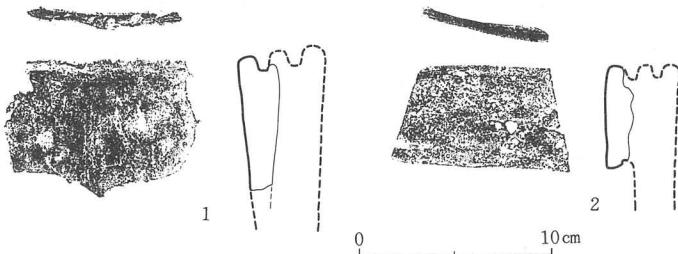
〔構造・規模〕 地山を割り抜いて構築された地下式有段の窯で、調査区内での規模は、約7.5mを測る。焼成部・燃焼部・前庭部が検出され、焼成部の一部から煙道部にかけては調査区外へ延びている。窯体の主軸方向はN-36°-Wである。

〔堆積土〕 堆積土は16層に大別されるが大部分崩壊土、流入土であり、すでに天井部は崩壊している。1層は黒色・黒褐色シルトの流入土である。3・5層は灰白色・にぶい黄橙色のシルトや粘土、砂質シルトが薄く交互に堆積している流入土である。4・6～10層は天井部崩壊土や地山の砂岩、粗砂、粘土などが多く混入する層で、厚く堆積している。13層は焼成部から前庭部にかけて分布し、焼成部の床面を覆っている層で、天井部や窯壁の崩壊土、焼土、炭化物が混じり合い10～50cmと厚く堆積している。この層中には多量の平瓦が含まれ、焼成部から前庭部にかけて一面に出土している。14層は燃焼部から前庭部にかけて分布する炭化物の層である。15層は前庭部に分布する砂質シルトと粘土層の層で、焼土のブロックと明黄褐色の粘土ブロックが壁際に部分的に堆積している。

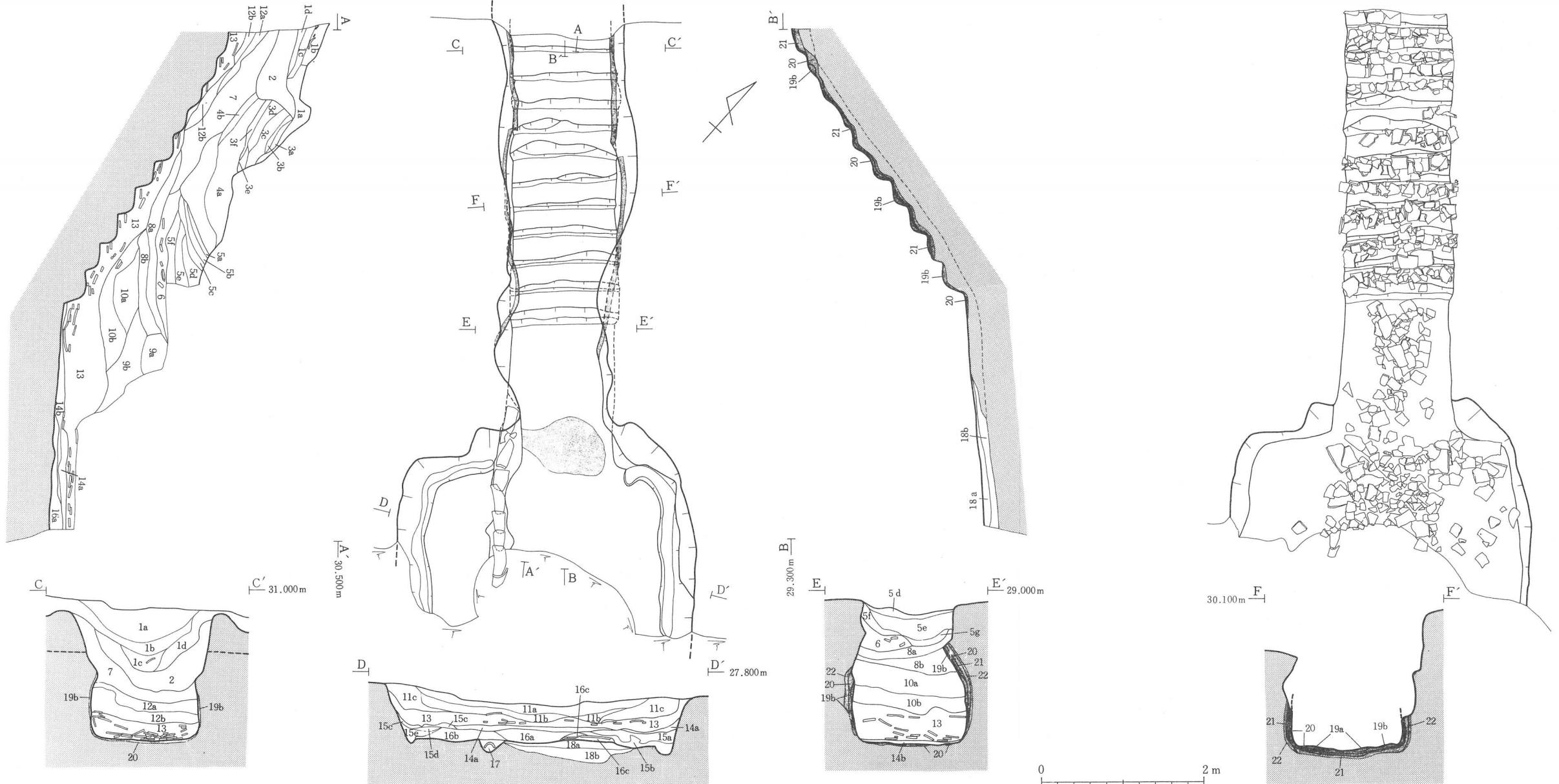
〔焼成部・燃焼部・前庭部〕

焼成部 焼成部は階段状の床面であり、燃焼部と明瞭に分けられる。階段状の床面は調査区内で11段が検出され、その規模は長さ約3.6m、最大幅約1.4mを測る。標高は燃焼部奥の床面で27.1m、焼成部奥の床面で29.2mであり、焼成部の比高差は2.1mである。床面の傾斜角度は約33°とかなりの急角度である。階段は奥行約20～30cm、高さ約20～30cmを測り、7・8段目の床は天井部崩壊のためか一部壊れている。この階段上には、平坦面の奥行に合わせて丸瓦、平瓦を分割して数段に重ねており、焼台と考えられる。側壁は燃焼部との境で約1.2m、奥で約60～70cmの高さまで残存し、天井部はすでに崩壊しているが、側壁より推定して床面から天井部の高さは約1.4m前後と考えられる。床面及び壁は還元焰のためオリーブ黒色・黒褐色に変色し、非常に硬くなっている。

燃焼部 前庭部との境で長軸約1m、短軸約70cmの楕円形に焼けた部分が焚口と考えられ、床面での幅約1.5mを測る。燃焼部は焚口より長さ約1.7m、中央幅



第5図 2号窯跡出土遺物（1）



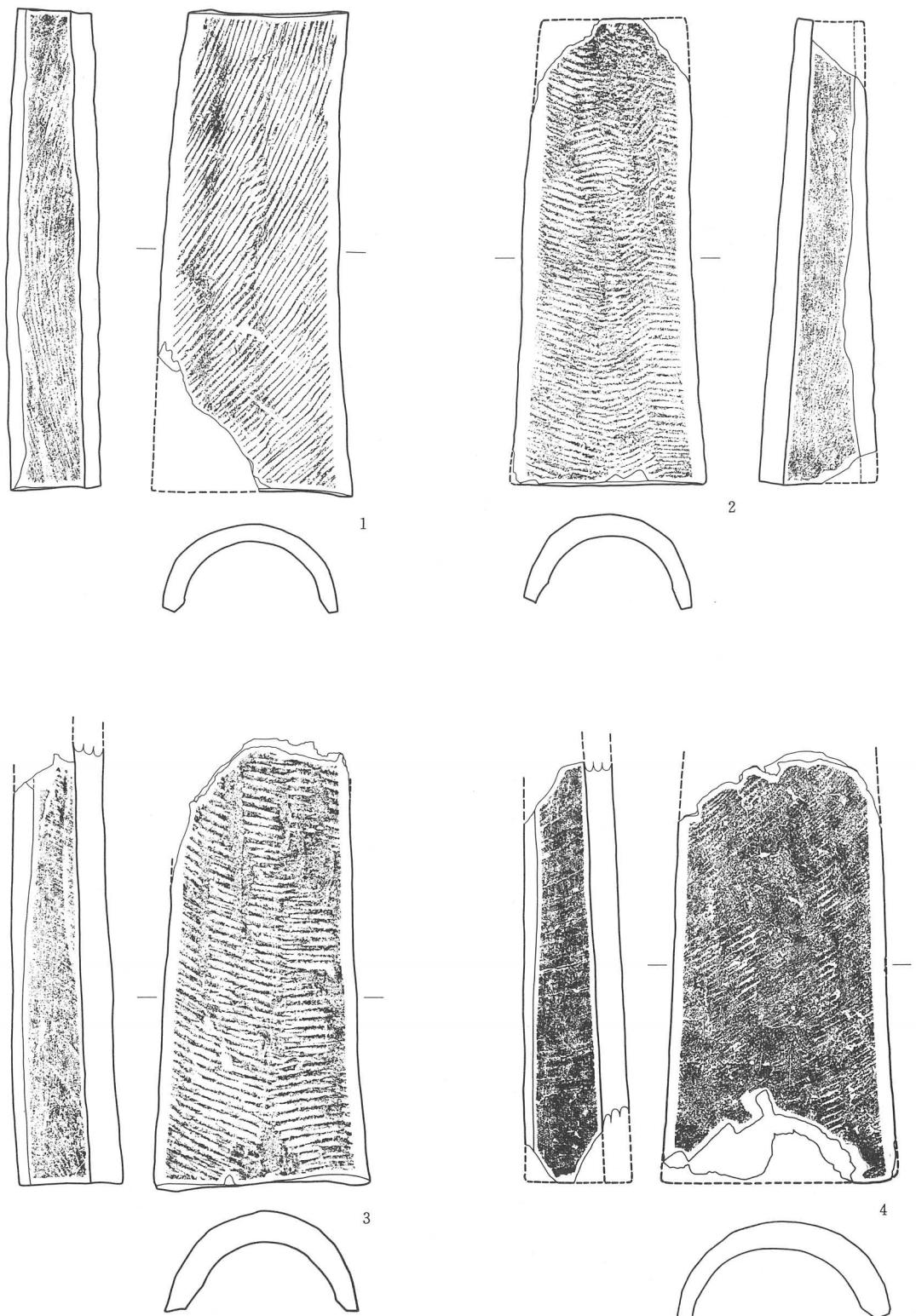
層位	土色	土性	備考
1 a	10Y R2/3 黒褐色	シルト	炭化物と若干の小礫を含む
1 b	10Y R4/4 黒褐色	シルト	炭化物と少量の小礫を含む
1 c	10Y R3/3暗黒褐色	シルト	1cm程度の小礫を含む、炭化物を含む
1 d	10Y R4/4にぶい黄褐色	シルト	炭化物を含む、5cm以下の小礫を斑らに含む
2	10Y R4/4褐色	砂質シルト	炭化物を含む、5cm以下の砂岩の礫を全面に多く含む
3 a	5 Y7/2 灰白色	シルト	白色の砂岩小粒を含む
3 b	10Y R6/3にぶい黄褐色	粘土	シルト、凝灰岩ブロックを含む
3 c	5 Y7/2 灰白色	シルト	白色の砂岩小粒を含む
3 d	10Y R6/3にぶい黄褐色	粘土	シルト、凝灰岩ブロックを含む
3 e	10Y R7/4にぶい黄褐色	粗砂	シルト、凝灰岩ブロックを含む
4 a	10Y R6/3にぶい黄褐色	粗砂	天井部崩壊、焼土を含む
4 b	5 Y7/2 灰白色	シルト	白色の砂岩小粒を含む

層位	土色	土性	備考
4 c	10Y R6/4にぶい黄褐色	砂質シルト	天井部崩壊の大きなブロック、粗砂、炭化物、凝灰岩ブロックを含む
5 a	10Y R7/3にぶい黄褐色	粘土	炭化物と少量の粗砂を含む
5 b	10Y R7/3にぶい黄褐色	粘土	炭化物を含む、5cm以下の小礫を斑らに含む
5 c	10Y R7/2にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物を含む、5cm以下の砂岩の礫を全面に多く含む
5 d	10Y R6/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒、にぶい黄褐色の粘土を含む
5 f	10Y R6/3にぶい黄褐色	粗砂	崩壊土
5 g	10Y R6/4にぶい黄褐色	砂質シルト	白色の砂岩小粒を含む
6	10Y R5/4にぶい黄褐色	粗砂	5mm程度の小石を多く含む、瓦が多く出土する層
7	10Y R5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	白色の砂岩小粒を含む
8 a	10Y R4/6褐色	粗砂	窓壁のブロックを含む、凝灰岩粒を多量に含む
8 b	10Y R4/3にぶい黄褐色	砂	細かな礫体を含む、崩壊土、にぶい黄褐色の粘土をブロック状に含む
9 a	10Y R7/4にぶい黄褐色	粘土	白色の砂岩小粒を含む

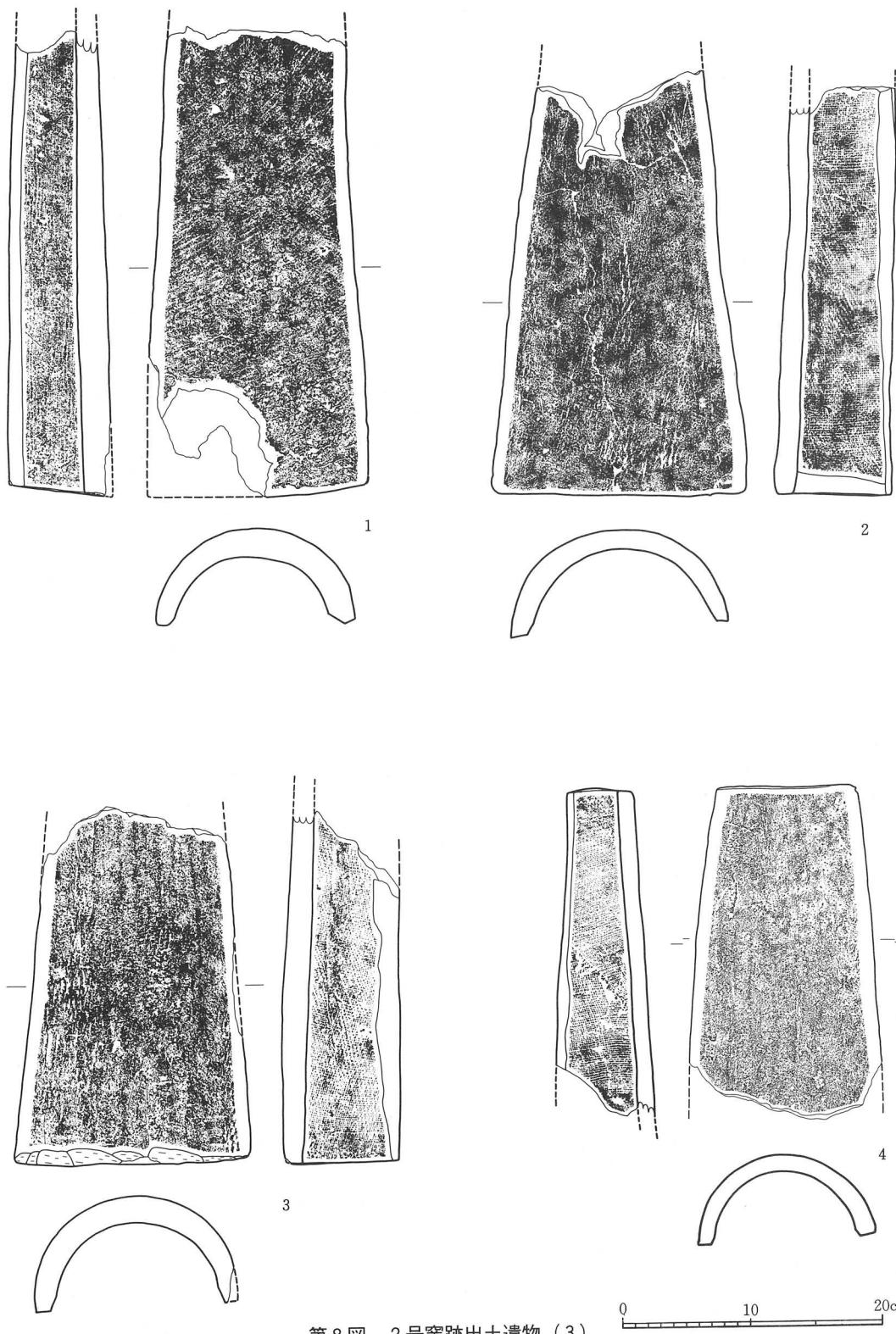
層位	土色	土性	備考
9 b	10Y R7/4にぶい黄褐色	粘土	崩壊土、凝灰岩、黄褐色の粘土を含む
10 a	10Y R5/4にぶい黄褐色	粗砂	崩壊土
10 b	10Y R6/6明黄褐色	粘土質シルト	窓壁の天井部(窓壁)の崩壊を多く含む、粘土、凝灰岩のブロック、粗砂を含む
11 a	10Y R2/1黒褐色	シルト	炭化物、多量の小礫を含む
11 b	10Y R4/4暗褐色	シルト	炭化物、凝灰岩粒、焼土、小礫を含む
11 c	10Y R5/4にぶい黄褐色	シルト	凝灰岩粒を含む
12 a	10Y R4/4褐色	砂質シルト	1cm以下の小礫と炭化物を含む
12 b	10Y R5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	5mm以下の石の粒と5mm以下の砂礫と炭化物、マンガンを全体に多く含む、岩盤崩落ブロック(数cm)に入る、天井崩落
13	10Y R4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	粗砂、天井部崩壊土、焼土、炭化物、多量の瓦を含む
14 a	10Y R4/3にぶい黄褐色	シルト	粘土質シルト
14 b	10Y R1.7/1黒褐色	粘土質シルト	1~2cmの焼土粒、1cm程の凝灰岩粒を若干、炭化物を多量に含む
15 a	10Y R7/4にぶい黄褐色	砂質シルト	多量の焼土、炭化物を混合する層
15 b	10Y R7/4にぶい黄褐色	砂質シルト	粘土ブロック、炭化物を含む

層位	土色	土性	備考
15 c	10Y R6/6明黄褐色	粘土	炭化物、焼土を含む
15 d	2.5Y R4/3赤褐色	粘土質シルト	焼土ブロックの層
15 e	5Y R5/8明赤褐色	粘土	焼けた粘土と、黒色の炭化物の混合する層、周溝を埋めるように堆積している
16 a	2.5Y7/4浅黄色	粗砂	地山の凝灰岩粒、大きなブロックを多量に含む
16 b	2.5Y6/4にぶい黄色	粗砂	焼土粒、炭化物、凝灰岩ブロックを含む
16 c	10Y R7/4にぶい黄褐色	粘土	砂、炭化物を少量含む
17	2.5Y8/4淡黄色	砂質シルト	凝灰岩ブロック、炭化物を少量含む
18 a	2.5Y7/4淡黄色	粗砂	炭化物、焼土、凝灰岩ブロックを含む
18 b	2.5Y6/3にぶい黄色	粗砂	炭化物、凝灰岩ブロック、酸化鉄を含む
19 a	5G Y2/1オリーブ黒色	砂質シルト	5mm程の小礫を含む
19 b	2.5Y3/2黒褐色	砂	1mm程の砂粒を含む
20	2.5Y6/8明黄褐色	砂質シルト	1mm程の砂、1cm程の小礫を含む
21	5Y5/4オリーブ色	砂質シルト	2~5mmの白色の小礫、2cm程の白色の粘土をブロック状に含む
22	2.5Y4/3オリーブ褐色	砂質シルト	2~3mmの白色の小礫を含む

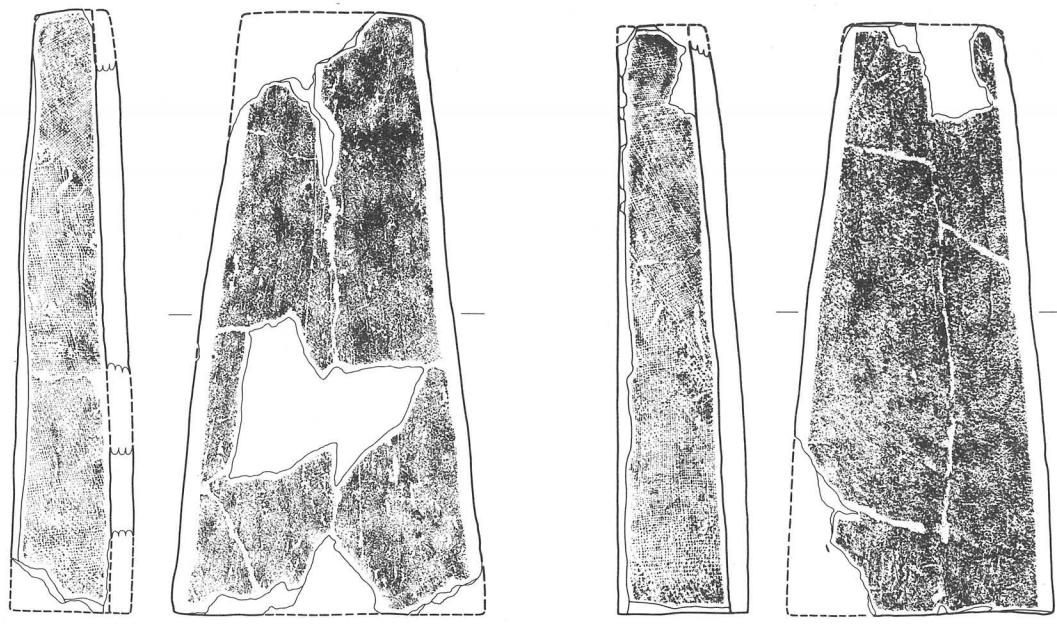
第6図 2号窓跡



第7図 2号窯跡出土遺物（2）

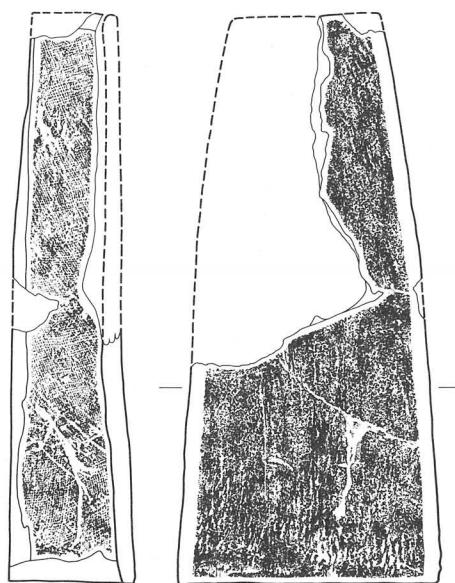


第8図 2号窯跡出土遺物 (3)

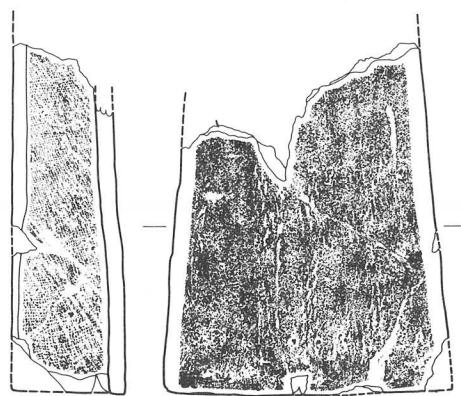


1

2



3

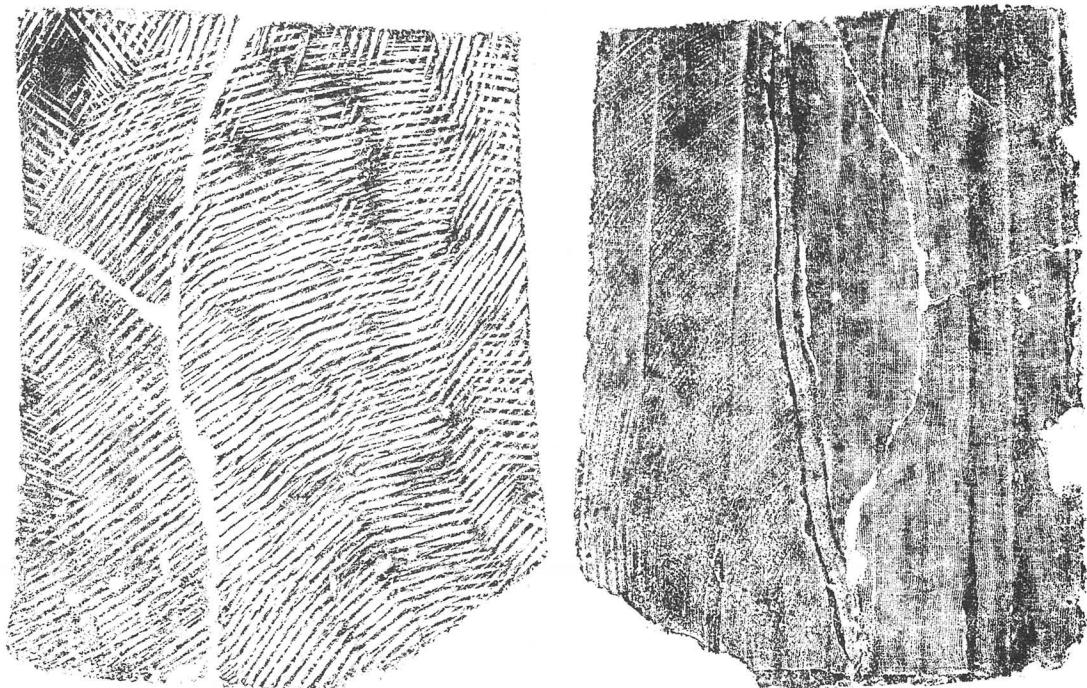


4



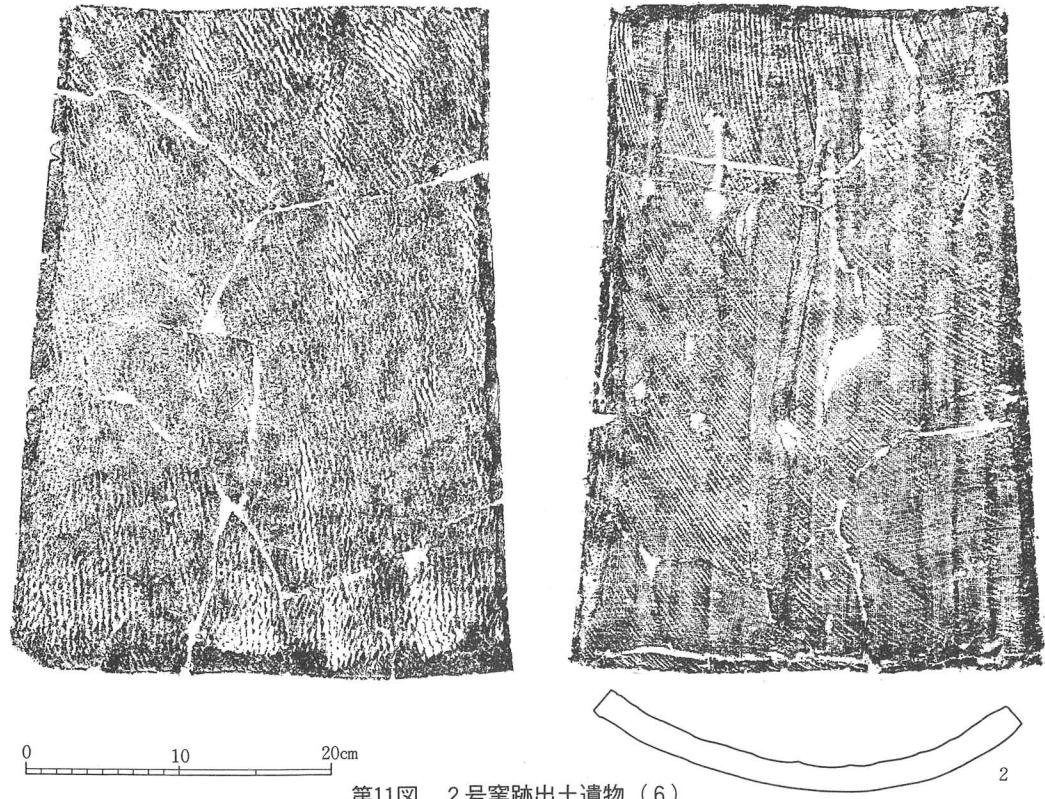
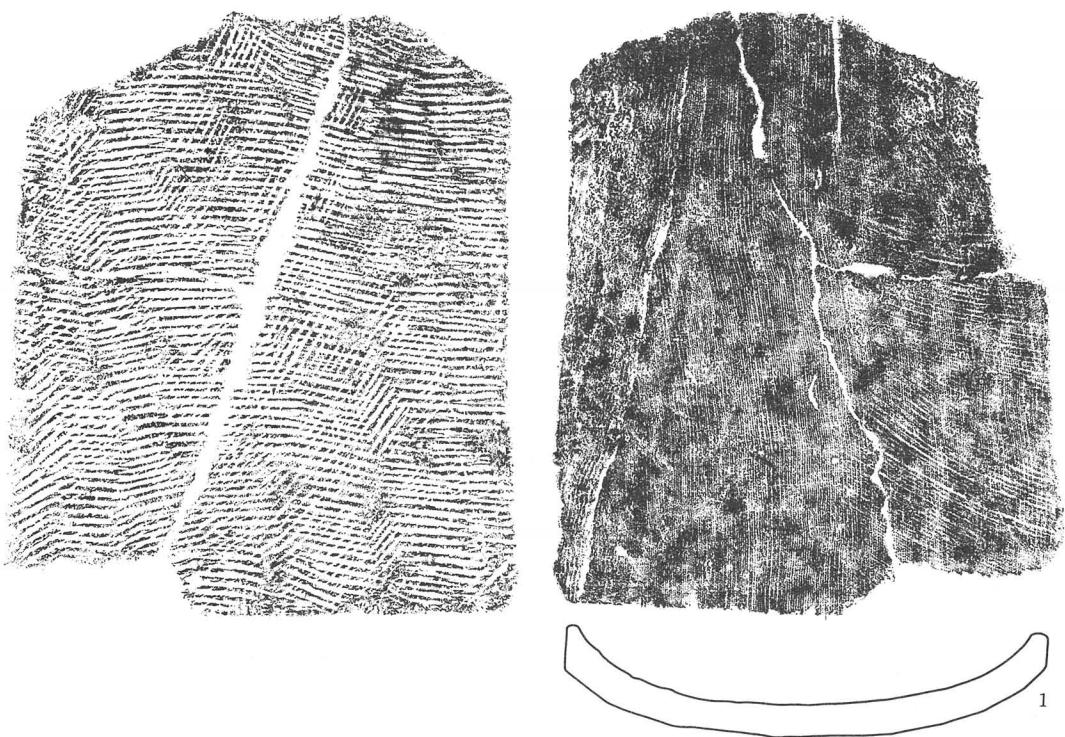
0 10 20cm

第9図 2号窯跡出土遺物(4)

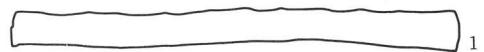
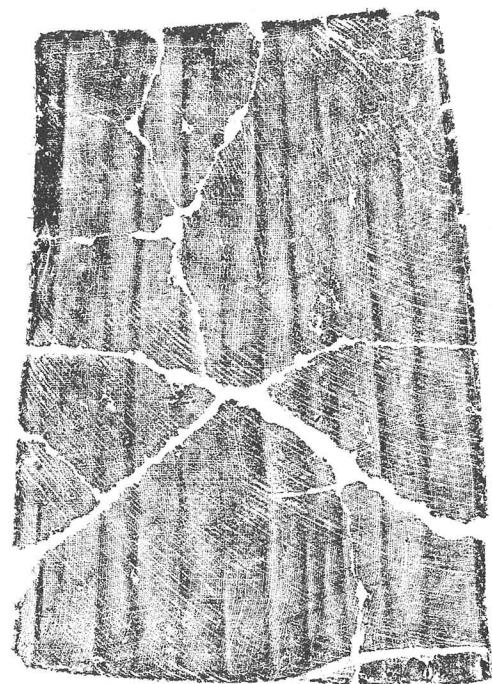


0 10 20cm

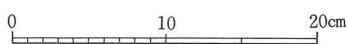
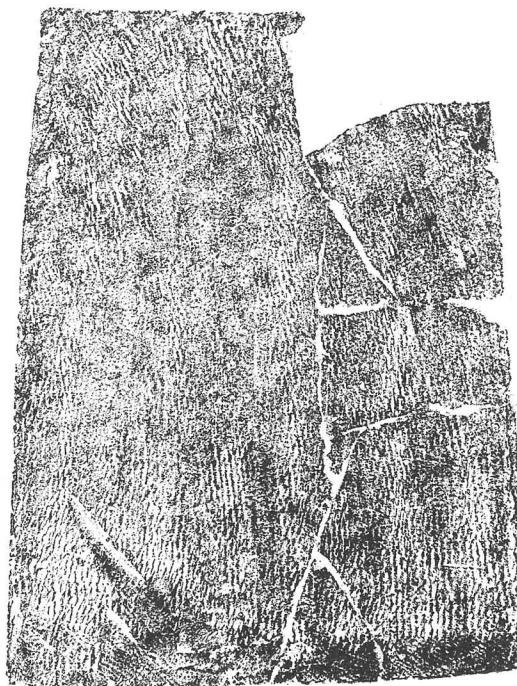
第10図 2号窯跡出土遺物 (5)



第11図 2号窯跡出土遺物 (6)



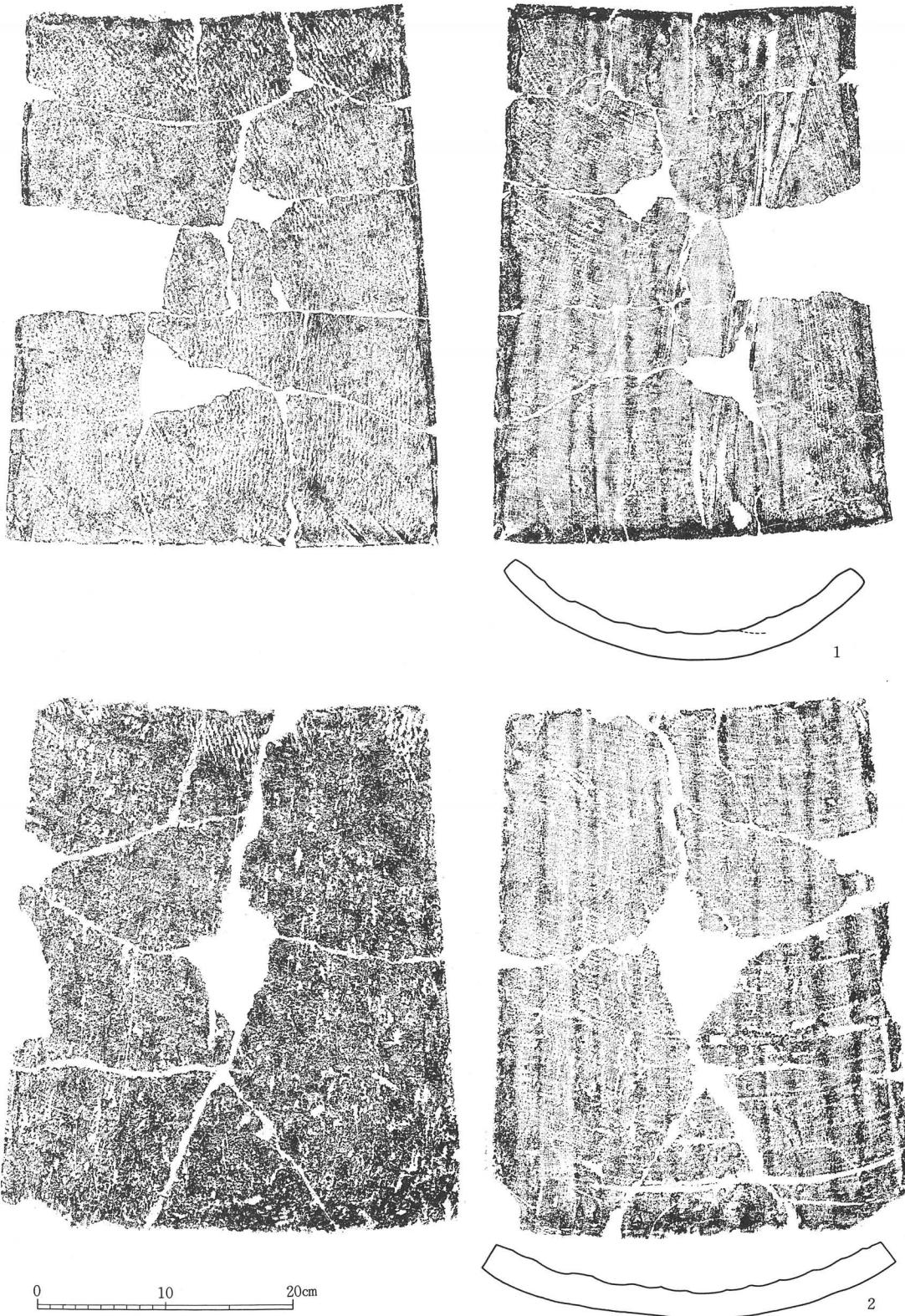
1



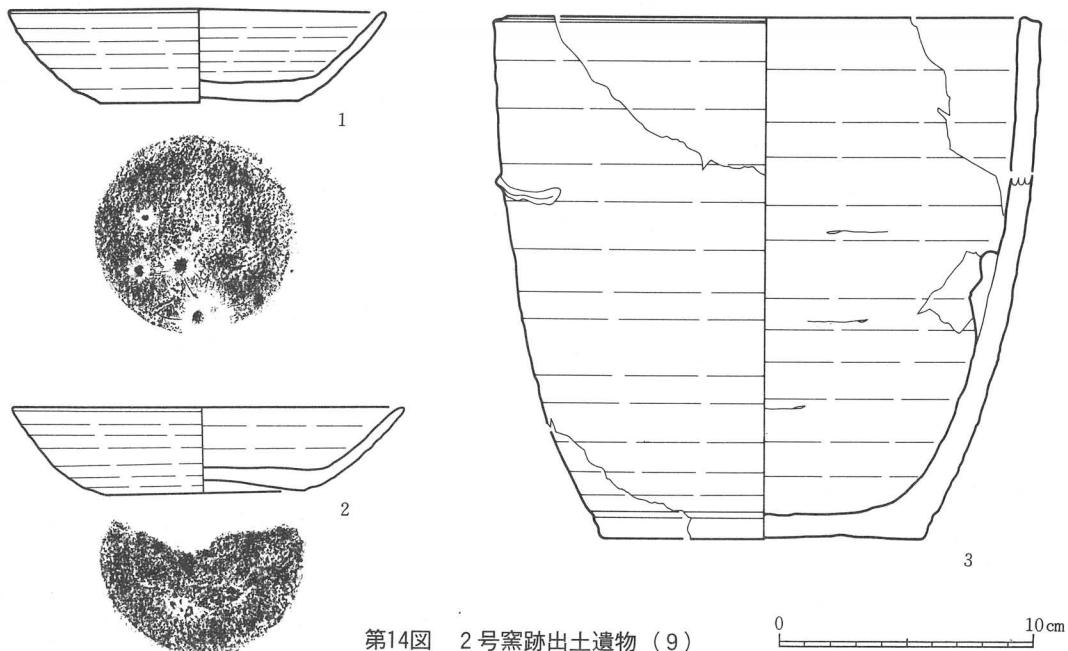
第12図 2号窯跡出土遺物 (7)



2



第13図 2号窯跡出土遺物 (8)



第14図 2号窯跡出土遺物 (9)

第1表 2号窯跡出土遺物観察表

番号	登録番号	種別	遺構・層位	瓦当文様	特徴		分類	備考	写真図版		
					凸面	凹面					
5-1	G a-41	軒平瓦	S O 2 燃成部 床面2段	ロクロ挽き重弧文	ナデ		II b				
5-2	G a-42	軒平瓦	S O 2 燃成部4層	ロクロ挽き重弧文	横方向のナデ		I c	段頸			
番号	登録番号	種別	遺構・層位	法量 cm	特徴				分類 写真図版		
				長さ 広端幅 狹端幅	凸面	凹面					
7-1	F b-1	丸瓦	S O 2 前庭部 排水No.5	37.4	12.4	平行叩き目A	糸切り痕、布目痕、両側縁へラケズリ		II a 20-1		
7-2	F b-2	丸瓦	S O 2 前庭部 排水No.7	36.2	15.0	平行叩き目A	糸切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、両側縁へラケズリ、凸型台圧痕		II a 20-2		
7-3	F b-3	丸瓦	S O 2 前庭部 排水No.2	(34.7)	14.3	平行叩き目A	糸切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、布縦じ痕、両側縁へラケズリ		II a 20-3		
7-4	F b-4	丸瓦	S O 2 前庭部 排水No.1	(33.6)	18.0	平行叩き目A→スリ消し	糸切り痕、布目痕、布縦じ痕、両側縁へラケズリ、凸型台圧痕		II a 21-1		
8-1	F b-5	丸瓦	S O 2 南部カクラン	(36.2)		平行叩き目A→スリ消し	糸切り痕、布目痕、両側縁へラケズリ、凸型台圧痕		II a 21-2		
8-2	F b-7	丸瓦	S O 2 前庭部 排水No.9	(33.0)	19.8	繩叩き目→スリ消し、両側縁へラケズリ	糸切り痕、布目痕、両側縁へラケズリ		III 21-3		
8-3	F b-11	丸瓦	S O 2 前庭部 排水No.6	(28.2)	18.2	繩叩き目→スリ消し、両側縁・広端面 へラケズリ	糸切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、一部タテ 両側縁へラケズリ		III 22-2		
8-4	F b-10	丸瓦	S O 2 前庭部 排水No.3	(26.2)		繩叩き目→スリ消し、両側縁へラケズリ	糸切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、粘土板合わせ 目痕		III 22-1		
9-1	F b-8	丸瓦	S O 2 燃成部 床面	40.1	20.4	繩叩き目→スリ消し (へラケズリ)	糸切り痕、布目痕、布合わせ目痕、両側縁・広狭 端縁へラケズリ		III 23-1		
9-2	F b-9	丸瓦	S O 2 燃成部 床面	39.2		繩叩き目→スリ消し、両側縁へラケズリ	糸切り痕、布目痕、布合わせ目痕、両側縁へラ ケズリ		III 23-2		
9-3	F b-14	丸瓦	S O 2 11層、床面、床直	(37.8)	17.2	繩叩き目→スリ消し、両側縁・広狭端 面へラケズリ	糸切り痕、布目痕、両側縁・広狭端縁へラケズリ		III 23-3		
9-4	F b-15	丸瓦	S O 2 4層、床面、床直	(23.2)	18.9	繩叩き目→スリ消し、右側縁へラケズ リ	糸切り痕、布目痕、両側縁・広狭端縁へラケズリ		III 23-4		
10-1	G b-1	平瓦	S O 2 前庭部 6層	45.2		平行叩き目A、両側面へラケズリ	糸切り痕、布目痕、横骨痕、粘土板合わせ目痕→ ナデ、広狭端面右隅切り	II a	20-4		
10-2	G b-2	平瓦	S O 2 前庭部 南部カクラン	(38.4)	32.8	平行叩き目A、両側面へラケズリ	糸切り痕、布目痕、両端面隅切り	II a	20-5		
11-1	G b-4	平瓦	S O 2 前庭部 7層	(40.6)	32.5	平行叩き目A、両側面へラケズリ	糸切り痕、布目痕、布縦じ痕、広端面左隅切り	II a	20-6		
11-2	G b-10	平瓦	S O 2 燃焼部5層上	44.6	30.6	25.8	糸切り痕、布目痕、模骨痕、両側縁・狭端縁へラ ケズリ、一部にナデ	III a	21-4		
12-1	G b-20	平瓦	S O 2 燃焼部5層上	44.7		繩叩き目→スリ消し、右側縁へラケズ リ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、両側縁・広狭端縁へ ラケズリ	III a	21-5		
12-2	G b-26	平瓦	S O 2 燃焼部 5層上	45.6	31.8	繩叩き目→スリ消し、両側縁へラケズ リ、広端縁平行叩き目C	糸切り痕、布目痕、模骨痕、粘土板合わせ目痕、 一部ナデ、両側縁・広狭端縁へラケズリ	III b	22-6		
13-1	G b-33	平瓦	S O 2 燃成部 床直			繩叩き目→スリ消し、両側縁へラケズ リ、広端縁平行叩き目C	糸切り痕、布目痕、模骨痕、粘土板合わせ目痕、 一部ナデ、両側縁・広狭端縁へラケズリ	III b	22-7		
13-2	G b-21	平瓦	S O 2 燃焼部5層上 南部カクラン	41.5	34.2	29.5	糸切り痕、布目痕、模骨痕、両側縁へラケズ リ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、両側縁へラケズリ	III d	23-5	
番号	登録番号	種別	器形	遺構・層位	法量 cm	外 面 調 整		内 面 調 整	分類 残存 写真図版		
					口径 底径	器高					
14-1	E -1	須恵器	壺	S O 2 燃成部 1層	14.9	7.8	3.7	ロクロナデ、底部回転へ ラ切り、自然釉付着	ロクロナデ	5/6	23-7
14-2	E -2	須恵器	壺	S O 2 燃成部 1層	15.7	8.0	3.6	ロクロナデ、底部回転へ ラ切り	ロクロナデ	3/5	23-8
14-3	E -3	須恵器	甕	S O 2 燃成部 1層	21.6	20.8	12.6	ロクロナデ、底部手持ち へラケズリ、ナデ、自然 釉、窓の溶塊付着	ロクロナデ、輪積み痕、 自然釉、窓の溶塊付着	4/5	23-9

1.3m、奥幅で1.25mを測り、床面は傾斜角度6°とほぼ平坦である。天井部は崩壊しており、側壁は約1.2mの高さまで残存する。床面に薄い炭化層が堆積する以外は崩壊土である。

前庭部 平面形は方形を呈するが南側は後世の攪乱のため壊されている。前庭部床面での規模は残存長約2m、最大幅3.3mを測る。側壁に沿って幅10~20cmの周溝が巡っており、さらに、燃焼部南半の西壁沿いから前庭部にかけては、丸瓦8点が直線上に埋設された排水施設が検出された。この施設は幅20~30cmの溝の中に、凸面を上にした8点の丸瓦を接続して重ねて埋設したものである。丸瓦はいずれも無段の丸瓦であり、丸瓦II類とIII類が交互に重ねられており、南端の丸瓦2点は攪乱のため折れ曲がっている。

床面はほぼ平坦であり、傾斜角度は約6°である。また、前庭部の第13層中で平瓦が一面に検出され、第14層も床面と考えられ、前庭部には2つの床面が検出された。さらに焚口付近の前庭部壁面の一部は焼けて赤変しており、床面や周溝内に黄褐色粘土や焼土の塊がみられた。

〔遺物の出土状況〕 焼成部から前庭部第13層中にかけてほぼ一面に平瓦の破片が密集して出土しており、一括廃棄された様相を示している。これらの瓦はすべて破片であるが前庭部出土の平瓦は接合して完形品となるものもあり、焼成部床面に施設された瓦とほとんど同じもので平瓦III類である。また、前庭部床面では平瓦IIa類のほぼ完形品のものが出土している。

〔出土遺物〕 遺物は瓦総数1,054点と須恵器3点が出土している。瓦は大部分平瓦であり、96.3%を占める1,015点が出土し、その他丸瓦53点とロクロ挽き重弧文軒平瓦3点がある。

軒平瓦 ロクロ挽き重弧文軒平瓦の破片が3点で、軒平瓦Ia類とII類がある(第5図)。G a-41は焼成部の床面の2段目に施設されている。

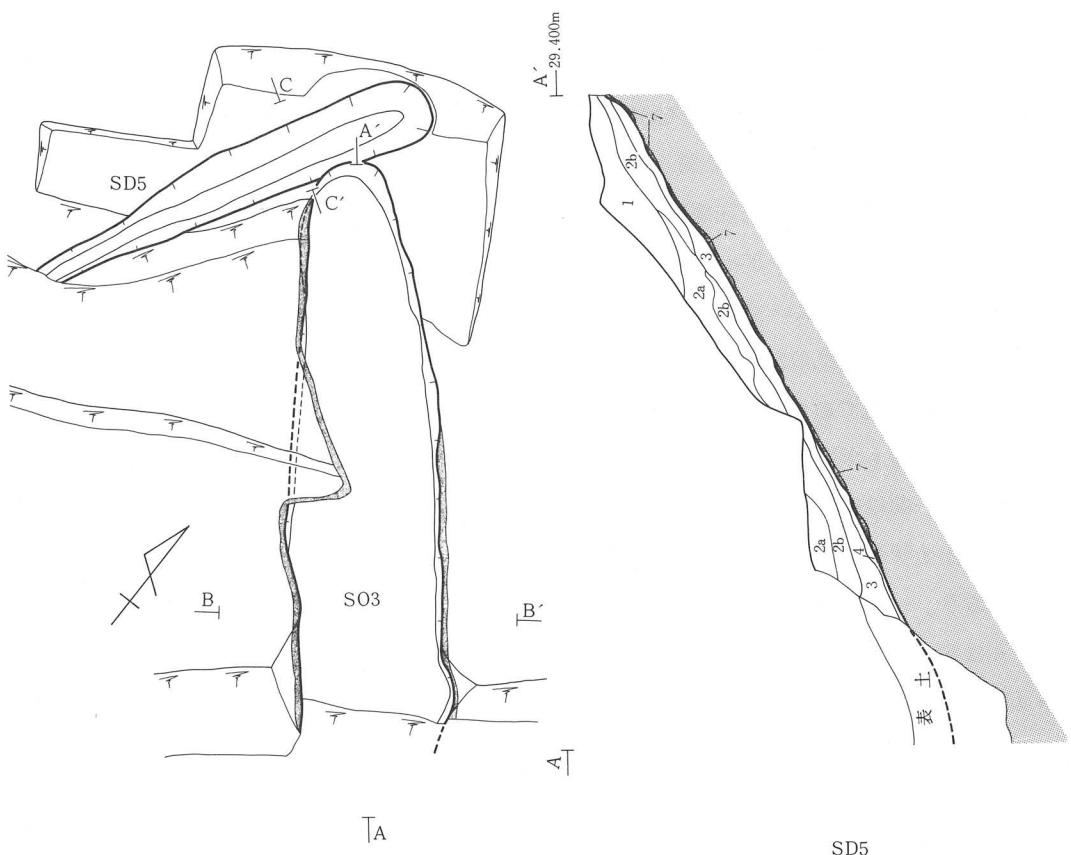
平瓦 すべて粘土板巻き作りの平瓦で、1,015点が出土している。凸面の叩き目の種類により平瓦I~V類が出土している。その中でも凸面が縄叩き目後スリ消しがされている平瓦III類は、焼成部から前庭部のほぼ全面に出土しており、出土した平瓦の94.8%を占める962点が出土している。

丸瓦 すべて粘土板巻き作りの無段丸瓦で、53点が出土し、凸面の叩き目の違いにより丸瓦II~IV類がある。排水施設出土のものは凸面が平行叩き目のII類と縄叩き目後スリ消しのIII類の丸瓦が交互に施設されている。焼成部の床面ではIII類あるいは全面ヘラケズリのIV類がある。

3号窯跡(SO3)(第15・16図)

〔遺構の確認〕 調査区A区の中央付近の白色粘土層で検出された窯跡で、1号窯跡と2号窯跡の中間に位置している。

〔構造・規模〕 半地下式の窯で、残存する規模は長さ4.5m、幅1.2mを測る。焼成部から奥壁にかけて検出され、煙道部、燃焼部はすでに壊されている。窯体の主軸方向はN-44°-W



SD5



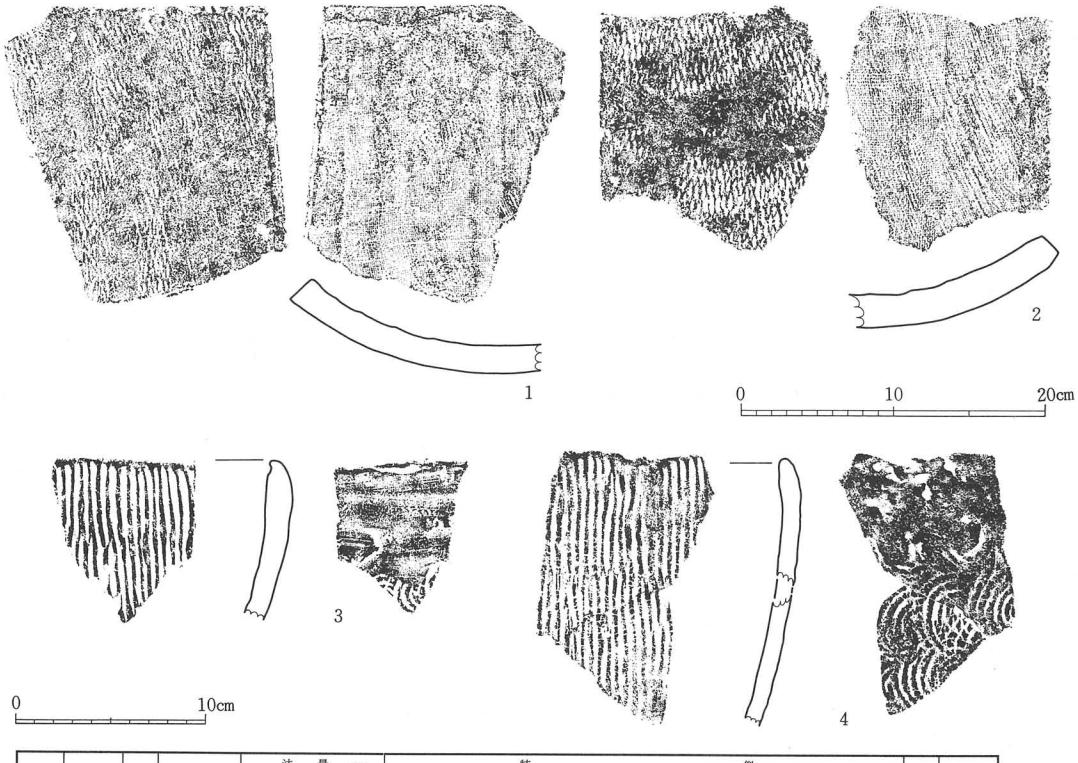
SO3

層位	土 色	土 性	備 考
1	10Y R5/6 黄褐色	砂質シルト	2~5mmの焼土粒を含む
2 a	2.5Y7/3 浅黄色	シルト	
2 b	2.5Y7/3 浅黄色	シルト	2~10mmの焼土粒を含む
3	2.5Y7/3 浅黄色	シルト	焼土粒を多量に含む
4	2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	
5	10Y R7/6 明黄色	シルト	窯壁が焼けて変色している
6	2.5Y5/3 黄褐色	粘土質シルト	窯壁
7	5Y7/3 浅黄色	シルト	

SD5

層位	土 色	土 性	備 考
1 a	2.5Y6/6 明黄色	粘 土	2.5Y7/6明黄褐色粘土の小ブロックを混入
1 b	2.5Y6/6 明黄色	粘 土	1a層より2.5Y7/6明黄褐色粘土を少量含む
1 c	2.5Y6/6 明黄色	粘 土	

第15図 3号窯跡・5号溝跡



番号	登録番号	種別	遺構・層位	法量 cm			特徴		分類	写真図版
				長さ	広端幅	狭端幅	凸面	凹面		
16-1	G b-65	平瓦	S O 3 堆積土				縄叩き目→スリ消し、側縁ヘラケズリ	系切り痕、布目痕、横骨痕、側縁・狭端縁ヘラケズリ	III a	
16-2	G b-66	平瓦	S O 3 堆積土				縄叩き目→横方向スリ消し、側縁ヘラケズリ	系切り痕、布目痕、横骨痕、側縁ヘラケズリ	III f	

番号	登録番号	種別	器形	遺構・層位	法量 cm			外 面 調 整	内 面 調 整	分類	残存	写真図版
					口径	底径	器高					
16-3	E-237	須恵器	鉢	S O 3 焼成部 堆積土				平行叩き目文	同心円文、ナデ		1/4	
16-4	E-239	須恵器	鉢	S O 3 3層				平行叩き目文	同心円文、ナデ		1/3	

第16図 3号窯跡出土遺物

である。

〔堆積土〕 4層に分けられる。1層は黄褐色砂質シルト、2層は全体に厚く20~40cmで堆積する浅黄色シルトで小さな焼土粒を含んでいる。3層は奥壁から焼成部中央の床面を覆う浅黄色シルトの層で、ほぼ全体に約10~20cmの厚さで堆積し、大粒の焼土粒が多く含まれている。4層は焼成部中央から燃焼部側にかけての床面に薄く堆積するオリーブ褐色粘土質シルトで大粒の焼土粒を含む層である。

〔焼成部〕 残存する規模は長さ4.5m、最大幅1.2mで遺存状況は良くない。焼成部中央付近は大きな木の根があり、重機による掘削時に西側の壁から床面にかけて破壊された。壁は床面より約50cm残存しており、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は軟らかな床で、橙色に変色した部分と橙色の焼土が斑点状に混じる淡黄色の粘土質シルト部分とがあり、あまり焼けた状態ではない。床面の傾斜角度は26~30°と比較的急傾斜であり、標高は奥壁で29m、残存する焼成部南端

で26.7mを測り、床面の比高差は2.3mである。

〔その他の施設〕 奥壁の北側に接して5号溝跡が検出されており、幅20～50cm、長さ3.4mで西側に延びている。この溝跡は排水溝と考えられ、堆積土は明黄褐色粘土で溝の壁面は焼けている。

〔出土遺物〕 僅かに堆積土より平瓦III類の破片3点と焼成不良の須恵器甕片が出土している。

4号窯跡（S O 4）（第17～22図）

〔遺構の確認〕 調査区B区の西端で検出された窯跡で、東側に5号窯跡が位置している。標高は確認された前庭部床面で30.6m、焼成部の床面で30.9mである。

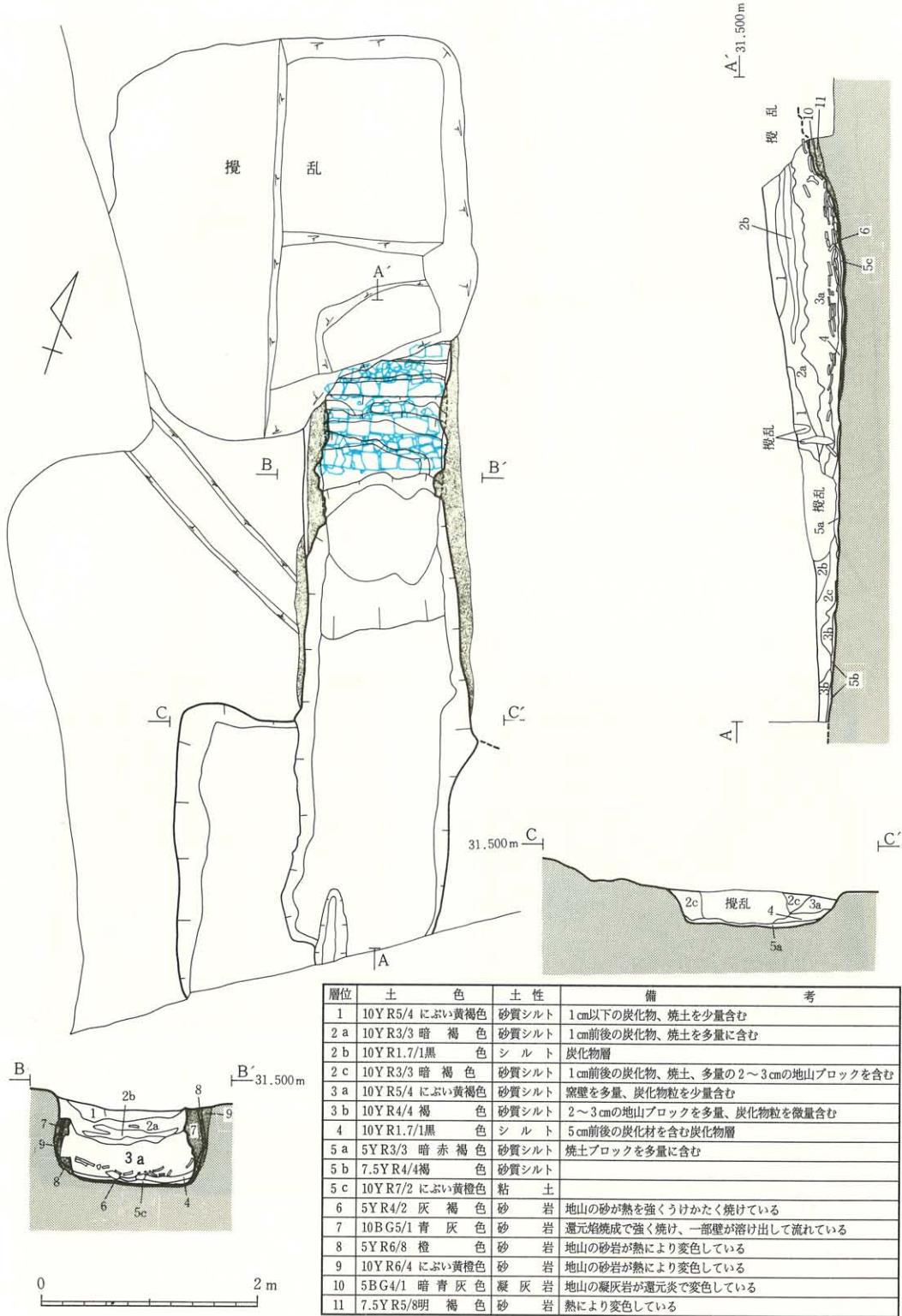
〔重複〕 大蓮寺の本堂や7×7mの方形の大きな攪乱により、焼成部と煙道部のほとんどが壊されている。

〔構造・規模〕 地山の砂岩を割り抜いた地下式の窯窓であり、窯体上半部は削平されている。残存する規模は長さ約5mで、焼成部の一部・燃焼部・前庭部が検出されている。焼成部は階段状の床面が6段検出され、その他は攪乱穴のため壊されており、前庭部も調査区南側へと延びる。窯跡の主軸方向はN-16°-Wである。

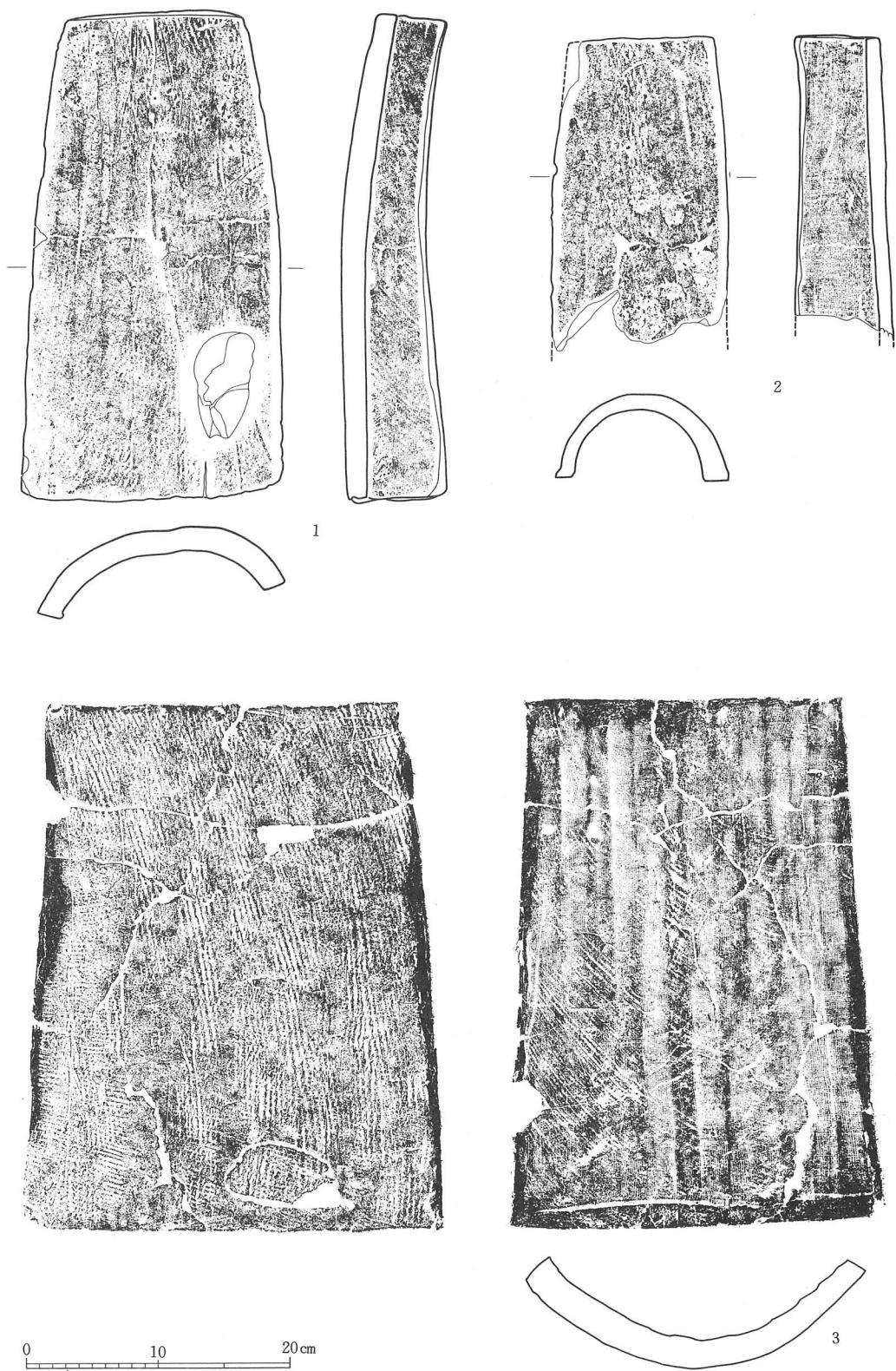
〔堆積土〕 堆積土は5層に大別され、そのほとんどは崩壊土、流入土である。1層はにぶい黄褐色砂質シルトである。2層は暗褐色・黒色の砂質シルトとシルトで2層に細分され、炭化物、焼土が混入する層である。2b層はブロック状に入る炭化物のみの層である。3層はにぶい黄褐色及び褐色の砂質シルトで、2層に細分される。3a層は燃焼部から焼成部にかけて分布し、地山の天井部が一気に崩壊した層である。層中には窯壁や天井部の崩壊土が混じり、下部に多量の瓦が混入している。層厚は20～40cmを測る。3b層は前庭部に薄く堆積する層である。4層は薄い黒色シルトで、炭化材を含む炭化物の層で燃焼部に堆積している。5層は3層に細分され、床面を覆っている層で薄く堆積している。5a層は焼土層、5b層は焼土を含む褐色シルトである。5c層はにぶい黄褐色の灰層で燃焼部に薄く堆積している。

〔焼成部・燃焼部・前庭部〕

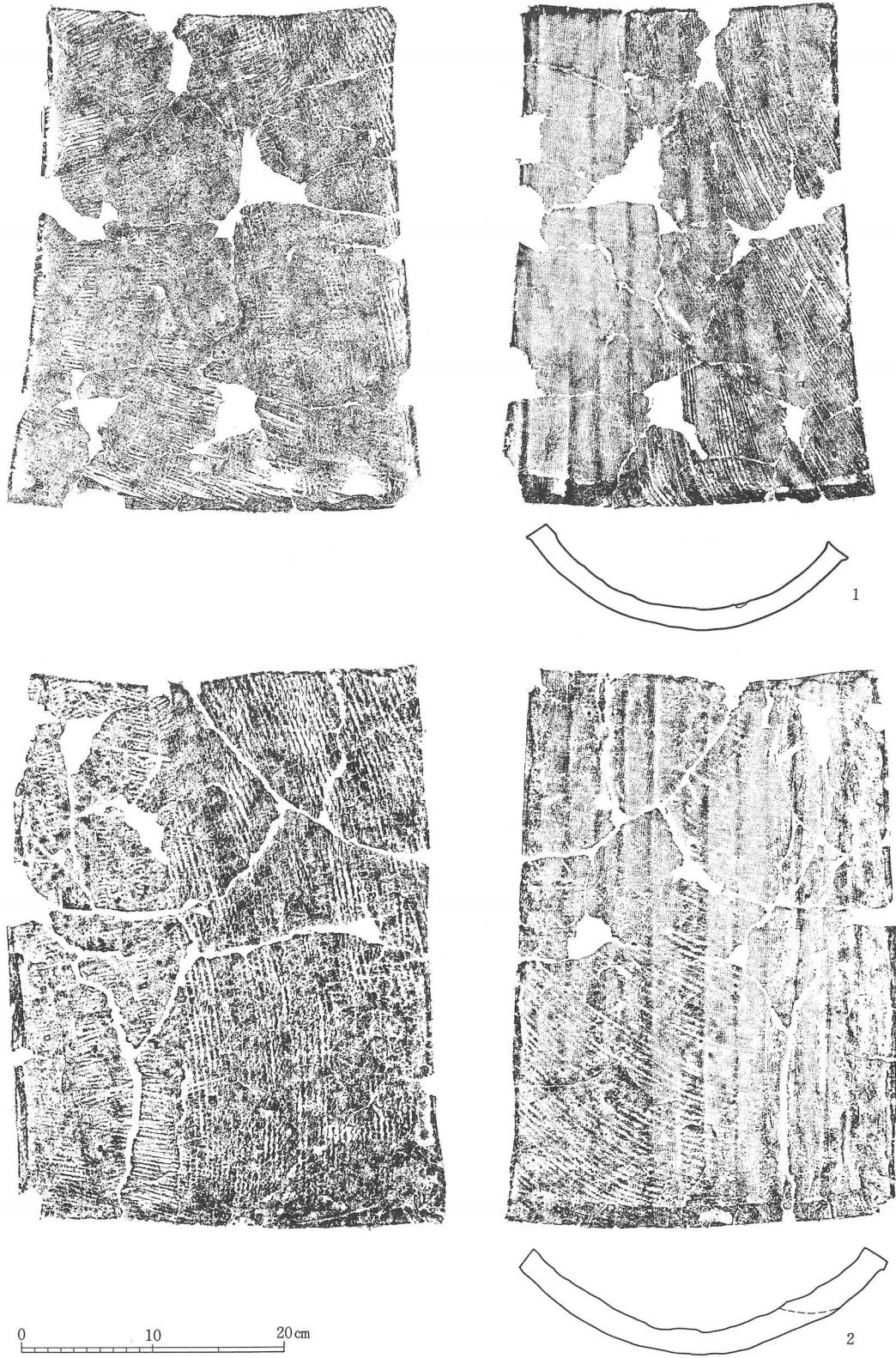
焼成部 残存する規模は、長さ約1.2m、幅約1.1mを測る。側壁は高さ60～70cmで、それより上はすでに削平されている。床面は階段状に6段が検出されたが、2号窯跡のように整然としているものではなく、高さが5～10cm、奥行10～30cmでやや不規則である。さらに、この階段上には丸瓦・平瓦を小さく分割し、二重に重ねて平坦に敷き詰めて4段としている。段の奥行は約30cmであり、手前側には大きな瓦を横に置き、奥に小さい瓦を敷いている。焼成部床面の傾斜角度は18°である。燃焼部から焼成部にかけての床面・側壁は強く焼け、青灰色・暗青灰色に還元している。側壁は一部高温のため溶けて流れ出している。



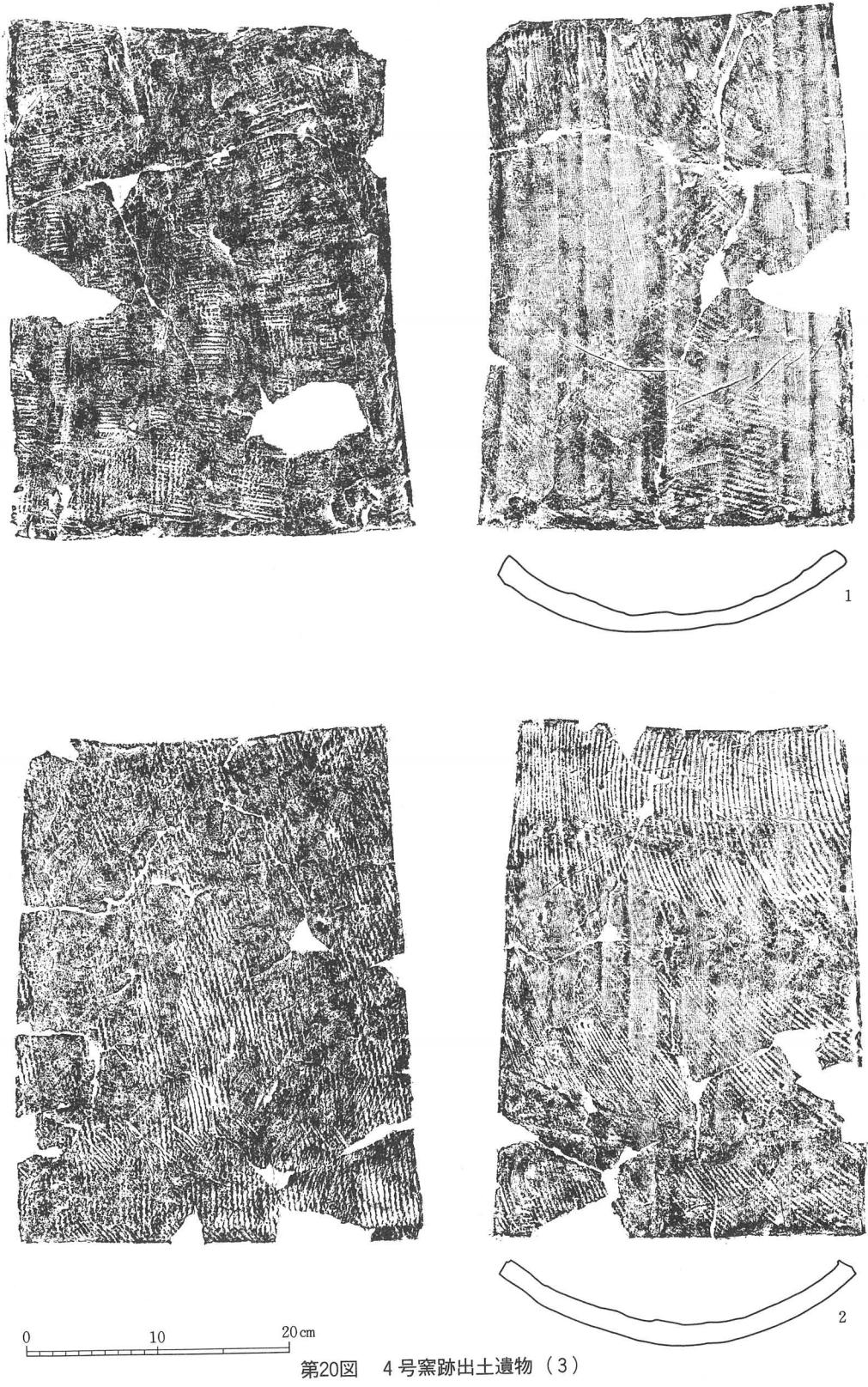
第17図 4号窯跡



第18図 4号窯跡出土遺物（1）



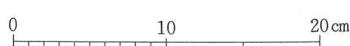
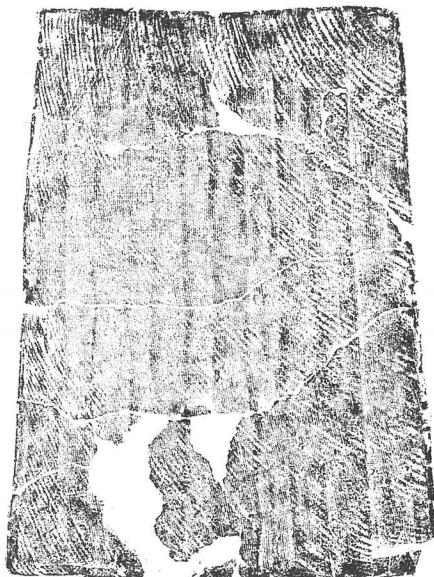
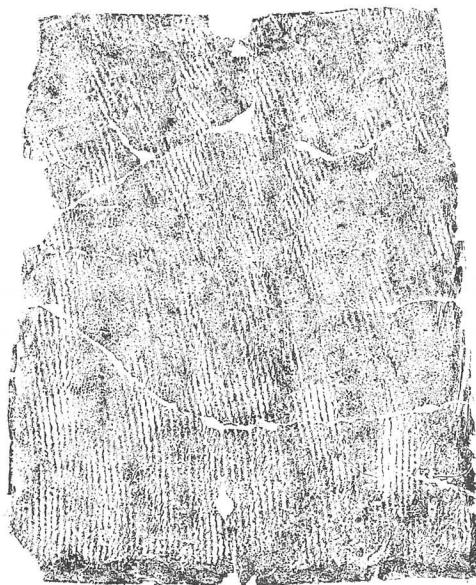
第19図 4号窯跡出土遺物（2）



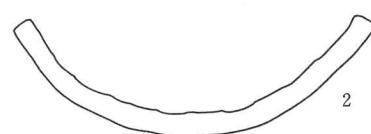
第20図 4号窯跡出土遺物（3）



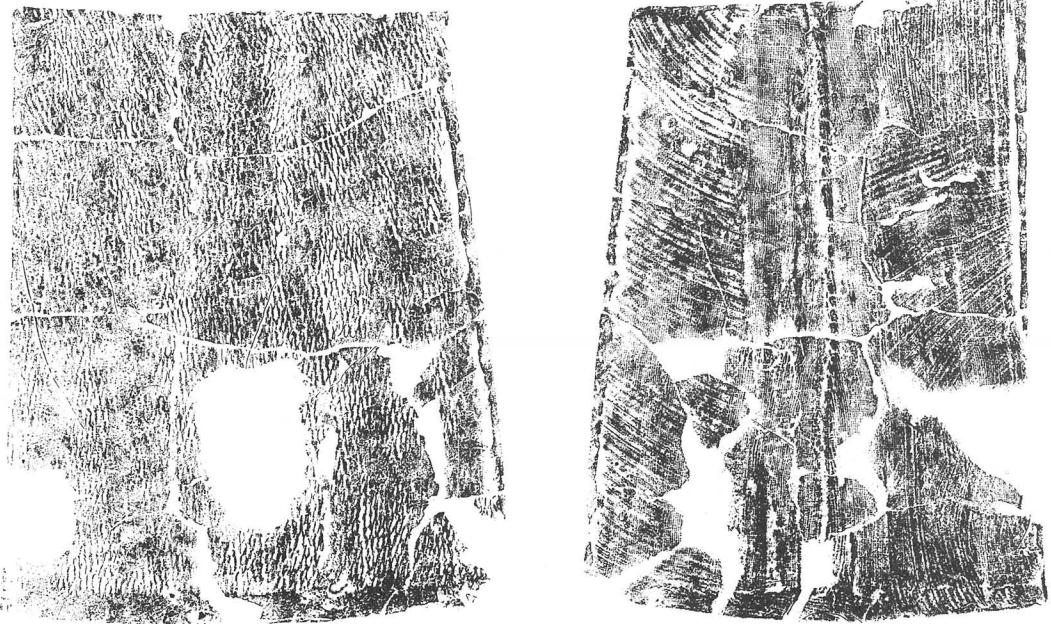
1



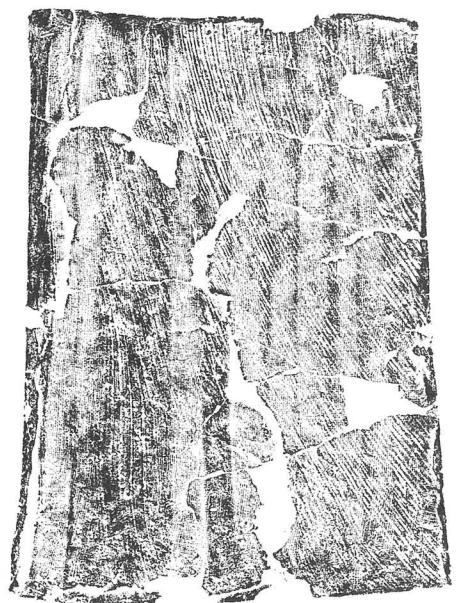
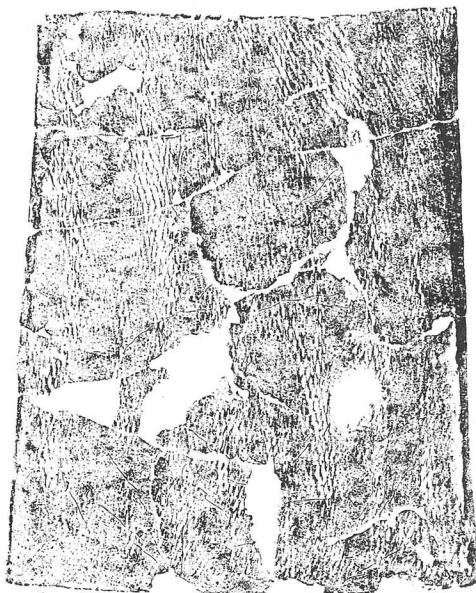
第21図 4号窯跡出土遺物 (4)



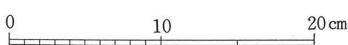
2



1



2



第22図 4号窯跡出土遺物（5）

第2表 4号窯跡出土遺物観察表

番号	登録番号	種別	遺構・層位	法量 cm			特徴	分類	写真図版
				長さ	広端幅	狭端幅			
18-1	F b-25	丸瓦	S O 4 焼成部床面 施設部段目	37.7	19.7	13.6	縄叩き目→スリ消し、両側縁へラケズリ	糸切り痕、布目痕、布合わせ目痕、側縁へラケズリ	III 24-1
18-2	F b-29	丸瓦	S O 4 焼成部 3 a層下部	(24.1)	-	10.5	縄叩き目→スリ消し、両側縁へラケズリ	糸切り痕、布目痕、布合わせ目痕、粘土板合わせ目痕	III
18-3	G b-72	平瓦	S O 4 焼成部 3 a層	40.5	28.5	22.3	縄叩き目→スリ消し→平行叩き目C、両側縁へラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、両側縁・狭端縁へラケズリ	III c 24-3
19-1	G b-73	平瓦	S O 4 焼成部・燃焼部 3 a層下部	39.1	26.2	22.7	縄叩き目→スリ消し→平行叩き目C、両側縁へラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、両側縁へラケズリ	III c 24-5
19-2	G b-75	平瓦	S O 4 焼成部・燃焼部 3 a層下部	43.0	28.0	26.4	縄叩き目→スリ消し→平行叩き目C	糸切り痕、布目痕、模骨痕、粘土板合わせ目痕、両側縁・狭端縁へラケズリ	III c 24-4
20-1	G b-74	平瓦	S O 4 焼成部床面施設瓦 焼成部・燃焼部 3 a層下部	40.3	27.6	26.6	縄叩き目→スリ消し→平行叩き目C、両側縁・狭端縁へラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、両側縁・広狭端縁へラケズリ	III c 24-6
20-2	G b-77	平瓦	S O 4 焼成部・燃焼部 3 a層下部	40.0	29.1	27.1	縄叩き目→スリ消し→広端縁平行叩き目C、両側縁へラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、布綴じ痕、両側縁・広狭端縁へラケズリ	III b 24-8
21-1	G b-82	平瓦	S O 4 焼成部・燃焼部 3 a層下部	41.5	29.6	27.9	縄叩き目→スリ消し→両側斜・狭端縁へラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、布綴じ痕、両側縁・狭端縁へラケズリ	III a 25-1
21-2	G b-85	平瓦	S O 4 焼成部・燃焼部 3 a層下部	38.4	(26.3)	22.5	縄叩き目→スリ消し→両側斜・狭端縁へラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、布綴じ痕、両側縁・狭端縁へラケズリ	III a 25-4
22-1	G b-86	平瓦	S O 4 焼成部・燃焼部 3 a層下部・施設瓦	41.0	29.5	27.0	縄叩き目→スリ消し、両側縁へラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、粘土板合わせ目痕、布綴じ痕、両側縁・狭端縁へラケズリ	III a 25-6
22-2	G b-90	平瓦	S O 4 焼成部 3 a層下部・床直	39.7	28.4	24.9	縄叩き目→スリ消し、両側縁へラケズリ、広端縁一部ナデ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、両側縁・狭端縁へラケズリ	III a 25-8

燃焼部 前庭部との境が焚口と考えられ、壁面の焼けた範囲もこの付近から焼成部までである。

床面の下幅で1.2m、壁の高さ30cmを測る。焚口より焼成部の段までの部分が燃焼部であり、長さ2.3m、幅約1.2mを測り、側壁は約30~70cmの高さまで残存する。床面の傾斜はほぼ水平であり、中央部から奥にかけて長さ1.4m、幅1.2mの長方形状の範囲は僅かに窪んでいる。

前庭部 前庭部は、燃焼部の壁面・床面をそのまま南側に延長した部分と、その西側に一段高く段状となって幅1.1m、残存長2.7mの長方形状の部分からなる。東側は削平を受けているため不明であるが、西側同様のものがあったと考えられる。残存する前庭部の規模は、下幅2.5m、長さ2.7mを測る。底面の傾斜は燃焼部と同様にほぼ水平であるが、南側に向かって徐々に高くなっている。南端で幅30cm、深さ5cmの排水溝が検出され、さらに南側へ延びる。

〔遺物の出土状況〕 焼成部から燃焼部の床面直上にかけての狭い範囲に、平瓦・丸瓦片が密集して出土しており、一括廃棄されたものと考えられる。これらの瓦はすべて破片のまま折り重なるように出土している。接合されて完形品となるものもあり、焼成部床面に施設された平瓦や丸瓦とほとんど同じものである。

〔出土遺物〕 出土した遺物は平瓦311点、丸瓦64点の総数375点である。平瓦は粘土板巻き作りのもので、凸面に縄叩き目後スリ消しされるIII類がほとんどである。接合されてほぼ完形のものが27点あり、凹面には糸切り痕、布目痕、模骨痕、粘土板の合わせた痕跡、布の綴じ合わせ痕などが観察される。丸瓦は粘土板巻き作りの無段丸瓦がほとんどを占め、その他粘土紐巻き作り有段丸瓦の破片1点がある。粘土板巻き作りの無段丸瓦は、凸面が縄叩きされるIII類が多く、凸面がナデ、ヘラケズリされるIV類が次いでいる。

5号窯跡(S O 5) (第23~30図)

〔遺構の確認〕 調査区B区中央付近で検出された窯跡で、西側に4号窯跡が位置している。

標高は前庭部の床面で30.2m、焼成部奥の床面で31.5mである。

〔重複〕 大蓮寺の本堂が建てられていたために焼成部の一部・煙道部及びすべての天井部が

すでに削平されている。

〔構造・規模〕 地山の砂岩・凝灰岩を割り抜いた地下式の窯であり、4号窯跡同様上半部は削平を受け、残存する規模は約7mを測る。焼成部奥から煙道部にかけてはすでに壊されており、前庭部の一部は調査区外へと延びている。窯体の主軸方向はN-33°-Wである。

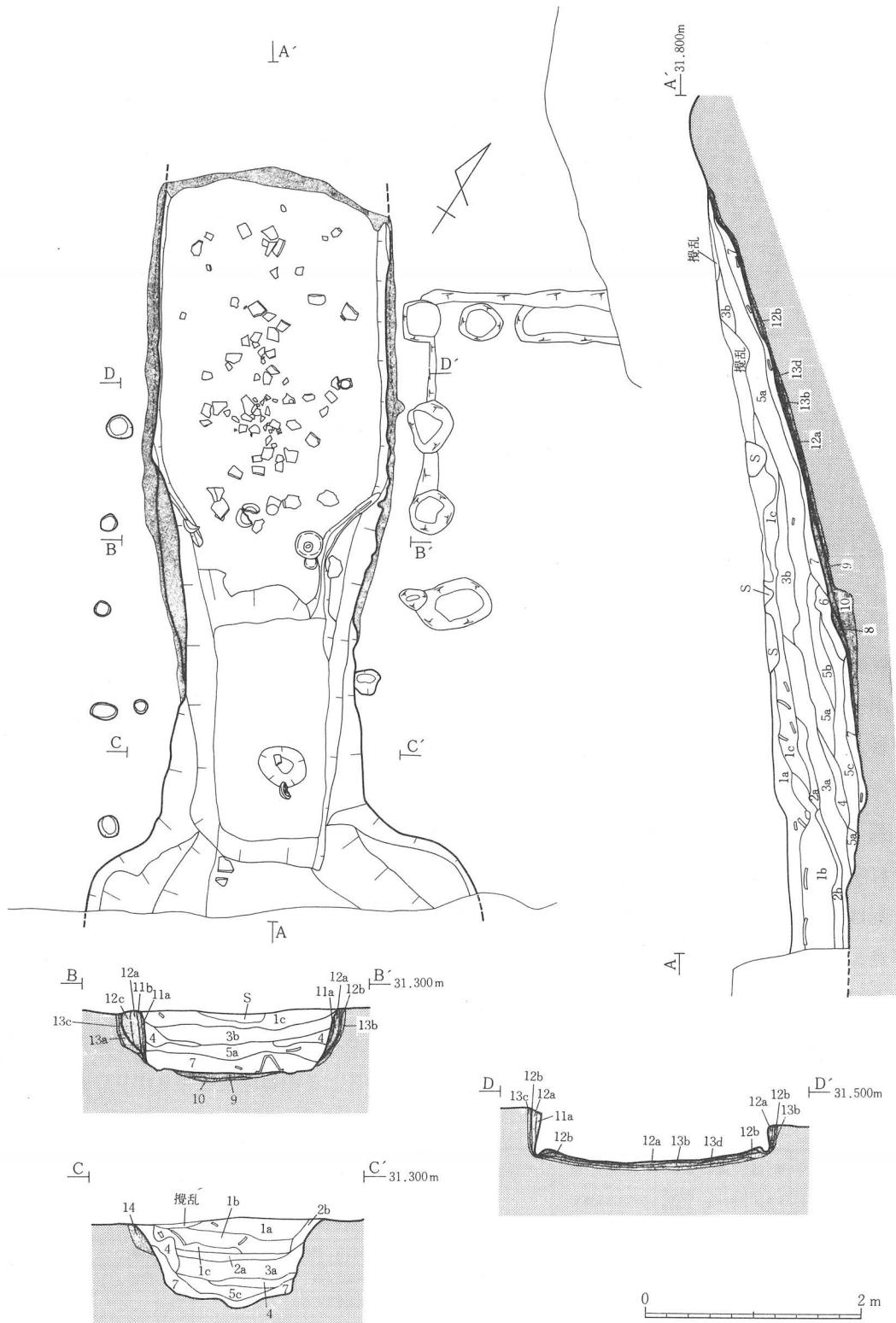
〔堆積土〕 堆積土は搅乱が著しいものの7層に大別される。1層は黒褐色粘土質シルトで、焼成部から前庭部にかけて分布し、炭化物、焼土、瓦片が含まれている。2・3層はにぶい黄褐色粘土質シルトで、焼成部から前庭部のほぼ全域に分布し、多量の炭化物や焼土、天井部崩壊土をブロック状に混入している。4・5層は黄褐色のシルト質粘土及び褐色・黄褐色粘土質シルトであり、5a層は焼成部から前庭部にかけて分布し、炭化物・焼土をブロック状に多量に混入している。燃焼部の5c層中より单弁八葉蓮華文軒丸瓦の破片1点が出土している。6層は燃焼部に分布する焼土の塊であり、7層は焼成部から燃焼部にかけて薄く堆積する黒褐色の灰層で炭化物を多く含み床面を覆っている層である。焼成部の5・7層より多量の須恵器坏・蓋や瓦の破片が多く出土している。

〔焼成部・燃焼部・前庭部〕

焼成部 焼成部床面は無段のもので、残存長3.8m、中央部幅約2.2mを測る。床面は凝灰岩をそのまま床面としている部分と粘土を張った部分とがあり、強く焼けて青灰色に還元している。横断面の床面形状は平坦ではなく、中央部がやや低く側壁に向かって徐々に高くなり、側壁下には幅5~10cmの排水溝が側壁に沿って両側に検出されている。焼成部と燃焼部は明瞭な境はないが、床面の傾斜角度が変化し、さらに壁が狭く排水溝が曲がる部分より北側が焼成部である。床面の傾斜角度は18°であり、標高は燃焼部との境の床面で30.4m、焼成部奥で31.5mである。燃焼部から焼成部にかけての平面形は羽子板状を呈する。側壁は高さ約50cmまでが残存しており、一部は高温のため溶けて流れ出している。西側壁の一部はスサ入り粘土で壁が補修されている。

燃焼部 前庭部との境が焚口と考えられ、床面での下幅約1m、壁は約60cmまで残存している。焚口より焼成部との床面の傾斜が変わる部分までが燃焼部である。燃焼部は長さ約2.5m、幅約1mの長方形形状を呈し、焼成部と前庭部よりやや窄んでいる。壁は高さ60~70cmまで残存しており、壁面は赤褐色に焼け、底面付近にも焼土の塊が多く堆積している。床面の傾斜角度は6°とほぼ平坦に近い。

前庭部 平面形は方形を呈し、残存する長さ約70cm、幅約3.7mで、南側調査区外に半分以上延びている。床面は長さ50cm、幅1.5mの不整形であり、深さは約50cmを測り、ほぼ平坦である。褐色の粘土が約10cmの厚さで壁際、床面付近に堆積している。



第23図 5号窯跡

5号窯跡土層註記表

層位	土色	土性	備考
1 a	7.5Y R3/1 黒	褐色	粘土質シルト 多量の炭化物、焼土粒を含む
1 b	7.5Y R3/1 黒	褐色	粘土質シルト 1 a 層よりも炭化物をブロック状に多く含む
1 c	10Y R3/2 黒	褐色	粘土質シルト 多量の炭化物、焼土粒を含む、瓦片を多く含む
2 a	10Y R5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト 地山の砂岩のブロックと炭化物・焼土粒の混合土	
2 b	10Y R5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト 炭化物、焼土粒を少量含む	
3 a	10Y R4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト 窯壁、天井部の崩壊土、多量の焼土ブロック、炭化物を含む	
3 b	10Y R4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト 窯壁、天井部の崩壊土、多量の焼土ブロック、炭化物を含む	
4	10Y R5/8 黄褐色	シルト質粘土 焼土をブロック状に含む	
5 a	7.5Y R3/3 暗褐色	粘土質シルト 炭化物、焼土をブロック状に含む	
5 b	7.5Y R3/3 暗褐色	粘土質シルト 5 a 層よりも炭化物、焼土を多量に含む	
6	5Y R5/6 明赤褐色	粘土質シルト 烧土の塊	
7	10Y R3/1 黒	褐色	粘土質シルト 多量の炭化物と灰を含む
8	5Y R3/6 暗赤褐色	シルト	酸化焰焼成された床面である
9	7.5Y R5/1 黒	灰色	部分的な貼り床で、還元焰を焼成され、変色している
10	2.5Y 7/3 浅黄色	砂	地山の砂岩のブロック層で、焼土、炭化層を少量含む
11 a	10B G6/1 青灰色	粘土	スザ入り粘土が還元焰焼成された窯壁である
11 b	2.5Y 8/1 灰白色	灰	さらさらとした灰層
12 a	5Y R2/3 暗赤褐色	砂岩	地山の砂岩が酸化焰焼成され赤変している
12 b	7.5Y R6/8 橙色	砂岩	地山の砂岩が酸化焰焼成され赤変している
12 c	7.5Y R6/6 橙色	粘土	窯壁の補修した粘土が赤変している
13 a	10B G6/1 青灰色	粘土	窯壁、還元焰焼成されている
13 b	7.5Y 8/1 灰白色	砂岩	地山の砂岩が熱変化のため変色している
13 c	7.5Y R5/6 明赤褐色	砂岩	地山の砂岩が熱変化のため変色している
13 d	2.5Y 7/3 浅黄色	凝灰岩	地山の砂岩が熱変化のため変色している
14	10Y R5/6 黄褐色	砂	若干熱変化のため変色している

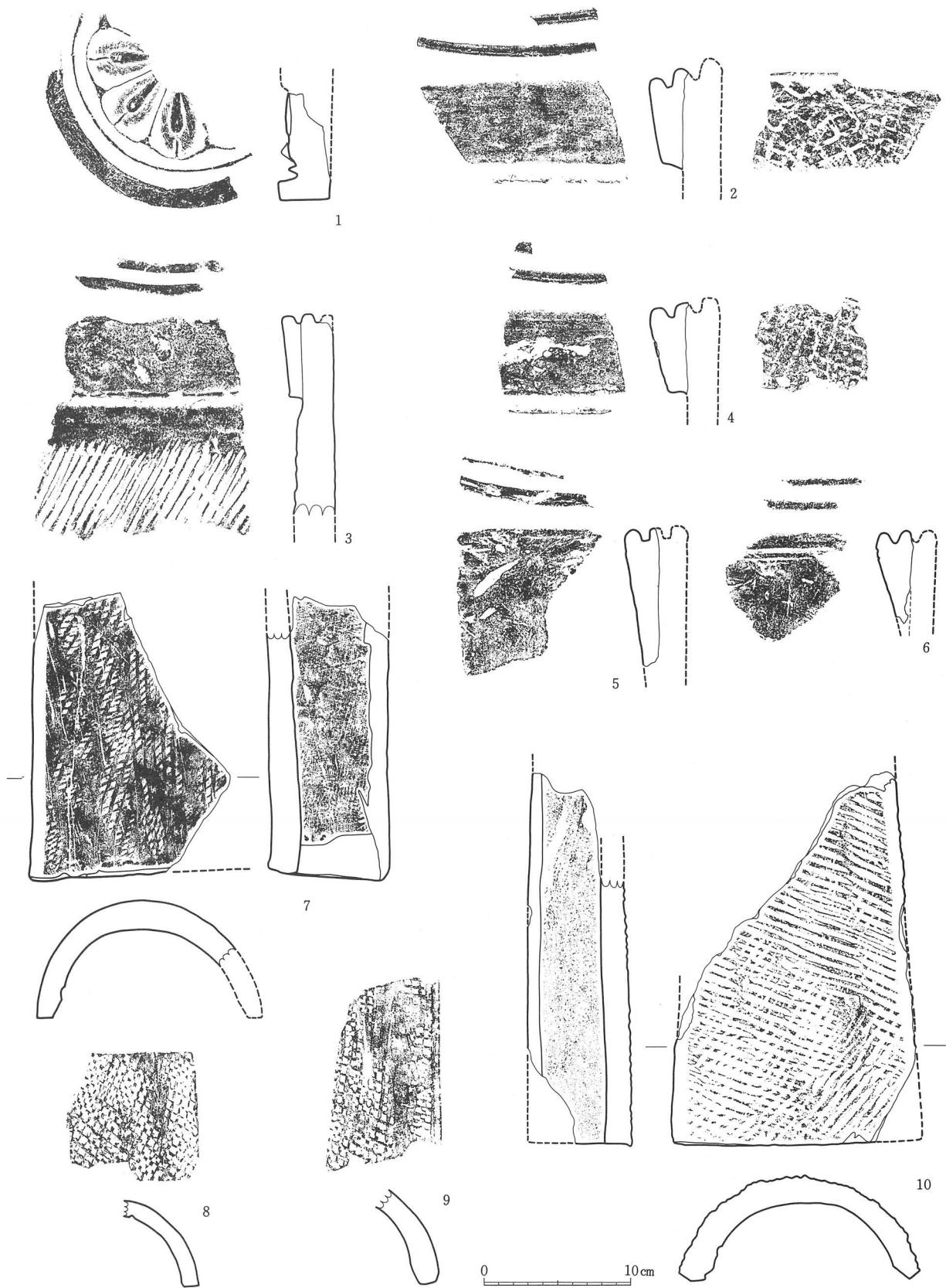
〔遺物の出土状況〕 遺物は焼成部から前庭部にかけて須恵器と瓦が出土している。須恵器は焼成部床面・床面直上から多くの壺・蓋が出土し、その他にすり鉢のほぼ完形品が倒立状態で出土している。瓦は焼成部から前庭部にかけて軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦が出土しており、軒丸瓦は燃焼部床面直上より出土した単弁八葉蓮華文軒丸瓦の破片1点がある。

〔出土遺物〕 遺物は瓦総数669点と須恵器291点が出土している。

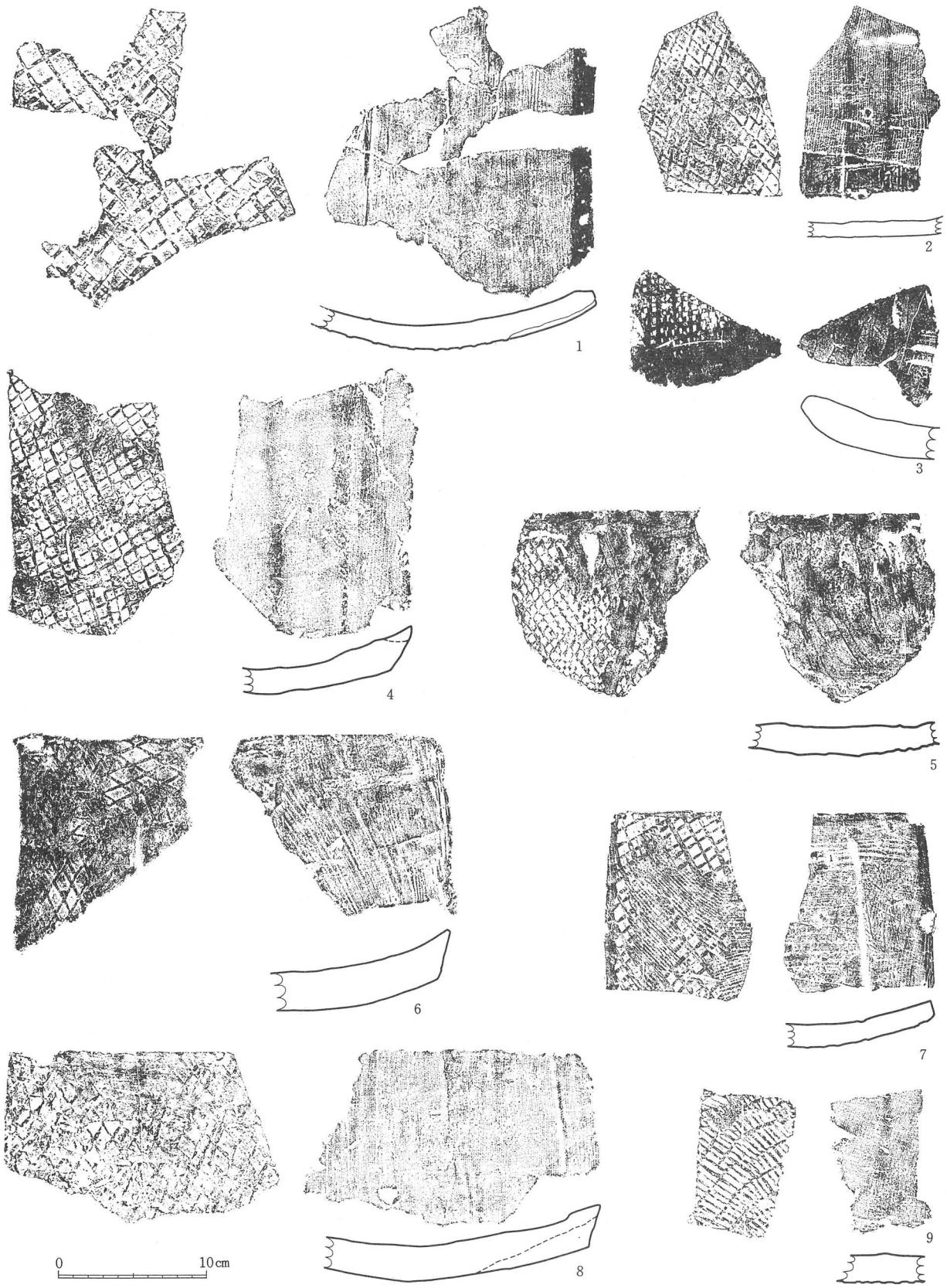
瓦 出土した瓦には軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦があり、その大部分は平瓦が占める。軒丸瓦は燃焼部床面直上より単弁八葉蓮華文軒丸瓦の破片1点と周縁部の破片2点が出土した。軒平瓦は焼成部から前庭部にかけてロクロ挽き重弧文軒平瓦の破片が16点出土し、軒平瓦I類が8点とII類5点の他、分類不可能なIII類3点がある。平瓦はすべて粘土板桶巻き作りのもので619点が出土している。凸面の叩き目の種類により平瓦I～V類が出土しており、凸面が平行叩き目のII類と繩叩き目後スリ消しのIII類が多く出土している。丸瓦は28点が出土し、ほとんど粘土板巻き作りの無段丸瓦で丸瓦I類～IV類が出土している。その他粘土紐巻き作りの有段丸瓦

第3表 5号窯跡出土遺物観察表(1)

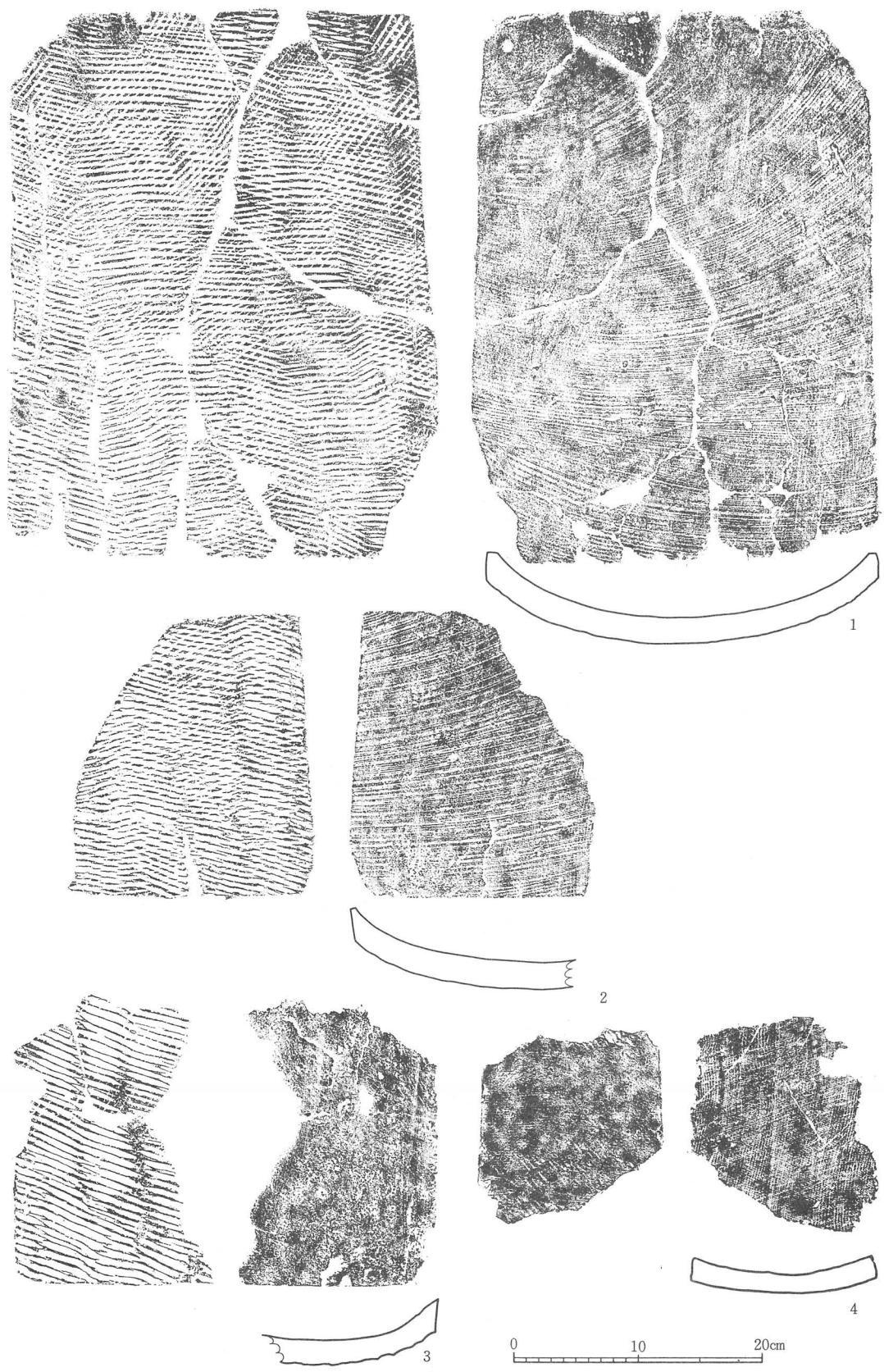
番号	登録番号	種別	遺構・層位	瓦当文様	特徴		分類	備考	写真図版
					凸面	凹面			
24-1	F a - 1	軒丸瓦	S O 5 焼成部 5 a 層	単弁八葉蓮華文			I b		26-1
24-2	G a - 3	軒平瓦	S O 5 焼成部 5 a 層	ロクロ挽き重弧文	横方向のナデ	刺離面正格子叩き目A・B	I a	段類	26-3
24-3	G a - 6	軒平瓦	S O 5 前庭部 1層	ロクロ挽き重弧文	腹部横方向のナデ、平行叩き目A	布目痕、模骨痕	I b	段類	26-2
24-4	G a - 4	軒平瓦	S O 5 焼成部 5 a 層	ロクロ挽き重弧文	腹部横方向のナデ	刺離面正格子叩き目B	I a	段類	
24-5	G a - 10	軒平瓦	S O 5 前庭部 1層	ロクロ挽き重弧文	ナデ	刺離面平行叩き目C	II a		
24-6	G a - 9	軒平瓦	S O 5 焼成部 堆1層	ロクロ挽き重弧文	ナデ	刺離面平行叩き目C	II a		



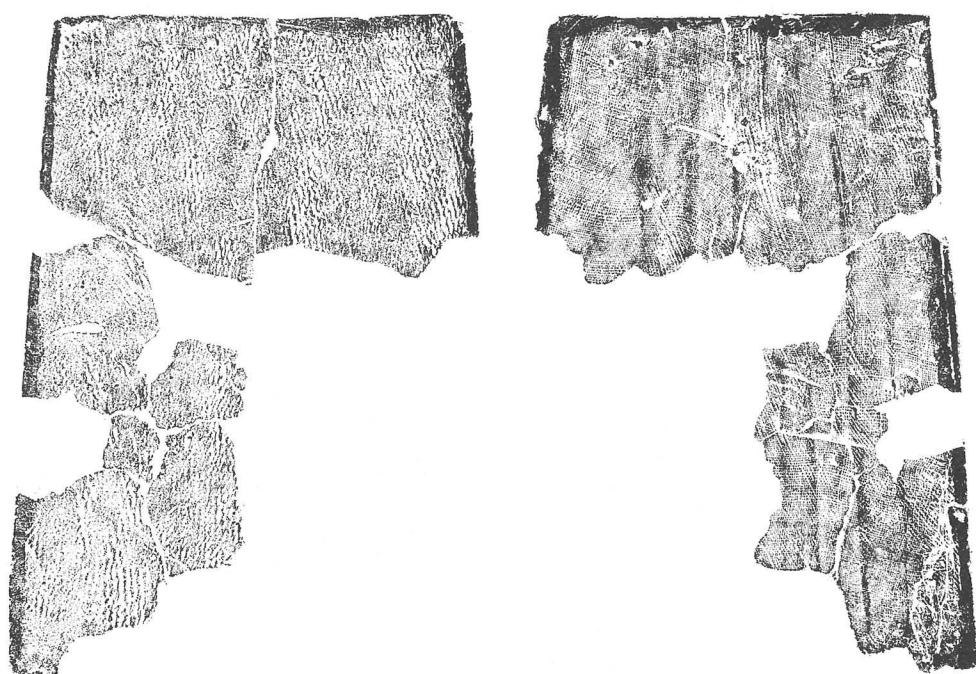
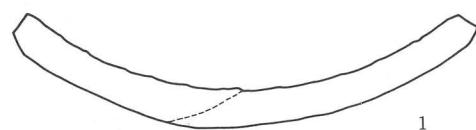
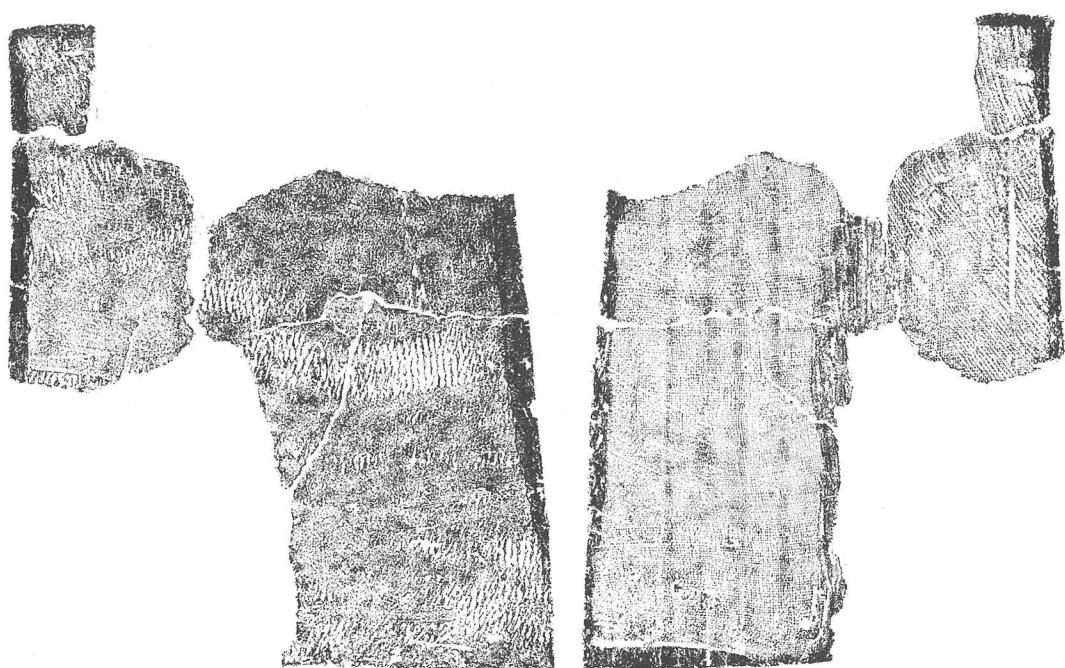
第24図 5号窯跡出土遺物 (1)



第25図 5号窯跡出土遺物 (2)

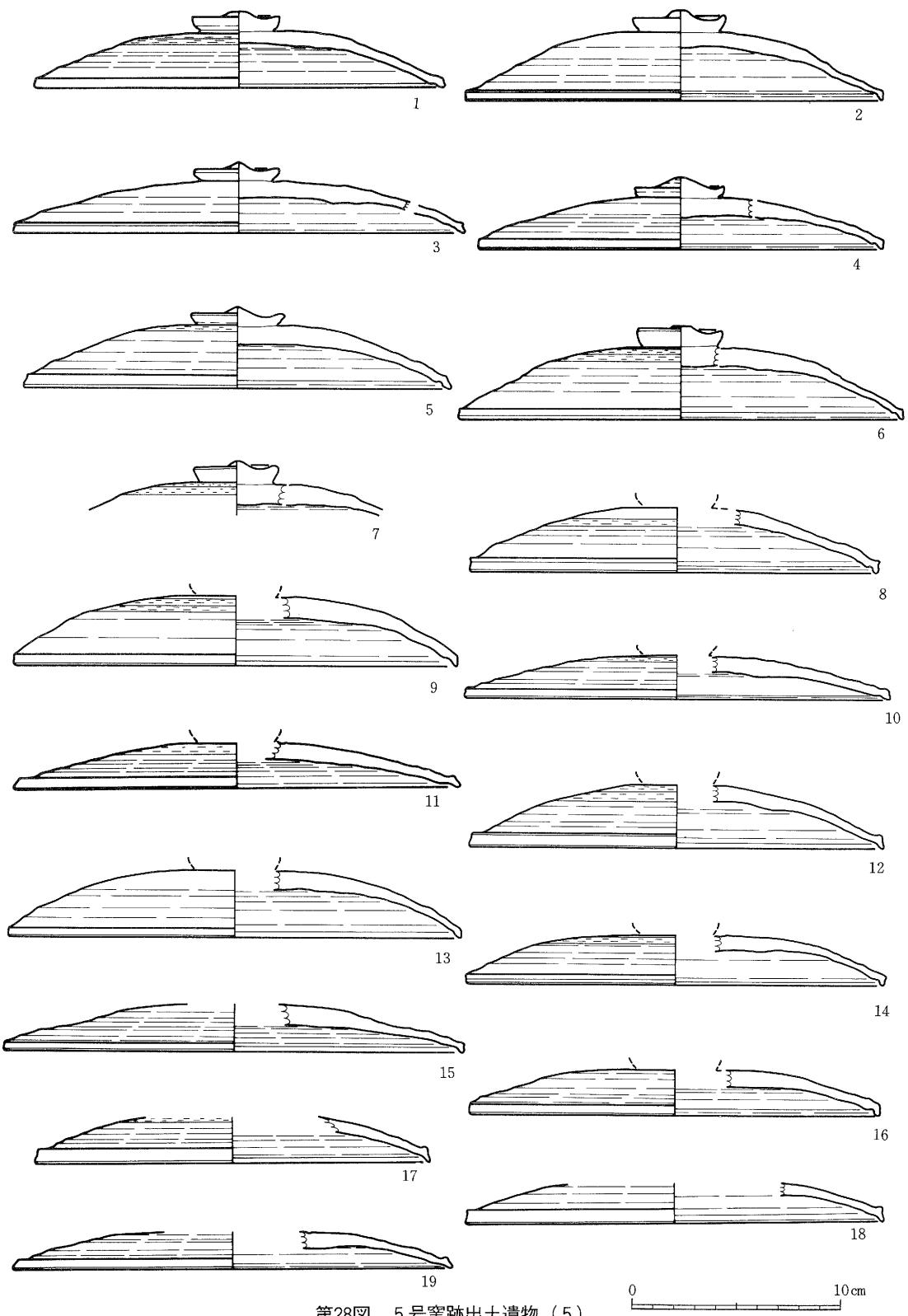


第26図 5号窯跡出土遺物(3)

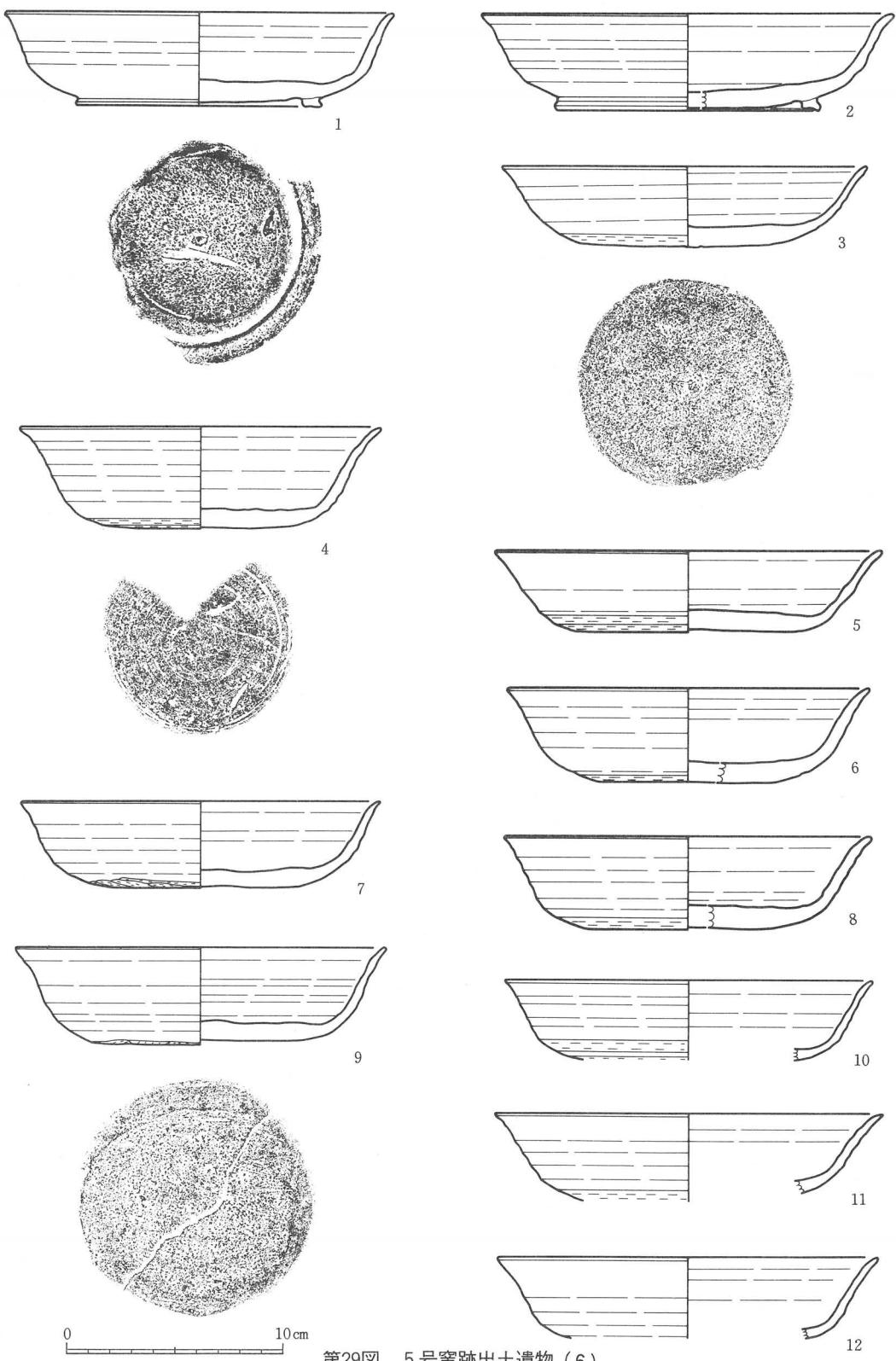


0 10 20cm

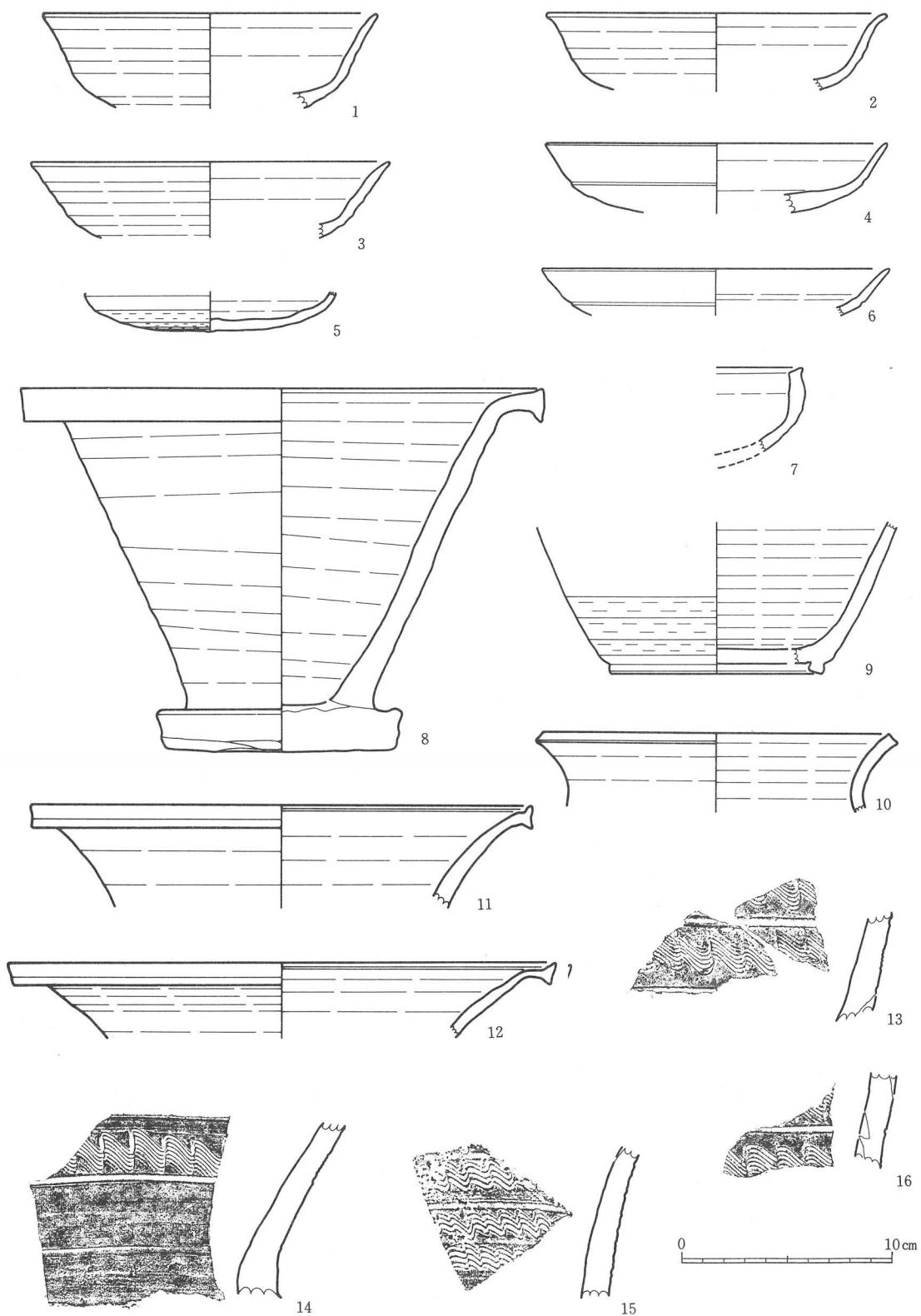
第27図 5号窯跡出土遺物(4)



第28図 5号窯跡出土遺物 (5)



第29図 5号窯跡出土遺物(6)



第30図 5号窯跡出土遺物 (7)

第4表 5号窯跡出土遺物観察表(2)

番号	登録番号	種別	造構・層位	法量 cm			特徴		分類	写真図版
				長さ	広端幅	狭端幅	凸面	凹面		
24-7	F b-37	丸瓦	S O 5 焼成部床直 焼成部7層				斜格子叩き目C→スリ消し(ヘラケズリ)	糸切り痕、布目痕、布縫じ痕、側縁・広端縁ヘラケズリ	I d	27-1
24-8	F b-43	丸瓦	S O 5 焼成部 7層				正格子叩き目C、一部ナデ	糸切り痕、布目痕、側縁ヘラケズリ	I b	
24-9	F b-39	丸瓦	S O 5 焼成部 5a層				正格子叩き目C→スリ消し(ヘラケズリ)、側縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、側縁ヘラケズリ	I b	
24-10	F b-35	丸瓦	S O 5 焼成部 7層				平行叩き目A	糸切り痕、布目痕、布縫じ痕	II a	27-2
25-1	G b-125	平瓦	S O 5 焼成部5a層 前庭部1層				正格子叩き目A	糸切り痕、布目痕、凸型台圧痕、側縁ヘラケズリ	I A a	26-4
25-2	G b-130	平瓦	S O 5 焼成部 3層				斜格子叩き目A	糸切り痕、布目痕、横骨痕	I A d	26-10
25-3	G b-127	平瓦	S O 5 焼成部 1層				正格子叩き目C→スリ消し	糸切り痕、ヘラケズリ	I A c	26-8
25-4	G b-124	平瓦	S O 5 焼成部 5a層				正格子叩き目B、側面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、粘土板合わせ目痕	I A b	26-6
25-5	G b-123	平瓦	S O 5 焼成部 3層				正格子叩き目C→スリ消し	布目痕、ナデ	I A c	26-7
25-6	G b-139	平瓦	S O 5 前庭部 床直				斜格子叩き目B→スリ消し、側面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕	I A e	26-9
25-7	G b-143	平瓦	S O 5 焼成部 床直				正格子叩き目B→平行叩き目C、側縁・狭端縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、凸型台圧痕、側縁・狭端縁ヘラケズリ	I B h	26-13
25-8	G b-68	平瓦	S O 5 焼成部 床直				斜格子叩き目A→スリ消し、側面ヘラケズリ	布目痕、模骨痕、粘土板合わせ目痕	I A d	26-5
25-9	G b-129	平瓦	S O 5 焼成部 5a層下部				長方形格子叩き目	糸切り痕、布目痕、模骨痕	I A g	26-11
26-1	G b-144	平瓦	S O 5 前庭部 5a層				平行叩き目A、側面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、側面ヘラケズリ、広端面右側面切り	II a	27-6
26-2	G b-148	平瓦	S O 5 前庭部 1b層				平行叩き目A、側面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、広端面左側面切り	II a	27-3
26-3	G b-147	平瓦	S O 5 焼成部 床直				平行叩き目A、側面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、広端面右側面切り	II a	27-4
26-4	G d-1	熨斗瓦	S O 5 前庭部 1層				長方形格子叩き目→横方向スリ消し	糸切り痕、布目痕、模骨痕	I A g	27-5
27-1	G b-180	平瓦	S O 5 焼成部1層 前庭部1層	41.5			繩叩き目→横方向スリ消し、両側縁・狭端縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、粘土板合わせ目痕、一部ナデ、両側縁・狭端縁ヘラケズリ	III f	27-7
27-2	G b-156	平瓦	S O 5 焼成部5a～7層 前庭部1層	43.5		24.5	繩叩き目→スリ消し、両側縁・狭端縁・ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、両側縁・狭端縁・ヘラケズリ	III a	27-8

の破片3点がある。

須恵器 主に焼成部床面及び堆積土より蓋・壺・甕・すり鉢など291点が出土している。甕が最も多く出土しているがすべて破片であり、完形のものとして壺・蓋が多く出土している。壺は口径16.0～19.2cm、器高3.8～4.6cm、底径8.2～9.8cmを測り、高台の付くものと付かないものがある。底部の切り離しは回転ヘラ切りがほとんどで、体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリされるものが多く、さらに底部の切り離しは不明で全面に手持ちヘラケズリされるものも2点が出土している。蓋は口径19.6～22.2cmを測り、扁平な宝珠形のつまみで内面にかえりのないものである。天井部は高く口縁部は下方に折り曲げられている。

2. 灰原

1号灰原

調査区A区の北東部で南北約5m、東西約11mの範囲に検出された灰原であり、さらに東側へと延びている。北隣のB区で4・5号窯跡が検出されているが、灰原の分布域は4号窯跡から5号窯跡にかけての南側斜面に位置している。

灰原の厚さは20～40cmを測り、3層に分けられる。1層は黒褐色シルトで、にぶい黄褐色シルトのブロックを霜降り状に含む層であり、10～20cmと最も厚く堆積している。2層はにぶい黄褐色シルト層で部分的に堆積している。3層は炭化物粒と焼土粒が多量に含まれる黒色シルトで、10～15cmの厚さで堆積している。

第4表(続)

番号	登録番号	種別	器形	遺構・層位	法量 cm			外面調整	内面調整	分類	残存	写真図版
					口径	底径	器高					
28-1	E-49	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 7層	19.8	3.7		ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、 扁平な宝珠つまみ	ロクロナデ	B I	5/6	28-5
28-2	E-50	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 5.1層～7層	22.0	4.4		ロクロナデ、扁平な宝珠つまみ	ロクロナデ	B I	4/5	28-2
28-3	E-51	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 7層	21.9	3.4		ロクロナデ、扁平な宝珠つまみ	ロクロナデ	B I	3/5	28-4
28-4	E-59	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 7層	19.6	3.5		ロクロナデ、扁平な宝珠つまみ	ロクロナデ	B I	1/4	28-3
28-5	E-65	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 床面	20.6	4.0		ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、 扁平な宝珠つまみ	ロクロナデ	B I	1/5	
28-6	E-55	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 7層	21.4	4.5		ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、 扁平な宝珠つまみ	ロクロナデ	B I	1/4	28-1
28-7	E-58	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 5.5層				ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、 扁平な宝珠つまみ	ロクロナデ	B I		
28-8	E-53	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 5.5層	19.8			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B I	1/2	
28-9	E-56	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 5.5層	21.4			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B I	1/3	
28-10	E-52	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 7層	20.6			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B I	1/2	
28-11	E-57	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 7層	21.6			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B I	1/3	
28-12	E-62	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 5.5層～7層	20.0			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B I	1/4	
28-13	E-63	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 5.5層	22.0			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B I	1/5	
28-14	E-54	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 7層	20.2			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B I	1/3	
28-15	E-61	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 7層	22.2			ロクロナデ	ロクロナデ	B I	1/5	
28-16	E-60	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 7層	19.8			ロクロナデ	ロクロナデ	B I	1/3	
28-17	E-69	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 5.5層	19.0			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B I	1/6	
28-18	E-70	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 5.5層～7層	20.2			ロクロナデ	ロクロナデ	B I	1/6	
28-19	E-64	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 5.5層～7層	21.2			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B I	1/5	
29-1	E-16	須恵器	高台付坏	SOS 5 焼成部 5.5層	18.1	11.4	4.4	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B I	1/5	28-7
29-2	E-17	須恵器	高台付坏	SOS 5 焼成部 7層	19.2	12.4	4.5	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B I	1/4	28-6
29-3	E-22	須恵器	坏	SOS 5 焼成部 床面	17.0	9.8	3.8	ロクロナデ、体部、下端～底部周縁、 回転全面ヘラケズリ	ロクロナデ	B I b	2/3	28-9
29-4	E-18	須恵器	坏	SOS 5 焼成部 5.5層～7層	16.8	9.1	4.8	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、体 部下端～底部、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B I a	3/5	29-3
29-5	E-12	須恵器	坏	SOS 5 焼成部 5.5層	18.0	9.2	3.8	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、体部 下端～底部周縁、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B I b	2/3	28-10
29-6	E-15	須恵器	坏	SOS 5 焼成部 5.5層～7層	16.8	8.2	4.4	ロクロナデ、底部周縁、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B I b	1/2	29-2
29-7	E-13	須恵器	坏	SOS 5 焼成部 床面	16.8	8.5	4.0	ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	B I c	ほぼ完形	29-1
29-8	E-11	須恵器	坏	SOS 5 焼成部 7層	17.1	9.6	4.3	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、体部 下端～底部周縁、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B I b	2/3	28-8
29-9	E-14	須恵器	坏	SOS 5 焼成部 7層	17.3	9.8	4.6	ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	B I c	ほぼ完形	29-4
29-10	E-24	須恵器	坏	SOS 5 焼成部 7層	17.1			ロクロナデ、体部下端～底部周縁、回 転ヘラケズリ	ロクロナデ	B I	1/5	
29-11	E-21	須恵器	坏	SOS 5 焼成部 5.5層～7層	18.0			ロクロナデ、体部下端～底部周縁、回 転ヘラケズリ	ロクロナデ	B I b	1/2	
29-12	E-29	須恵器	坏	SOS 5 焼成部 7層	17.8			ロクロナデ	ロクロナデ	B I	1/6	
30-1	E-23	須恵器	坏	SOS 5 焼成部 5.5層～7層	16.0			ロクロナデ	ロクロナデ	B I	1/2	
30-2	E-32	須恵器	坏	SOS 5 焼成部 5.5層	16.2			ロクロナデ	ロクロナデ	B I	1/5	
30-3	E-26	須恵器	坏	SOS 5 焼成部 7層	17.1			ロクロナデ	ロクロナデ	B I	1/4	
30-4	E-19	須恵器	坏	SOS 5 補修建中 12層	16.3			ロクロナデ、体部中央に段、底部丸底 不定方向ナデ	ロクロナデ	A I a	1/5	29-5
30-5	E-33	須恵器	坏	SOS 5 焼成部 5.5層				ロクロナデ、底部丸底、回転ヘラケ ズリ	ロクロナデ	A	1/8	
30-6	E-20	須恵器	坏	SOS 5 補修建中 12層	16.8			ロクロナデ、体部中央に段	ロクロナデ	A I a	1/10	29-6
30-7	E-46	須恵器	蓋	SOS 5 焼成部 7層				ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	B	1/8	
30-8	E-80	須恵器	鉢	SOS 5 焼成部 7層	24.9	11.6	17.4	ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	B I	完形	29-9
30-9	E-82	須恵器	高台付蓋	SOS 5 焼成部 5.5層		10.2		ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B	1/4	
30-10	E-87	須恵器	盃	SOS 5 前庭部 1層	17.2			ロクロナデ	ロクロナデ	B	1/6	
30-11	E-90	須恵器	甕	SOS 5 焼成部 7層	24.0			ロクロナデ	ロクロナデ	B	1/10	
30-12	E-91	須恵器	甕	SOS 5 焼成部 7層	26.2			ロクロナデ	ロクロナデ	B	1/8	
30-13	E-99	須恵器	甕	SOS 5				波状沈線文	ロクロナデ			29-7
30-14	E-96	須恵器	甕	SOS 5 前庭部 2.5層				ロクロナデ、波状沈線文	ロクロナデ			29-11
30-15	E-97	須恵器	甕	SOS 5 焼成部				波状沈線文	ロクロナデ			29-10
30-16	E-98	須恵器	甕	SOS 5 前庭部 1層				波状沈線文	ロクロナデ			29-8

遺物は1～3層より多量の瓦塼類と少量の須恵器・円面硯が出土している。層位的に分離することはできず、各層間の遺物は接合している。また、灰原と1号溝跡とは切り合い関係はないが灰原と1号溝跡出土の遺物が多く接合することから、灰原が形成される過程で1号溝跡も徐々に埋まったものと考えられる。

出土遺物には多量の瓦塼類と少量の須恵器と円面硯が出土している。

瓦塼類は総数1,639点と遺構の中で一番多く出土し、その大部分は1,336点の平瓦で81.5%を占めている。その他として丸瓦95点、軒丸瓦13点、軒平瓦185点、熨斗瓦1点、隅切り瓦6点、塼3点が出土している。軒丸瓦は直径16.5～17.0cmを測る单弁八葉蓮華文軒丸瓦で、瓦当面が完形のものが出土している。軒平瓦はロクロ挽き重弧文軒平瓦で185点と多く出土し、段顎のI類と無顎のII類がある。顎部は粘土を接合して作られており、顎部が剥がれているものがほとんどである。平瓦は粘土板桶巻き作りの平瓦I～V類があり、その中でI類が492点、IV類344点、II類254点の順に出土している。丸瓦は粘土板巻き作りの無段丸瓦が95点出土し、その中で凸面の叩き目が不明のIV類が65点と最も多く出土している。

須恵器は136点が出土し、大部分が甕の破片である。蓋は5点あり、内面にかえりのあるものとのないものがある。高坏は脚部欠損の坏が1点出土しており、体部に段が形成されている。

その他、円面硯の破片2点が出土している。

3. 溝 跡

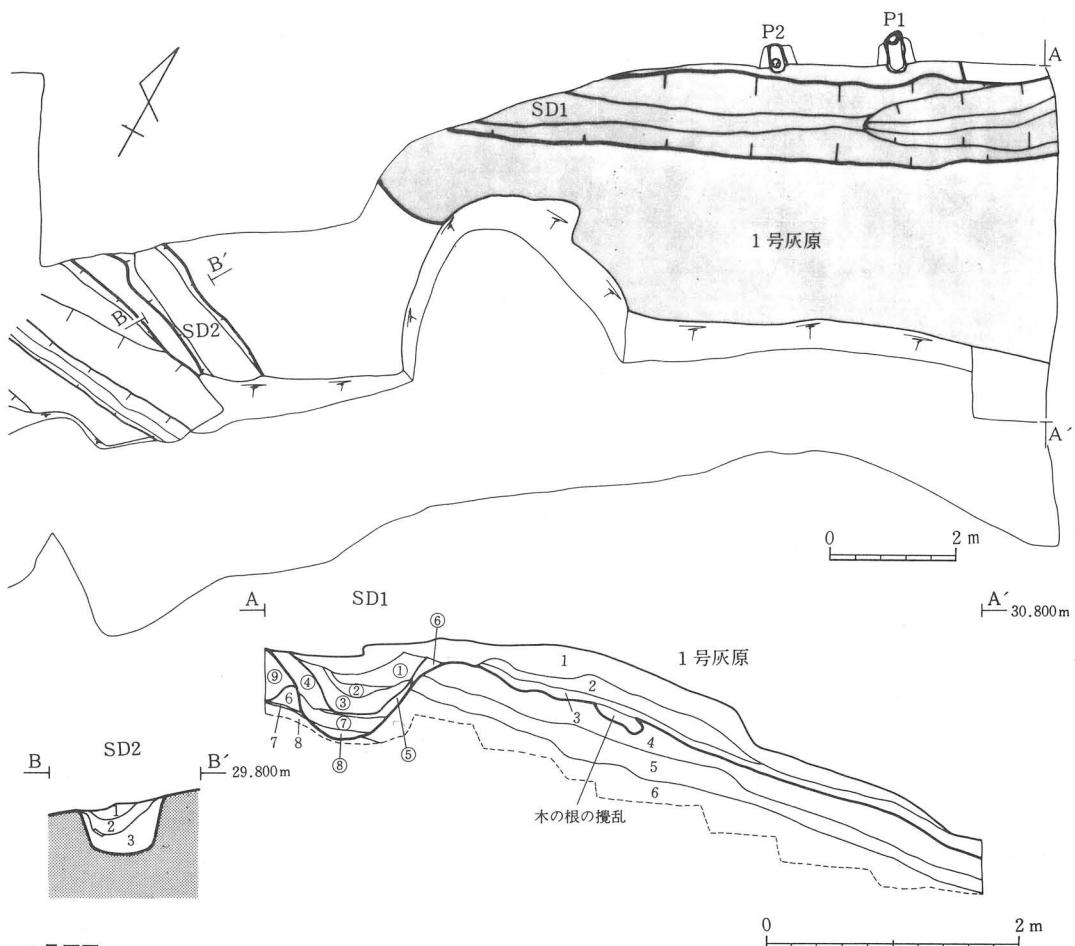
1号溝跡 (S D 1)

調査区A区の北東部で検出され、1号灰原の北側に接している。溝の規模は長さが約21.5m、幅が約140cmを測る東西方向に走る溝跡である。西側は通路状遺構に切られており、東側は調査区外へと延びている。深さは一番深い所で約65cmを測り、断面形はU字形を呈している。溝跡は底面と第3層に砂が堆積しており、水の流れた形跡が二時期あったことがうかがわれる。底面は西側が高いため東側へ向かって流れたと考えられる。

堆積土は8層に分けられるが、堆積状況より大きく3つに大別される。1層、2～3層、4～8層である。1層はにぶい黄褐色シルトである。2・3層はにぶい黄褐色・灰褐色砂質シルトで、下層に炭化物が多量に混入される黒色シルトがある。4～6層は黒色・灰黄褐色のシルトであり、7層はにぶい黄褐色シルト質砂で炭化物が多量に混入する黒色シルトが下層に堆積し、さらに最下層はにぶい黄褐色砂が堆積している。

1号灰原との重複関係はないが灰原の2・3層と溝跡の最下層、灰原1・2層と溝跡中層出土の遺物が接合する例が多く、灰原の形成過程で溝跡も埋まっているものと考えられる。

遺物は各層より瓦塼類、須恵器、硯が出土しており、その中でも瓦類が最も多く総数883点が



1号灰原

層位	土 色	土 性	備 考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトのブロックを斑点状に含む
2	10YR5.5/4にぶい黄褐色	シルト	
3	10YR1.7/1黒色	シルト	にぶい黄褐色シルトをブロック状に、炭化物(数mm~数cm)を多量に含む
4	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト	凝灰岩ブロック(1cm~10cm)を多量に含む、無遺物層
5	10YR4/3褐色	シルト質粘土	
6	10YR6/4にぶい黄橙色	粘土質シルト	
7	5Y7/2灰色	シルト質粘土	
8	2.5Y7/6明黄色	粘土質シルト	

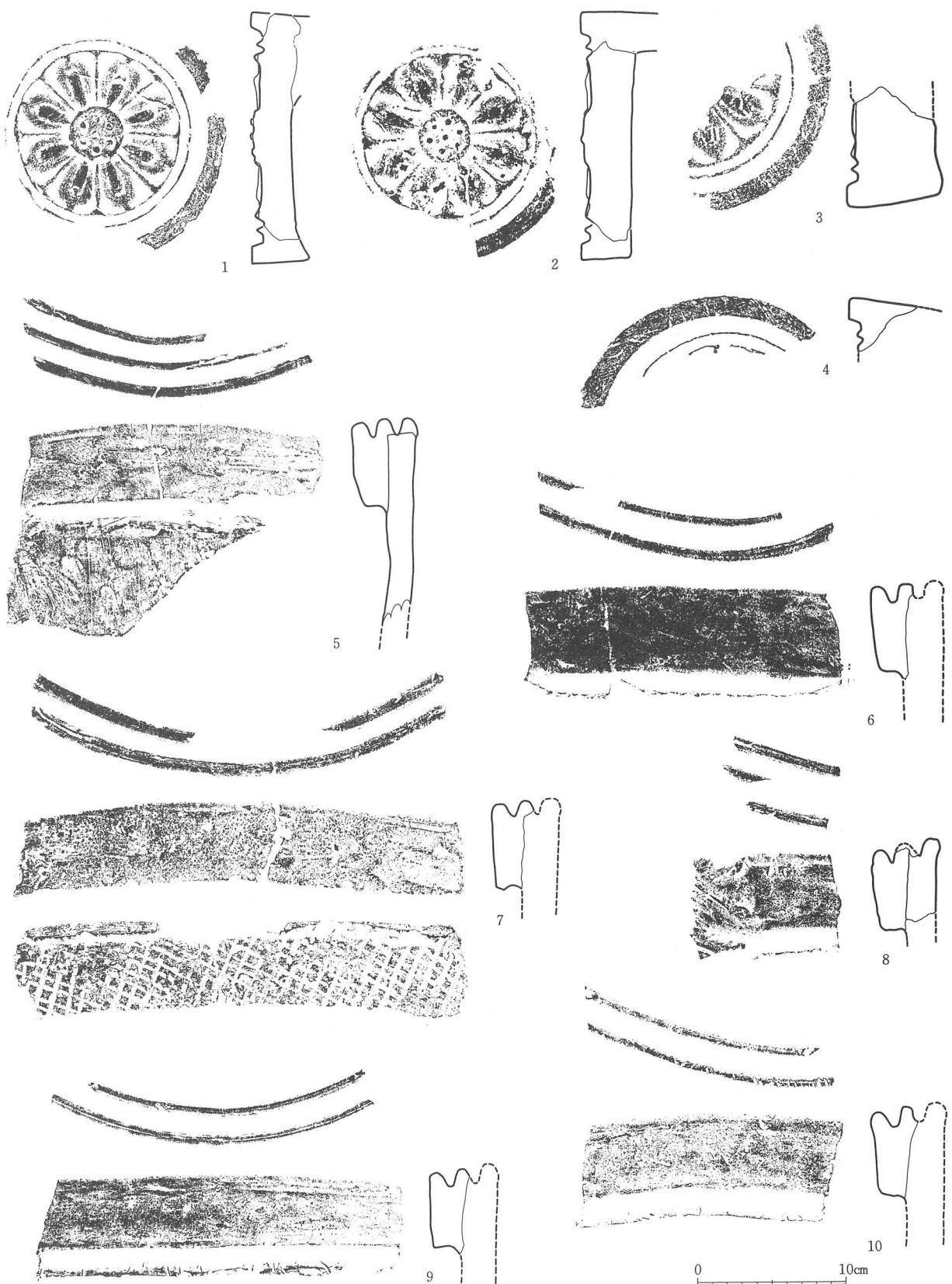
SD1

層位	土 色	土 性	備 考
①	10YR5/4にぶい黄褐色	シルト	
②	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	下層に炭化物を多量に含む
③	10YR5/2灰色	砂質シルト	
④	10YR2/2黑色	シルト	
⑤	10YR5/2灰褐色	シルト	
⑥	10YR4/4褐色	シルト	
⑦	10YR5/4にぶい黄褐色	シルト質砂	下層に炭化物が入る
⑧	10YR5/4にぶい黄褐色	砂	
⑨	10YR1.7/1黑色	シルト	にぶい黄橙色のシルト質粘土、褐色シルトのブロック、焼土が斑点状に含む

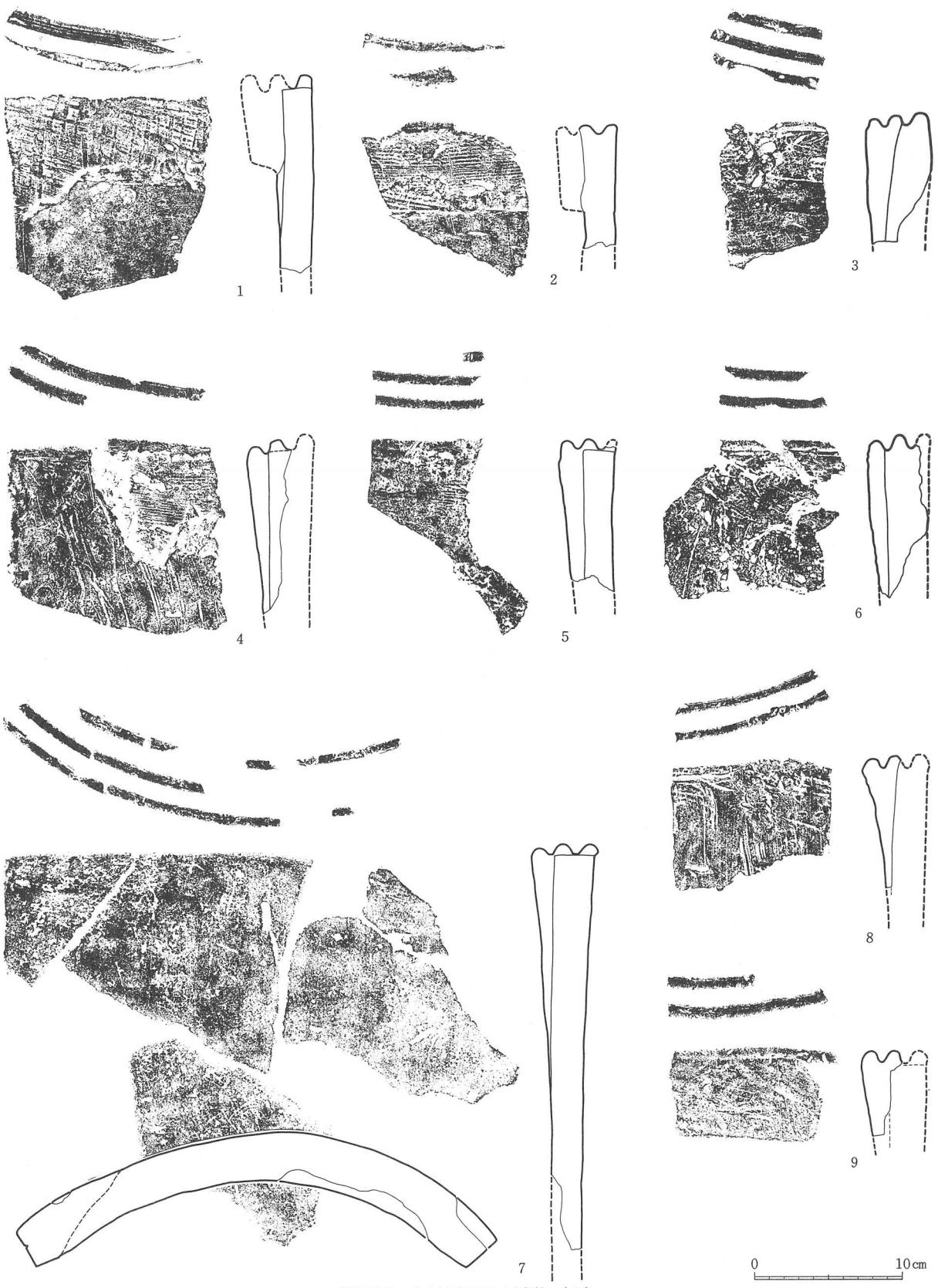
SD2

層位	土 色	土 性	備 考
1	10YR3/3暗褐色	シルト	
2	10YR3/4暗褐色	シルト	下面に瓦を含む
3	10YR5/6黄色	シルト質粘土	

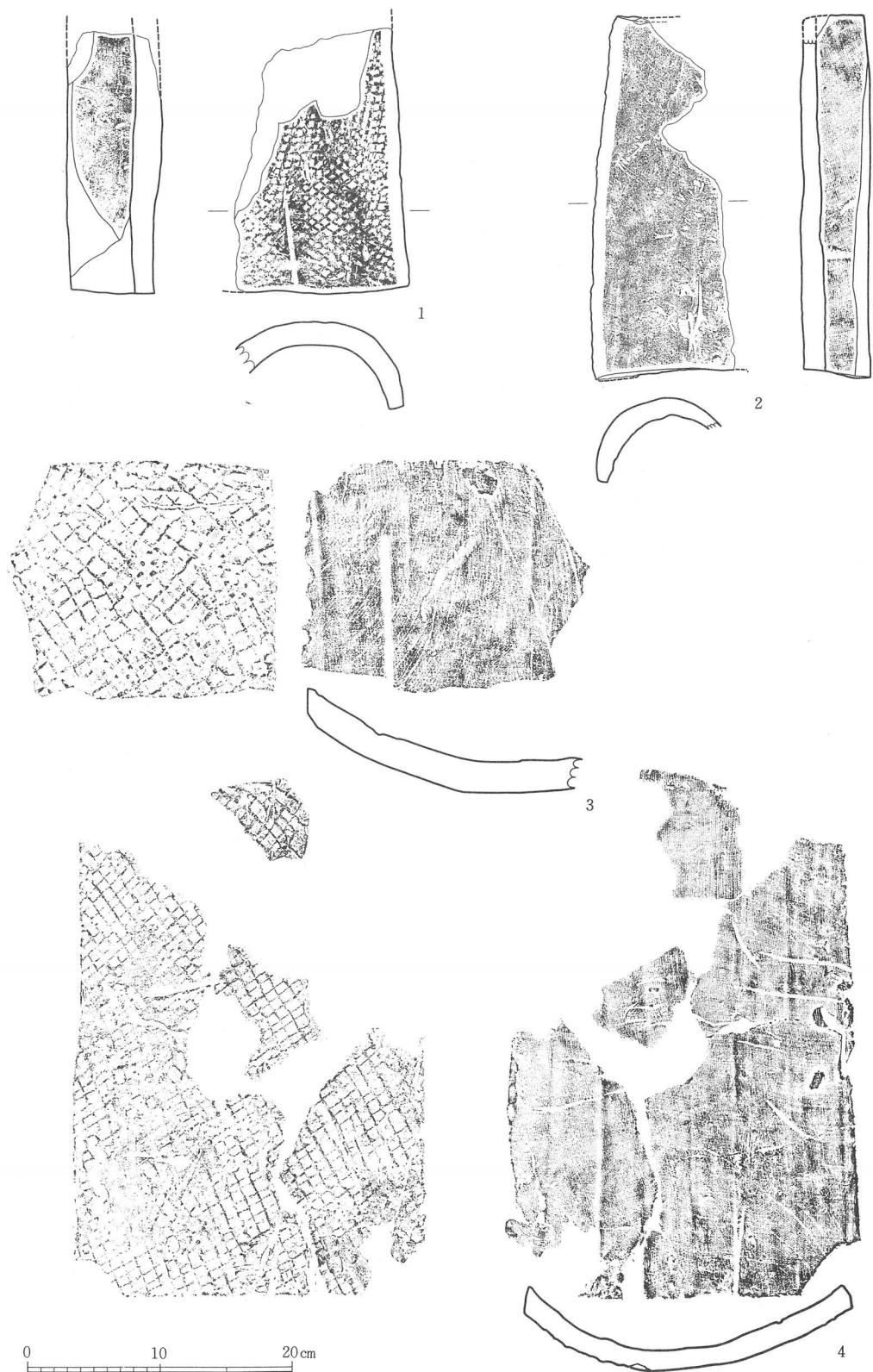
第31図 1号灰原・1号・2号溝跡



第32図 1号灰原出土遺物（1）



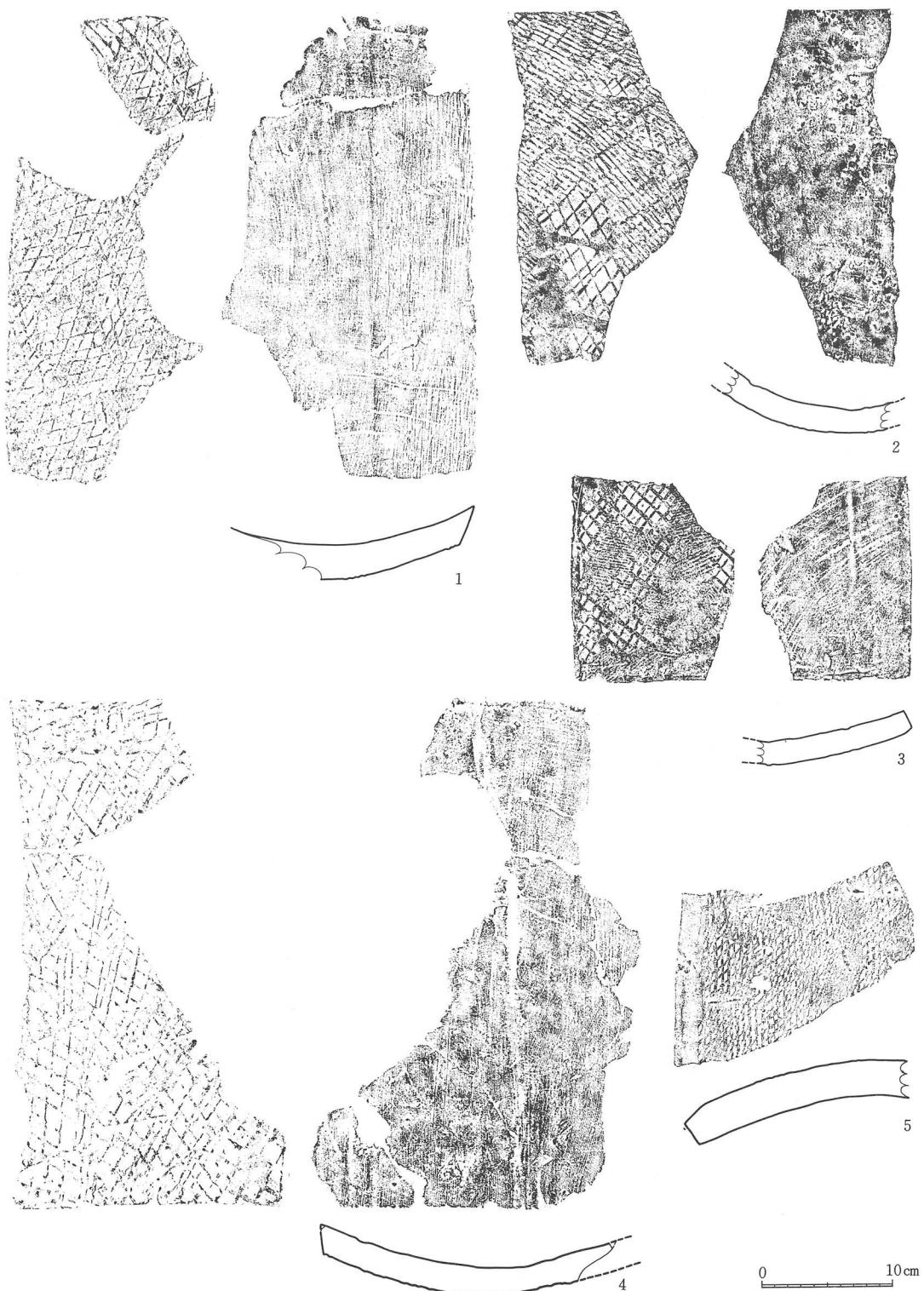
第33図 1号灰原出土遺物 (2)



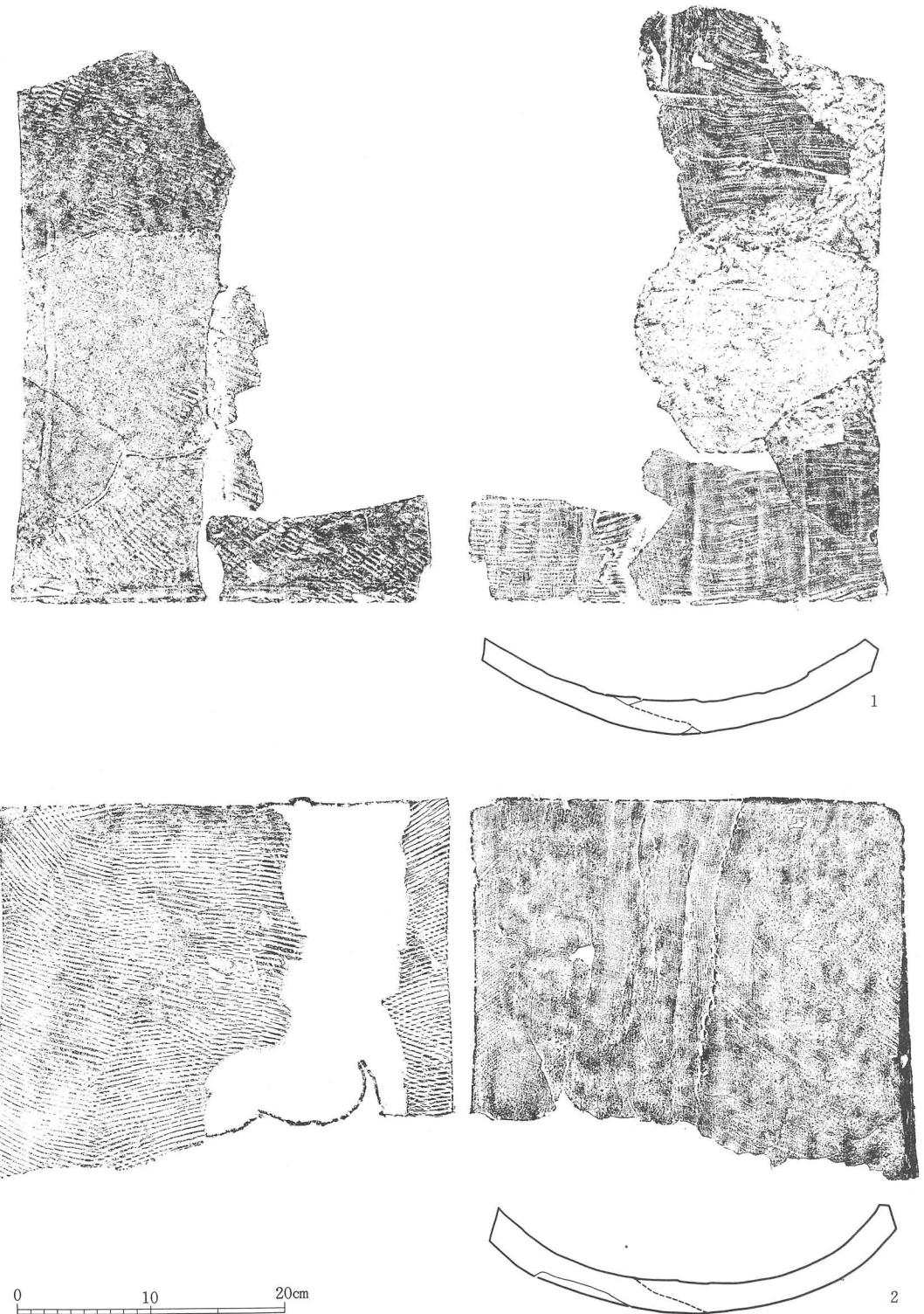
第34図 1号灰原出土遺物（3）



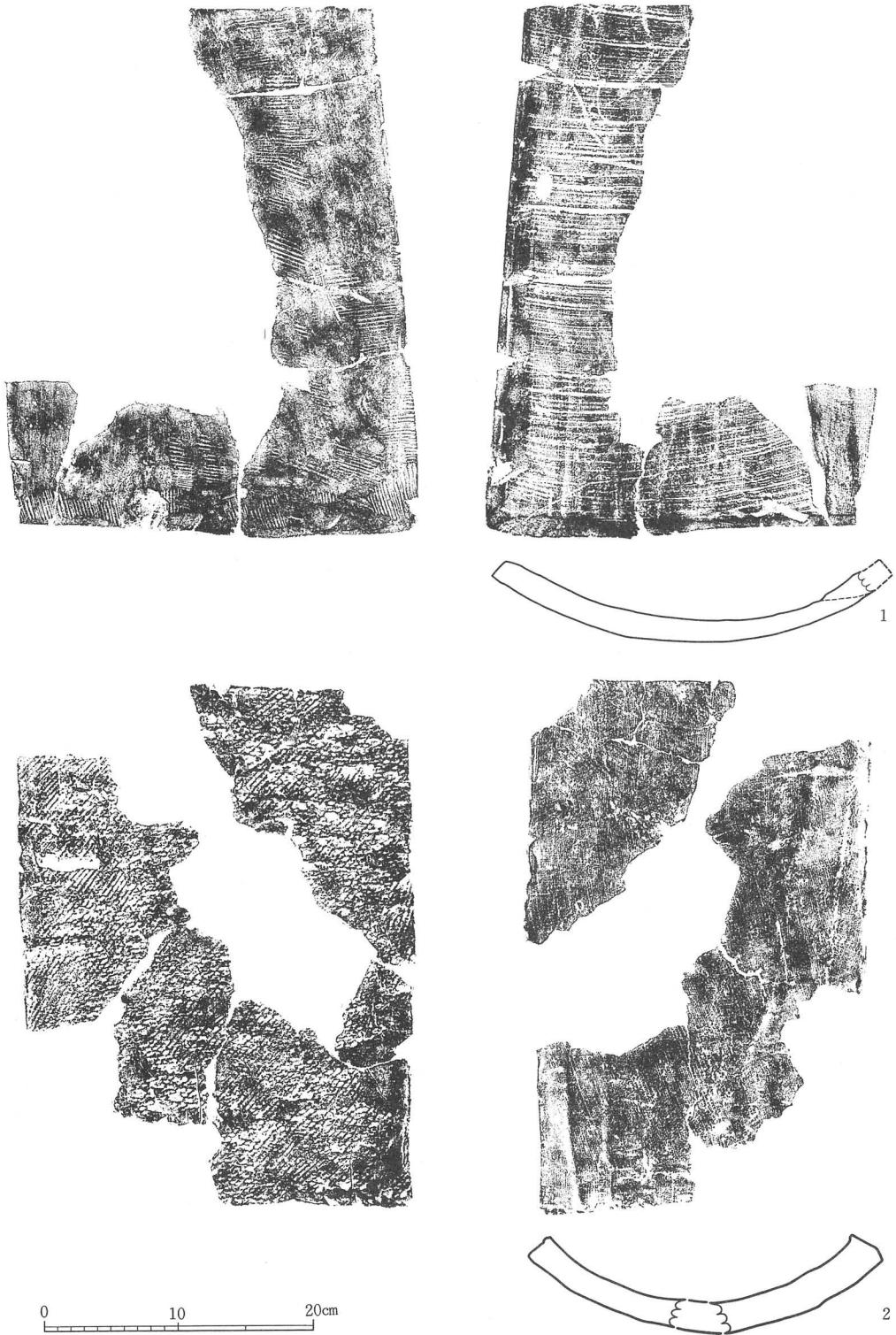
第35図 1号灰原出土遺物 (4)



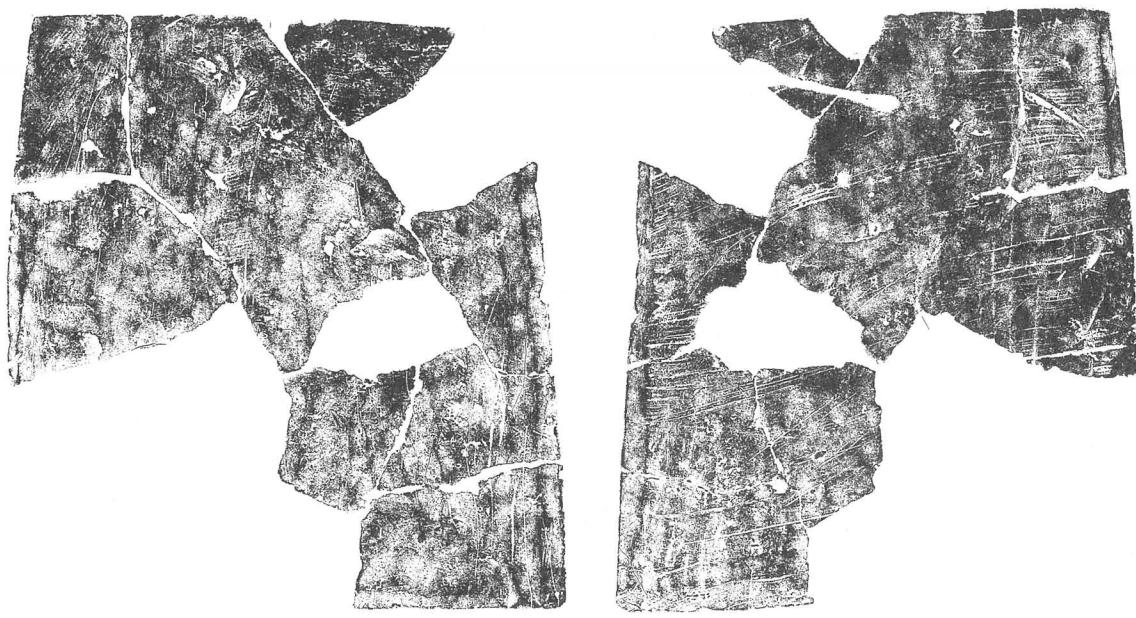
第36図 1号灰原出土遺物 (5)



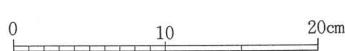
第37図 1号灰原出土遺物（6）



第38図 1号灰原出土遺物（7）

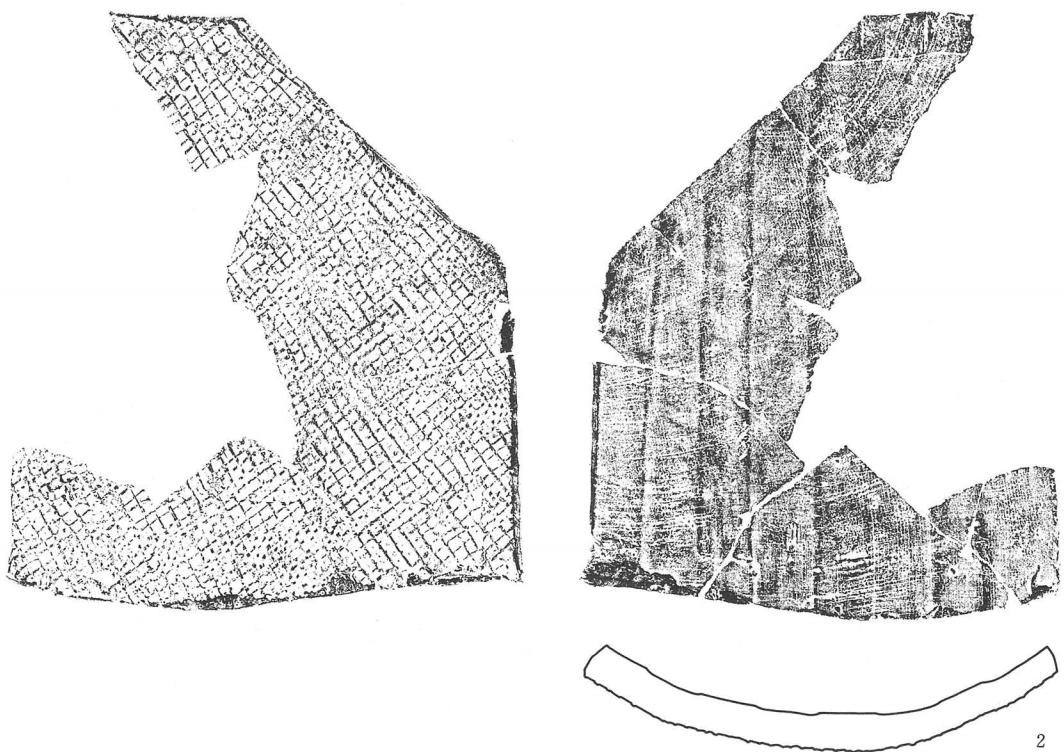


1



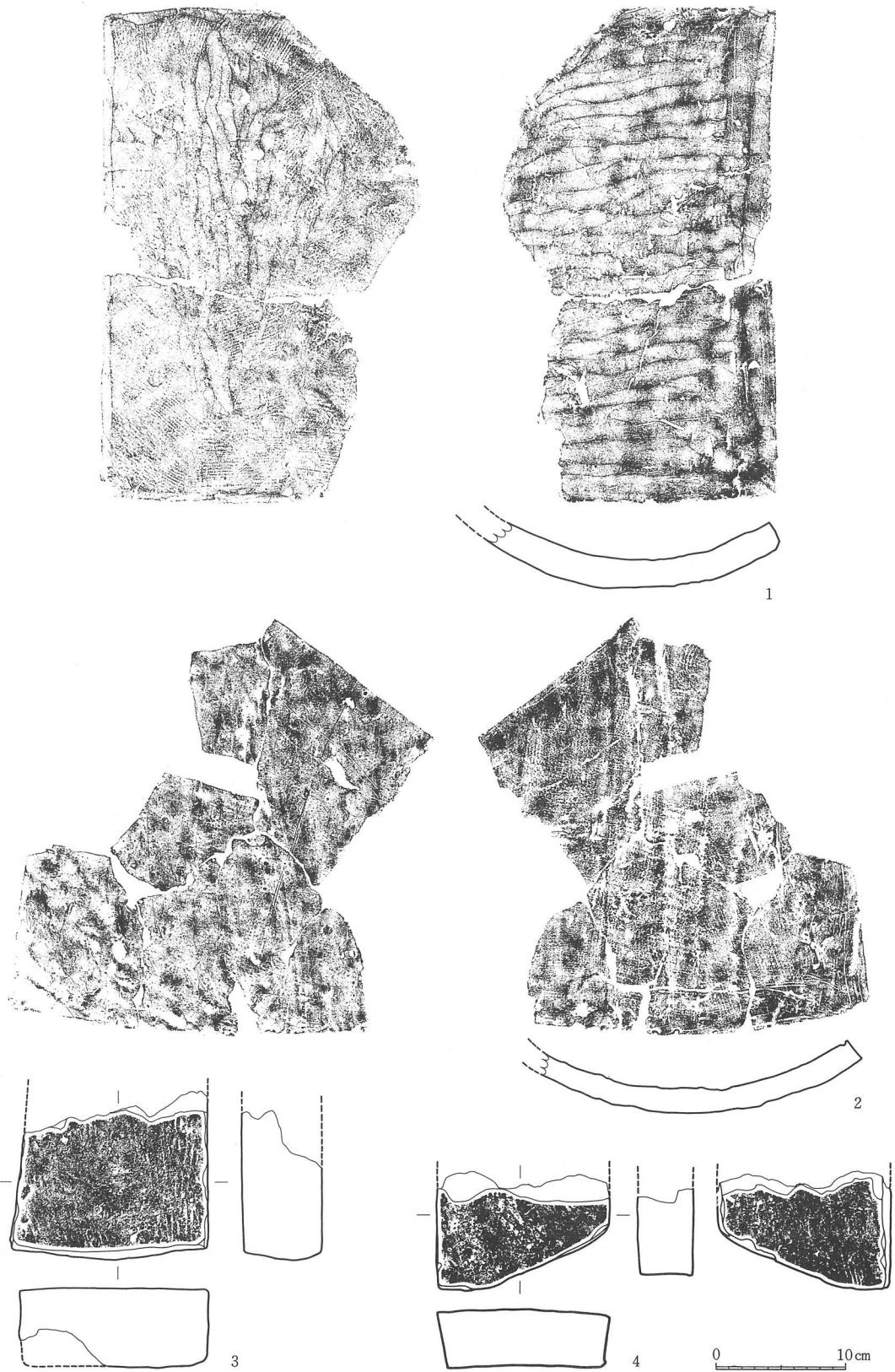
2

第39図 1号灰原出土遺物 (8)

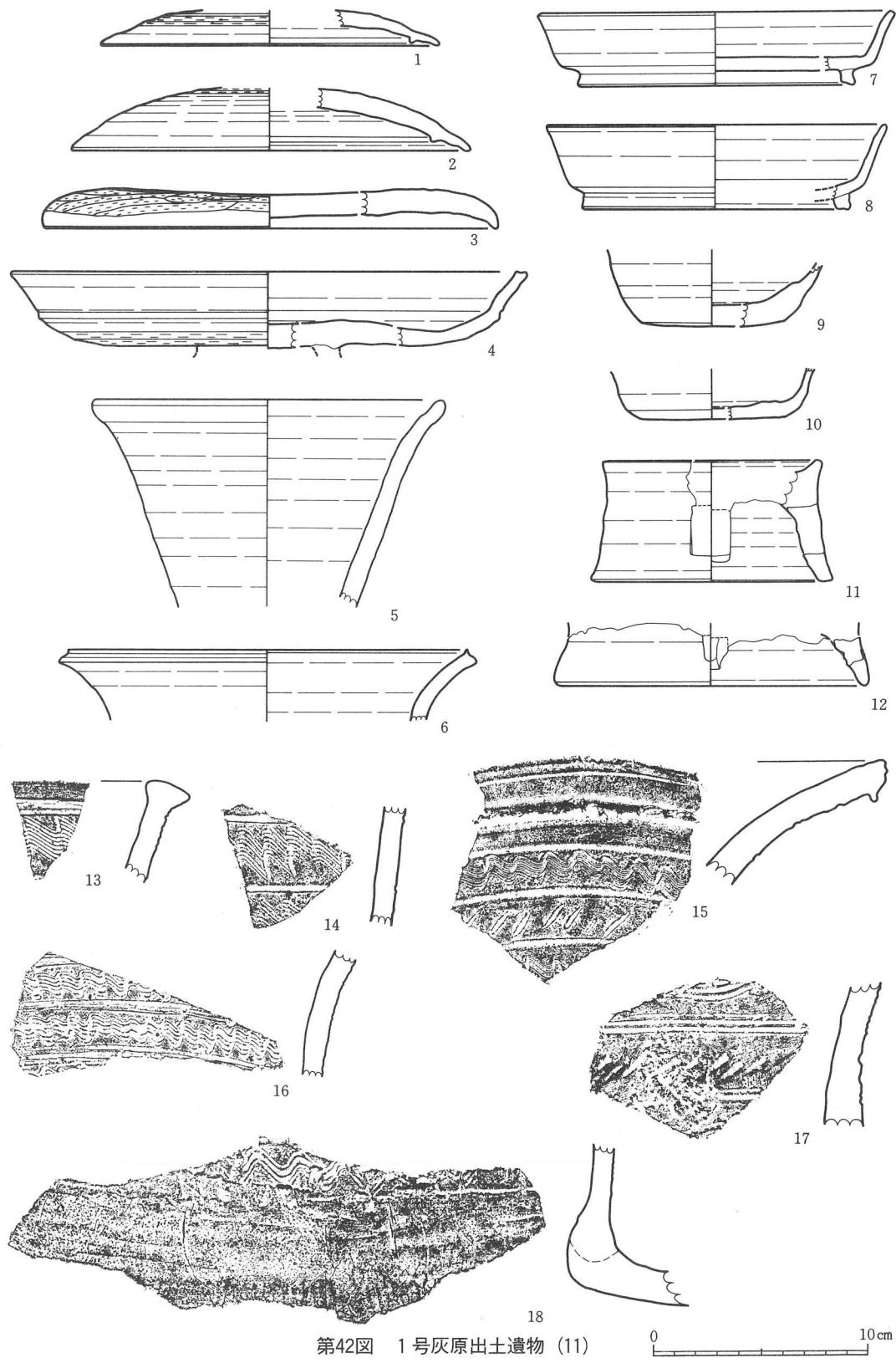


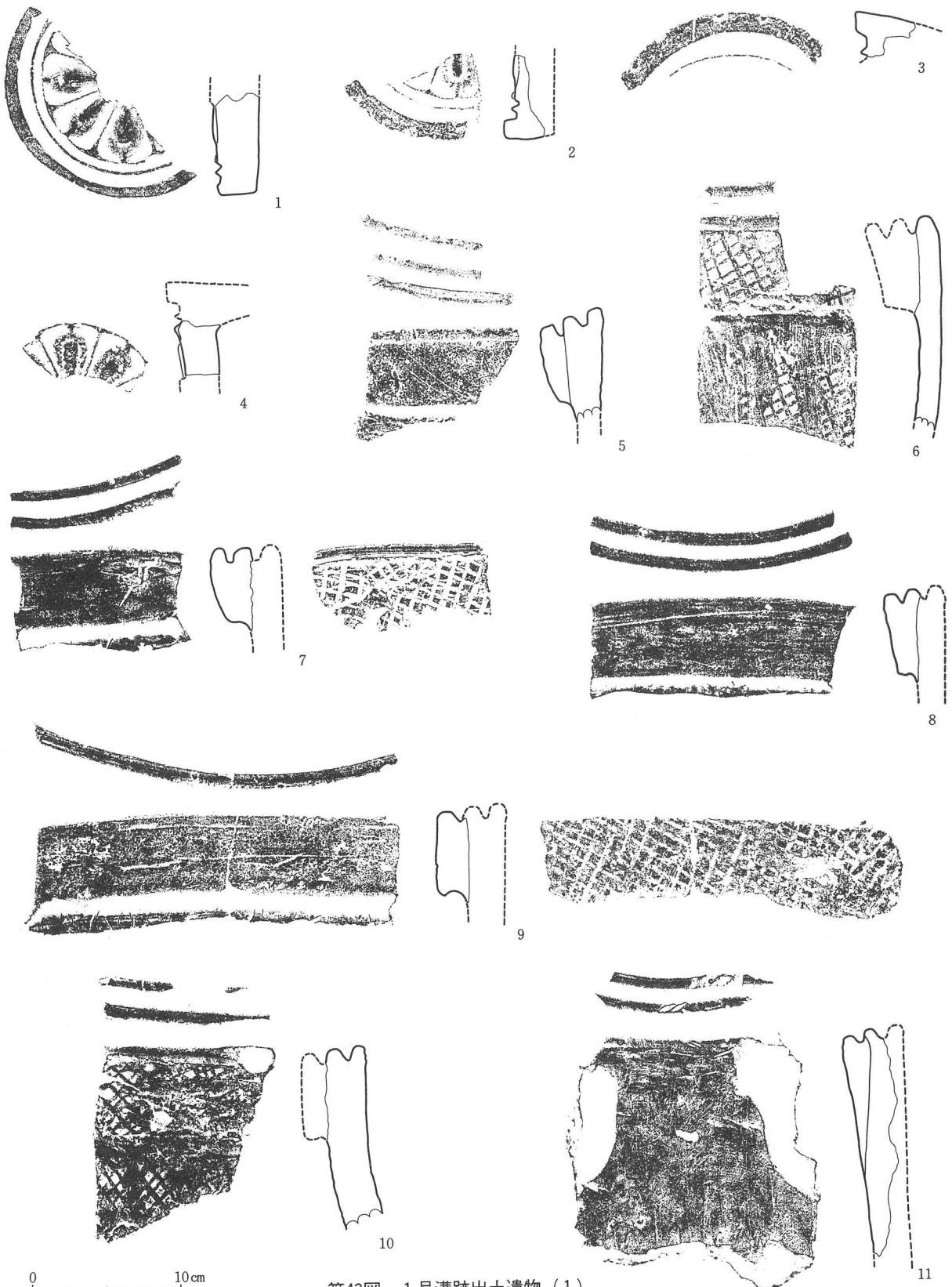
0 10 20cm

第40図 1号灰原出土遺物（9）

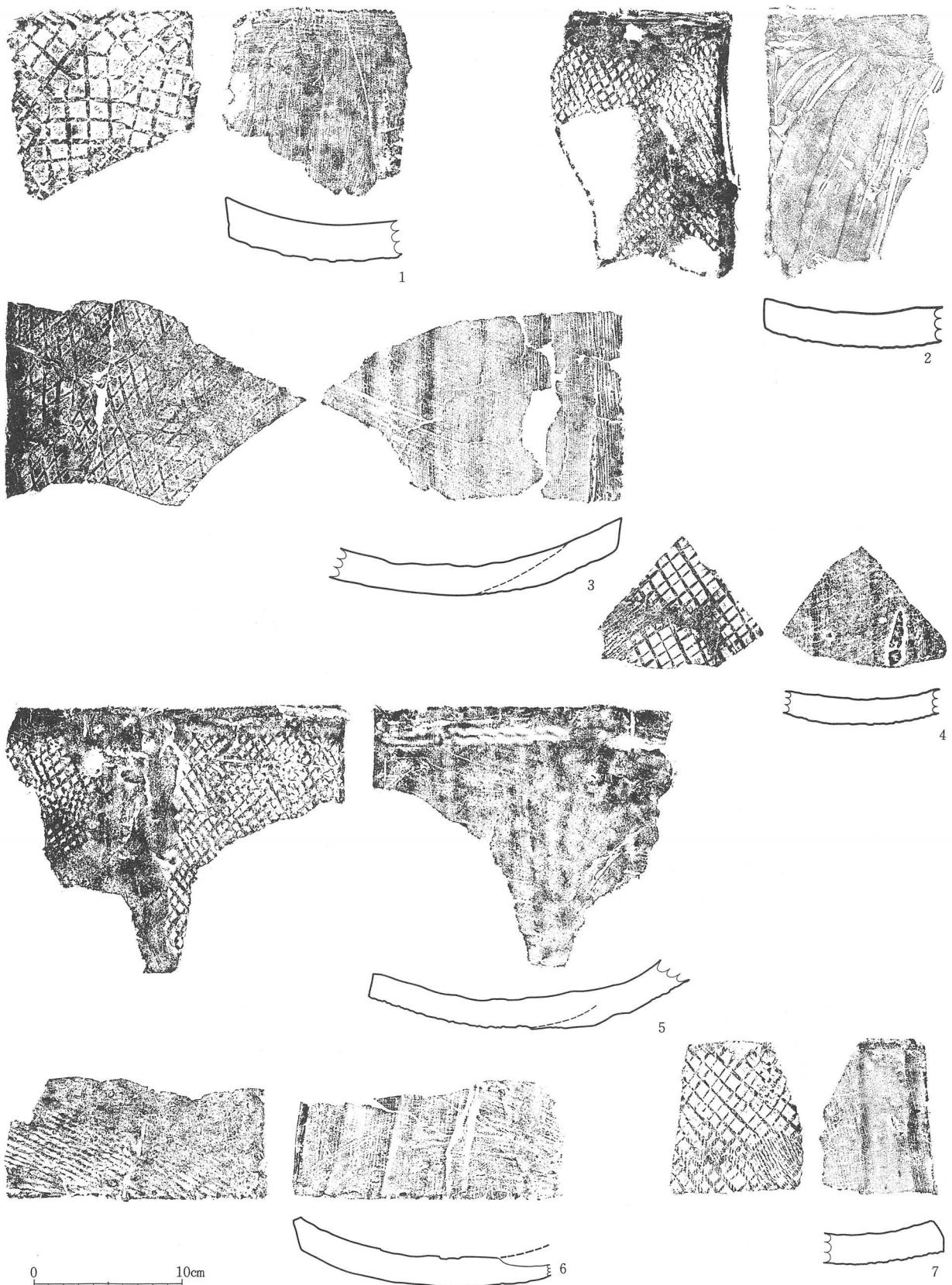


第41図 1号灰原出土遺物 (10)

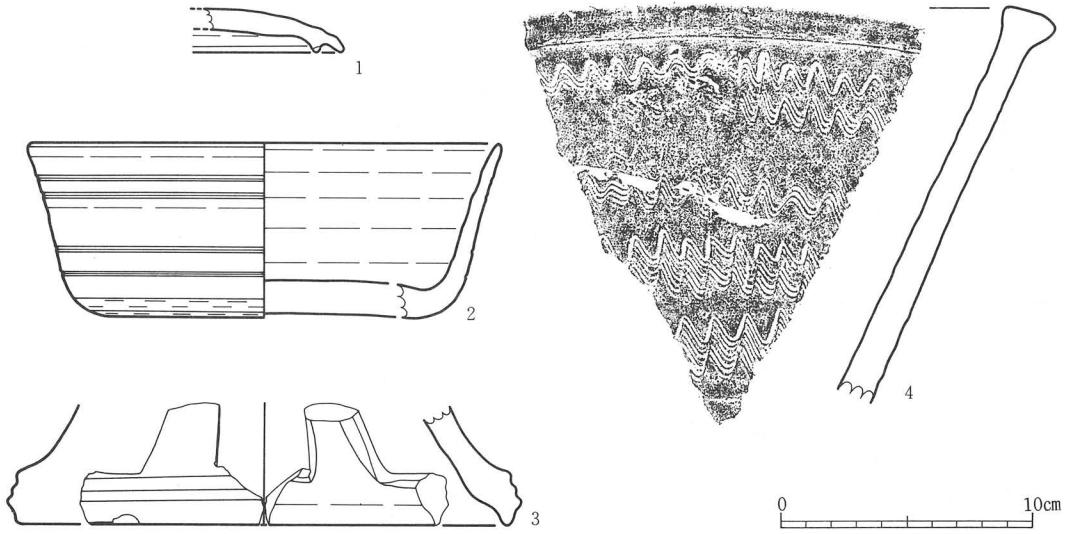




第43図 1号溝跡出土遺物（1）



第44図 1号溝跡出土遺物（2）



第45図 1号溝跡出土遺物 (3)

第5表 1号灰原・1号溝跡出土遺物観察表
1号灰原

番号	登録番号	種別	遺構・層位	瓦当様	特徴		分類	備考	写真図版
					凸面	凹面			
32-1	F a -5	軒丸瓦	1灰 2層	単弁八葉蓮華文			I a	30-1	
32-2	F a -10	軒丸瓦	1灰 2層	単弁八葉蓮華文			I a	30-2	
32-3	F a -13	軒丸瓦	1灰 3層	単弁八葉蓮華文			I a	30-3	
32-4	F a -8	軒丸瓦	1灰	単弁八葉蓮華文			II		
32-5	G a -25	軒平瓦	1灰 2層	ロクロ挽き重弧文	正格子叩き目C→スリ消し	余切り痕、布目痕、模骨痕	I a	段額	30-5
32-6	G a -50	軒平瓦	1灰 2層 SD 1	ロクロ挽き重弧文	頸部横方向のナデ	剝離面、正格子叩き目B	I a	段額	30-8
32-7	G a -26	軒平瓦	1灰 西2層	ロクロ挽き重弧文	頸部横方向のナデ	剝離面、正格子叩き目B	I a	段額	30-10
32-8	G a -29	軒平瓦	1灰 2~3層	ロクロ挽き重弧文	頸部横方向のナデ	余切り痕、布目痕、側面ヘラケズリ	I c	段額	
32-9	G a -43	軒平瓦	1灰 2層	ロクロ挽き重弧文	頸部横方向のナデ	余切り痕、布目痕、側面ヘラケズリ	I c	段額	30-6
32-10	G a -44	軒平瓦	1灰 西3層	ロクロ挽き重弧文	頸部横方向のナデ		I c	段額	30-7
33-1	G a -58	軒平瓦	1灰 2層	ロクロ挽き重弧文	横方向のナデ、頸部剝離面、正格子叩き目C	布目痕、模骨痕、一部ヘラケズリ	I a	段額	
33-2	G a -54	軒平瓦	1灰 1層	ロクロ挽き重弧文	ヘラケズリ、頸部剝離面、平行叩き目C	余切り痕、布目痕、模骨痕、ヘラケズリ	I b	段額	
33-3	G a -35	軒平瓦	1灰 西3層	ロクロ挽き重弧文	ヘラケズリ	余切り痕、布目痕、ヘラケズリ	II b		
33-4	G a -59	軒平瓦	1灰 2層	ロクロ挽き重弧文	ヘラケズリ、剝離面、平行叩き目C		II a		
33-5	G a -30	軒平瓦	1灰 2層	ロクロ挽き重弧文	平行叩き目B→スリ消し	余切り痕、布目痕、模骨痕、凸型台圧痕	II a		
33-6	G a -34	軒平瓦	1灰	ロクロ挽き重弧文	ヘラケズリ	布目痕、模骨痕、凸型台圧痕	II b		
33-7	G a -32	軒平瓦	1灰 2層、3層、西3層	ロクロ挽き重弧文	ナデ、剝離面、平行叩き目C	余切り痕、布目痕、模骨痕、布縫じ痕、粘土板合わせ目痕	II a		30-9
33-8	G a -57	軒平瓦	1灰 2層	ロクロ挽き重弧文	ナデ	剝離面平行叩き目B	II a		
33-9	G a -61	軒平瓦	1灰 2層	ロクロ挽き重弧文	ナデ	剝離面平行叩き目B	II a		

番号	登録番号	種別	遺構・層位	法量 cm	特徴		分類	写真図版
					凸面	凹面		
34-1	F b -59	丸瓦	1灰 2層		正格子叩き目C	布目痕、凸型台圧痕、側縁ヘラケズリ	I b	31-1
34-2	F b -77	丸瓦	1灰 2層	28.2	ナデ	余切り痕、布縫じ痕、側縁ヘラケズリ	IV	31-2
34-3	G b -184	平瓦	1灰 2層	(18.5)	正格子叩き目A、側面ヘラケズリ	余切り痕、布目痕、模骨痕、凸型台圧痕	I A a	31-3
34-4	G b -181	平瓦	1灰 西3層	40.8	斜格子叩き目A→正格子叩き目B、一部布目痕、側面ヘラケズリ	余切り痕、布目痕、模骨痕	I B i	31-4
35-1	G b -252	平瓦	1灰 1層		長方形格子叩き目、側面ヘラケズリ	余切り痕、布目痕、模骨痕、布縫じ痕	I A g	31-9
35-2	G b -205	平瓦	1灰 SD 1 最下層		斜格子叩き目A	余切り痕、布目痕、模骨痕、凸型台圧痕	I A	33-1
35-3	G b -189	平瓦	1灰 西3層	(33.0)	正格子叩き目C→一部ナデ、一部布目痕、側縁ヘラケズリ	余切り痕、布目痕、模骨痕、側縁・広端縁ヘラケズリ	I A c	31-6
35-4	G b -240	平瓦	1灰 2層 3層 SD 1 最下層	34.8	正格子叩き目C→スリ消し→横方向へラケズリ→無文叩き目	余切り痕、布目痕、模骨痕、粘土板合わせ目痕、凸型台圧痕、両側面ヘラケズリ	I A c	31-8
36-1	G b -186	平瓦	1灰		斜格子叩き目A、側面ヘラケズリ	余切り痕、布目痕、模骨痕、凸型台圧痕	I A d	
36-2	G b -267	平瓦	1灰 2層		斜格子叩き目A→長方形格子叩き目、一部ナデ	余切り痕、布目痕、模骨痕	I B k	33-2
36-3	G b -268	平瓦	1灰 2層		正格子叩き目B→平行叩き目C、側縁・広端縁ヘラケズリ	余切り痕、布目痕、模骨痕、布縫じ痕凸型台圧痕、側面ヘラケズリ	I B h	33-3
36-4	G b -185	平瓦	1灰 2層	39.8	正格子叩き目A→斜格子叩き目A、一部布目痕、側面ヘラケズリ	余切り痕、布目痕、模骨痕、粘土板合わせ目痕、布縫じ痕、凸型台圧痕、広端面左隅切り	I B a	31-7
36-5	G b -217	平瓦	1灰 2層		斜格子叩き目C、側縁ヘラケズリ	余切り痕、布目痕、ほぼ全面ヘラケズリ	I A f	
37-1	G b -239	平瓦	1灰 2~3層、3層	45.0 30.0	長方形格子叩き目→スリ消し、両側面ヘラケズリ	余切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、凸型台圧痕	I A g	32-1
37-2	G b -274	平瓦	1灰 2層	30.3	平行叩き目B、両側面ヘラケズリ	余切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、右側縁ヘラケズリ	II b	31-10
38-1	G b -286	平瓦	1灰 2層、西3層、3層	40.2	平行叩き目C→スリ消し、広端面ヘラケズリ	余切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、凸型台圧痕、側縁・広端縁ヘラケズリ	II c	32-5

番号	登録番号	種別	遺構・層位	法量 cm		特徴		分類	写真図版
				長さ	広端幅 狭端幅	凸面	凹面		
38-2	G b-289	平瓦	1灰 西3層	39.3		平行叩き目E→スリ消し	布目痕、模骨痕、布縫じ痕、凸型台圧痕	I e	
39-1	G b-321	平瓦	1灰 2層、西3層、3層 SD 1 最下層	39.5		平行叩き目C→スリ消し（ほぼ全面へラケズリ）、両側縁・広狭端縁へラケズリ	糸切り痕、布目痕、両側縁へラケズリ	II c	32-4
39-2	G b-313	平瓦	1灰 1層	40.7		縫叩き目→横方向スリ消し、両側縁へラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、両側縁へラケズリ	III f	32-2
40-1	G b-324	平瓦	1灰 2層、3層 SD 1 最下層		27.3	全面ナデ、一部へラケズリ	糸切り痕、布目痕、ほぼ全面へラケズリ	IV b	
40-2	G C-3	隅切り瓦	1灰 2層、西3層 SD 1 2層	40.3	31.3	正格子叩き目B、右側縁・広狭端縁へラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、一部ナデ	I A b	32-6
41-1	G C-7	隅切り瓦	1灰 西3層	39.2		平行叩き目C→スリ消し、側縁・広狭端縁へラケズリ	糸切り痕、布目痕、ほぼ全面へラケズリ	II c	32-8
41-2	G C-6	隅切り瓦	1灰 2層、西3層、3層			全面ナデ	布目痕、模骨痕、布縫じ痕、一部へラケズリ	IV b	32-7

番号	登録番号	種別	遺構・層位	法量 cm			特徴		写真図版
				長さ	幅	厚さ	両面平行叩き目→スリ消し、磨滅している	平行叩き目、磨滅している	
41-3	H-1	埠	1灰 3層	(12.0)	15.0	5.8~6.1			33-6
41-4	H-2	埠	1灰	(9.0)	13.5	4.0~4.3	平行叩き目、磨滅している		33-7

番号	登録番号	種別	器形	遺構・層位	法量 cm		外 面 調 整		内面調整	分類	残存	写真図版
					口径	底径 器高	凸面	凹面				
42-1	E-181	須恵器	蓋	1灰 2層	16.0		ロクロナデ、天井部回転へラケズリ		ロクロナデ、かえり	A I	1/10	
42-2	E-180	須恵器	蓋	1灰 2層	18.8		ロクロナデ、天井部回転へラケズリ		ロクロナデ、かえり	A I	1/4	33-4
42-3	E-183	須恵器	蓋	1灰 2層	21.5	1.9	ロクロナデ、天井部手持ちへラケズリ		ロクロナデ	A II	1/4	33-5
42-4	E-167	須恵器	壺	1灰 2~3層	24.4	3.7	ロクロナデ、体部下端へ底部回転へラケズリ		ロクロナデ、脚部欠損	A I	1/3	33-8
42-5	E-185	須恵器	鉢	1灰 3層、西3層	16.7		ロクロナデ		ロクロナデ	A I	1/4	
42-6	E-194	須恵器	壺	1灰 2層	19.7		ロクロナデ		ロクロナデ	A	1/7	
42-7	E-168	須恵器	高付杯	1灰	16.8	13.0	3.55	ロクロナデ	ロクロナデ	A I	1/8	
42-8	E-169	須恵器	高台付壺	1灰 1層	16.0	12.6	4.02	ロクロナデ	ロクロナデ	A I	1/16	
42-9	E-184	須恵器	壺	1灰 3層、西3層	6.7		ロクロナデ、底部手持ちへラケズリ、窓口付着		ロクロナデ	A III	3/4	
42-10	E-178	須恵器	壺	1灰 2層、西3層	6.7		ロクロナデ、体部下端回転へラケズリ→底部ナデ		ロクロナデ	A III	1/2	
42-11	E-189	須恵器	円面 視	1灰 西3層	10.3	5.8	11.3	ロクロナデ、長方形透し孔	ロクロナデ	A	1/4	33-12
42-12	E-190	須恵器	円面 視	1灰 2~3層	14.5		ロクロナデ、長方形透し孔		ロクロナデ	A	33-15	
42-13	E-199	須恵器	壺	1灰 西2a層			波状沈線文		ロクロナデ			
42-14	E-209	須恵器	壺	1灰 1層			波状沈線文		ロクロナデ			33-11
42-15	E-198	須恵器	壺	1灰 3層			波状沈線文		ロクロナデ			33-9
42-16	E-205	須恵器	壺	1灰 2~3層			波状沈線文		ロクロナデ			33-10
42-17	E-208	須恵器	壺	1灰 2層			沈線文、櫛描列点文		ヘラナデ			33-14
42-18	E-203	須恵器	壺	1灰 2層			波状沈線文、平行叩き目→ナデ		ナデ			33-13

番号	登録番号	種別	遺構・層位	瓦当文様	特 徵				分類	備考	写真図版
					凸面	凹面	内面調整	分類			
43-1	F a-17	軒丸瓦	SD 1 中層	単弁八葉蓮華文							34-1
43-2	F a-19	軒丸瓦	SD 1 最下層	単弁八葉蓮華文							34-3
43-3	F a-16	軒丸瓦	SD 1 上層								
43-4	F a-18	軒丸瓦	SD 1 下層	単弁八葉蓮華文							34-2
43-5	G a-37	軒平瓦	SD 1 中層	ロクロ挽き重強文	額部ナデ	布目痕、模骨痕、左側面へラケズリ					34-4
43-6	G a-36	軒平瓦	SD 1 底面	ロクロ挽き重強文	正格子叩き目B→スリ消し 額部側面止格子叩き目B	布目痕、模骨痕、凸型台圧痕					34-6
43-7	G a-65	軒平瓦	SD 1 底面	ロクロ挽き重強文	額部側面のナデ	剥離面正格子叩き目B					34-7
43-8	G a-62	軒平瓦	SD 1 1層	ロクロ挽き重強文	額部横方向のナデ	剥離面正格子叩き目B					
43-9	G a-27	軒平瓦	SD 1 中層 西3層	ロクロ挽き重強文	額部横方向のナデ	剥離面正格子叩き目B					34-10
43-10	G a-69	軒平瓦	SD 1 5層	ロクロ挽き重強文	正格子叩き目B→スリ消し 額部側面止格子叩き目B	布目痕、模骨痕					
43-11	G a-73	軒平瓦	SD 1 最下層	ロクロ挽き重強文	一部布目痕、ナデ、ヘラケズリ	剥離面平行叩き目C					34-8

番号	登録番号	種別	遺構・層位	法量 cm		特 徵		分類	写真図版
				長さ	広端幅 狭端幅	凸面	凹面		
44-1	G b-366	平瓦	SD 1 最下層			正格子叩き目A	糸切り痕、布目痕、凸型台圧痕	I A a	34-14
44-2	G b-367	平瓦	SD 1 最下層			正格子叩き目C→スリ消し・側縁・狭端縁へラケズリ	糸切り痕、布目痕、全面へラケズリ	I A c	34-15
44-3	G b-372	平瓦	SD 1 最下層			斜格子叩き目B→スリ消し・側縁へラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、布縫じ痕、粘土板合せ目痕、凸型台圧痕	I A e	34-13
44-4	G b-376	平瓦	SD 1 最下層			正格子叩き目B→平行叩き目C、一部ナデ	糸切り痕、布目痕、模骨痕	I B h	34-12
44-5	G b-368	平瓦	SD 1 最下層			正格子叩き目C、粘土板合せ目痕、一部へラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、布縫じ痕	I A c	34-17
44-6	G b-375	平瓦	SD 1 最下層			長方形格子叩き目→スリ消し・側縁へラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、粘土板合せ目痕、左側面へラケズリ、凸型台圧痕	I A g	34-16
44-7	G b-377	平瓦	SD 1 最下層			正格子叩き目B→平行叩き目C	糸切り痕、布目痕、模骨痕	I B h	34-11

番号	登録番号	種別	器形	遺構・層位	法量 cm		外 面 調 整		内面調整	分類	残存	写真図版
					口径	底径 器高	凸面	凹面				
45-1	E-262	須恵器	蓋	SD 1 中層			ロクロナデ、天井部回転へラケズリ		ロクロナデ、かえり	A I		
45-2	E-221	須恵器	壺	SD 1 中層			ロクロナデ、体部沈線、体部下端へ底部回転へラケズリ		ロクロナデ	A II	1/5	
45-3	E-222	須恵器	円面覗	SD 1 2層			ロクロナデ		ロクロナデ	A		34-19
45-4	E-226	須恵器	鉢	SD 1 下層、北7b層			ロクロナデ、波状沈線文		ロクロナデ	A I		34-18

出土した。瓦塼類は完形品のものはなくすべて破片であるが、单弁八葉蓮華文軒丸瓦6点、口クロ挽き重弧文軒平瓦78点、丸瓦62点、平瓦745点、塼1点がある。

2号溝跡（S D 2）

調査区A区の2号窯跡と1号灰原の間で検出された溝跡で、北西から南西方向に走っている。溝の規模は長さが約3m、幅60～80cm、深さ40cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底面は下幅で50～60cmで、高低差は北西が高く、南西が低くなっている。この溝跡は2号窯跡の外側を巡る排水施設の可能性がある。

堆積土は3層に分けられ、1・2層は暗褐色シルト、3層は黄褐色シルト質粘土で凝灰岩の小ブロックを混入する層である。2層と3層の層離面に平瓦の破片が数点出土している。

3号溝跡（S D 3）

調査区A区の西端で検出された溝跡で、断面のみが観察された。幅約2.3m、壁上面は東側が高く西側が低く、深さ150～50cmを測り、断面形はU字形を呈する。北西から南東方向に走る溝跡と推定される。

4. その他の遺構

1号土坑（S K 1）

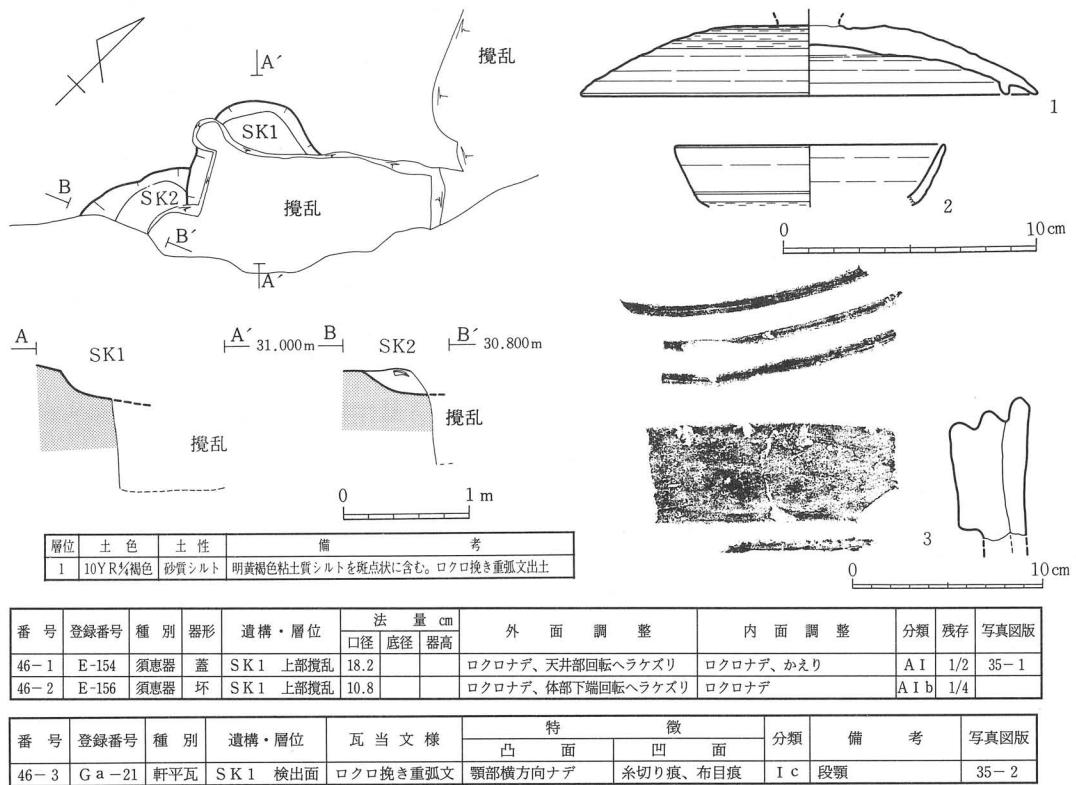
調査区B区の東側に位置している遺構で、調査時に6号窯跡として調査したが窯跡かどうか不明である。平面形は長軸残存長約1m、短軸約1mの橢円形状を呈するものと考えられ、攪乱により大きく壊されており、詳細は不明である。

2号土坑（S K 2）

調査区B区東側に位置し、1号土坑に切られている。平面形は橢円形を呈するものと考えられるが攪乱等により不明である。

通路状遺構

調査区A区の中央付近で検出されたもので、傾斜面を削平してテラス状の平坦面と溝跡を形成して南東から北西方向にかけて直線上に斜面を登っている。テラス状の部分は幅約1～1.5mであり、その北側に幅約15cm、深さ5cmのS D 4溝跡が伴っている。この遺構は2号窯跡、1号溝跡を切っている。



第46図 1号・2号土坑

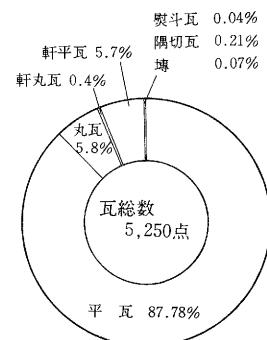
V. 出土遺物について

1. 瓦 塚 類

調査によって出土した瓦塚類には、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦・塚などがあり、2号・4号・5号窯跡や1号灰原、1号溝跡などから総数5,250点が出土している。その中でも、平瓦は4,608点と最も多い出土量で瓦塚類全体の約88%を占め、さらに丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦、道具瓦(熨斗瓦、隅切り瓦)、塚の順で出土している。

丸瓦や平瓦は凸面に叩き目の痕跡が観察されることが多く、その種類もいくつかに分けられ、丸瓦や平瓦を分類する一つの基準となることから、叩き目についてここで概観しておきたい。

第6表 瓦塚類構成比率



(1) 叩き目の種類 (第47図、写真36-1~8)

丸瓦や平瓦は、凸面がスリ消されて叩き目が不明なもの以外は、ほとんど観察されており、その種類は大きく格子・平行・縄叩きの3つに分けられる。格子叩き目は形状や大きさにより正格子叩き目(A・B・C)、斜格子叩き目(A・B・C)、長方形格子叩き目の7種類に細分される。また、平行叩き目は凸線の幅や高低などによりA~Fの6種類に細分され、縄叩き目を合わせた叩き目の合計は14種類が観察されている。

正格子叩き目 A 一辺の長さが12~15mmを測る大形の正格子叩き目である。同一の叩き目の中でも大きさが異なり、やや長方形に近い正方形のものもある。

正格子叩き目 B 一辺の長さが5~10mmを測る中形の正格子叩き目である。同一の叩き目でも大きさにばらつきがあり、8~9mmのものが一般的である。部分的に長方形や斜格子に近いものもある。

正格子叩き目 C 一辺の長さが4~6mmを測る小形の正格子叩き目である。正格子A・B類と同様、斜格子に近いものもある。

斜格子叩き目 A 一辺の長さが10~14mmを測る大形の斜格子叩き目で、斜格子の一単位に1本の刻線を入れて長方形状としている部分がある。

斜格子叩き目 B 一辺の長さが9~10mmを測る中形の斜格子叩き目で、整然とした菱形のものである。

斜格子叩き目 C 一辺の長さが5~6mmを測る小形の斜格子叩き目である。

長方形格子叩き目 長辺が13~15mm、短辺が3~5mmを測る長方形叩き目である。

平行叩き目 A 平行する凸線は鋭くて高い叩き目で、凸線間の幅が5～7mmと広い平行叩き目である。凸線は断面三角形状で、木目が鮮明に観察される。叩き目も強く叩かれて凹凸が著しい。

平行叩き目 B 平行する凸線間の幅が3～4mmとやや狭い平行叩き目で、凸線はA類ほどではないが断面三角形状で鋭く高い。

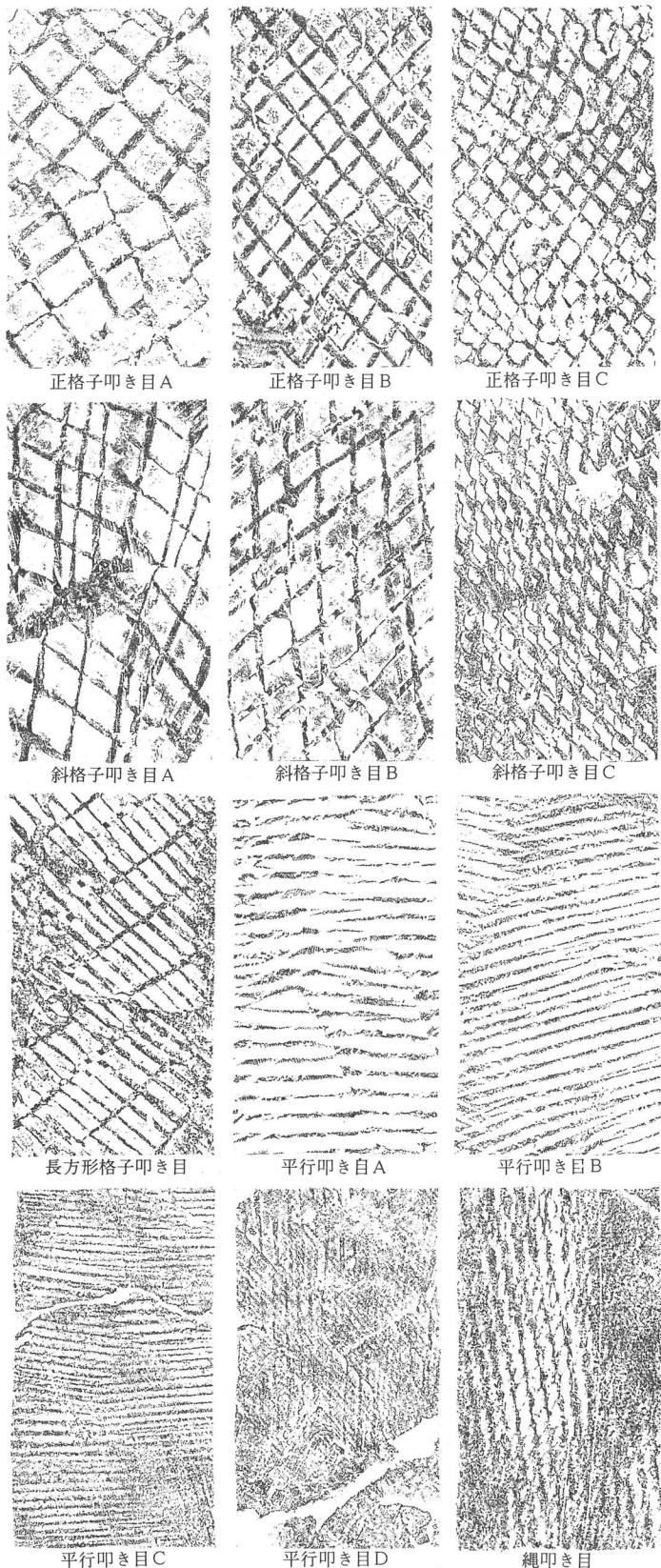
平行叩き目 C 平行する凸線間の幅は1～3mmと狭い平行叩き目で、凸線は細く低いものである。

平行叩き目 D 平行する凸線間の幅は4～5mmと広い平行叩き目で、凸線は細く低いものである。

平行叩き目 E 平行叩き目Cと同類のものと考えられるが、叩き板がすり減って不明瞭のものである。

平行叩き目 F 平行叩き目Dと同類のものと考えられるが、叩き目板がすり減って不明瞭のものである。

縄叩き目 左撚りの縄叩き目であり、凸面に残された撚紐痕は右上り左下りの1段Lの撚紐である。



第47図 叩き目の種類 (縮尺1/2)

(2) 瓦の分類

瓦は製作技法や凸面・凹面・側面・端面に残された痕跡などを考慮し、凸面の叩き目や凹面の模骨痕、粘土板合わせ目痕や布の合わせ目痕や布綴じ痕などの特徴に注目して以下のように分類した。

丸 瓦

丸瓦は、瓦塼類全体の5.8%を占める総数304点が各遺構より出土している。そのうち完形に近いものが2号・4号窯跡から8点出土しており、それ以外はすべて破片である。これらの丸瓦は製作技法、凸面の叩き目、調整などによって5類に分類される。

丸瓦 I類

粘土板巻き作りの無段（行基式）丸瓦で、凸面が格子叩きされるものである。叩き目の種類によってさらに5類に細分される。a類：正格子叩き目Bのもの、b類：正格子叩き目Cのもの、c類：斜格子叩き目Aのもの、d類：斜格子叩き目Bのもの、e類：長方形格子叩き目のもの、である。

I類は5号窯跡、1号灰原、1号溝跡から35点出土している。完形品がないため全体の大きさは不明であるが、狭端部幅推定9.5cm、残存長約20cmのものがある。この類は、凸面の叩き目が縦方向のナデ調整によってスリ消しされているものが多く、凹面は斜方向の糸切り痕、布目痕が観察され、まれに布を合わせてかがり縫いをした布綴じ痕がみられる。凹面の両側縁にはヘラケズリによる面取りがなされている。

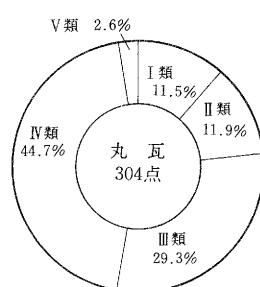
丸瓦 II類

粘土板巻き作りの無段（行基式）丸瓦で、凸面が平行叩きされるものである。叩き目の種類により2類に細分される。a類：平行叩き目Aのもの、b類：平行叩き目Cのもの、である。II類は2・5号窯跡と1号溝跡より36点出土し、IIa類が19点、IIb類が17点ある。

IIa類 おもに2号窯跡前庭部排水施設より完形に近いもの5点が出土している。瓦の大きさは長さ36.2～37.4cm、広端部幅14.3～19.1cm、狭端部幅12.4cmを測り、断面形は半円形を呈する。凸面の平行叩き目はスリ消しがほとんどないものと、平行叩き目後スリ消しされるものとがある。叩き目は3～5cm幅で叩かれている。

凹面は斜方向・縦方向の糸切り痕や布目痕が観察され、まれに布を合わせてかがり縫いをした布綴じ痕（第49図1）や粘土板合わせ目痕がみられる。粘土板合わせ目痕はZ形とS形があり、さらに布目痕を切るように凸型台の痕跡と考えられるスジ状の圧痕^(註6)^(註7)

第7表 丸瓦構成比率



が観察されるものもある(第48図)。凹面の両側縁には1~3cmの幅でヘラケズリによる面取りのあるものがほとんどである。

II b類 完形のものではなく、小破片のため全体については不明であるが、凸面は平行叩き目C後ナデ調整のスリ消しが行なわれている。凹面は糸切り痕、布目痕があり、布目痕がつぶれ気味のものもある。

丸瓦III類

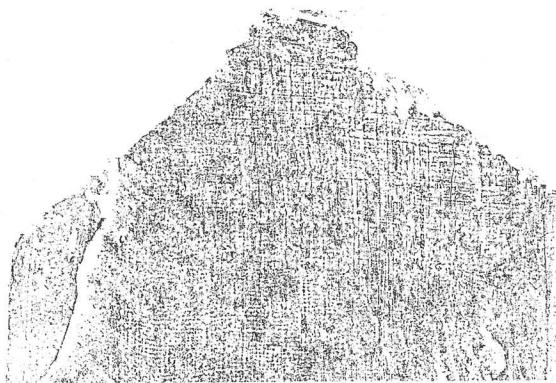
粘土板巻き作りの無段(行基式)丸瓦で、凸面を繩叩き目後ナデ調整のスリ消しが行なわれているものである。III類は2・4号窯跡などから29.3%を占める89点が出土している。完形に近いものは5点あり、瓦一枚の大きさは長さ36.6~40.1cm、広端部幅17.2~20.4cm、狭端部幅10.4~11.9cmで、断面形は半円形を呈する。

凸面は縦方向に繩叩きされた後、そのほぼ全面に縦方向のナデ・ヘラケズリ調整によるスリ消しが行なわれ、わずかに繩叩き目が観察される。

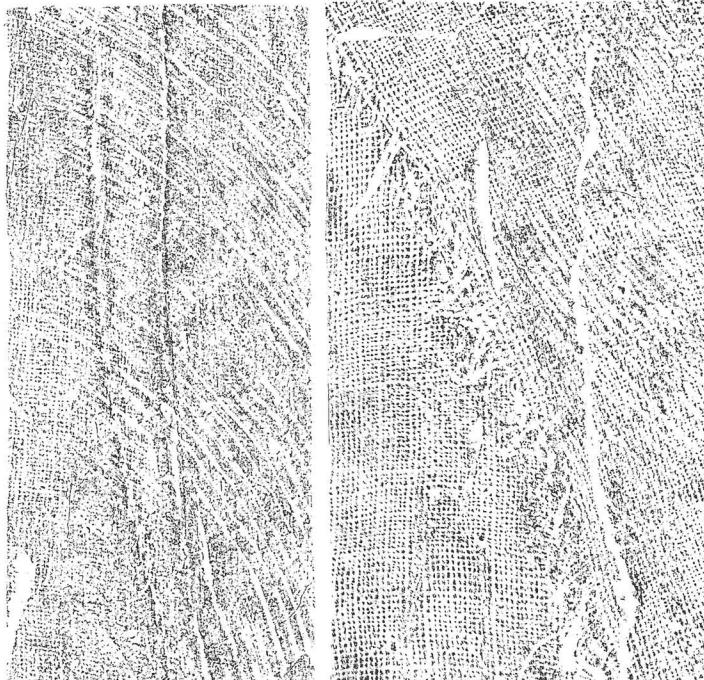
凹面には糸切り痕、布目痕、布の合わせ目痕(第49図2、写真36-10)、粘土板合わせ目痕が観察される。布の合わせ目痕は10点で観察され、縫い合わせたものではなく巻いて合わせたもので、布の端糸がそのまま残っている。粘土板の合わせ目痕はまれにみられ、Z形とS形とがある。凹凸面の側縁にはヘラケズリによる面取りが行なわれているものが多い。

丸瓦IV類

粘土板巻き作りの無段(行基式)丸瓦で、凸面は全面にナデ・ヘラケズリ調整され、叩き目が不明のものである。完形品がないため全体は不明であるが、長さ28.2cmを測るものがあ



第48図 スジ状の圧痕（縮尺1/2）



1. 丸瓦II類(Fb-3)

2. 丸瓦III類(Fb-9)

第49図 布縫じ痕・布合わせ目痕（縮尺1/2）

る。III類と区別できないものも含んでいるが、縄叩き目が観察されないものをこの類とした。IV類はおもに1号灰原、1号溝跡より45.1%を占める137点が出土している。凹面の糸切り痕、布目痕、布の合わせ目痕、粘土板合わせ目痕はIII類と同様のものである。

丸瓦V類

粘土紐巻き作りの有段（玉縁）丸瓦のもので、小破片7点が4・5号窯跡と1号溝跡より出土しているだけである。凸面の叩き目により2類に細分され、a類：縄叩き目後スリ消しのもの、b類：叩き目が不明なもの、である。小破片のため全容は不明である。

平 瓦

平瓦は各遺構から瓦塼類全体の87.9%を占める総数4,608点が2・4・5号窯跡と1号灰原、1号溝跡より多量に出土している。製作技法、凸面の叩き目、凹面の模骨痕、調整などによって5類に分類される。

平瓦I類

粘土板桶巻き作りの平瓦で、凸面が格子叩きされるものである。凸面の叩き目が1種類のもの（A類）、2種類のもの（B類）とに大別される。

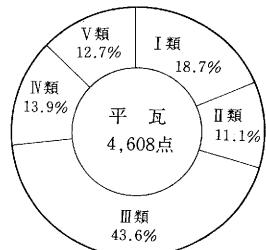
I A類 凸面が1種類の格子叩き目からなるもので、その種類によってさらに7類に細分される。a類：正格子叩き目Aのもの、b類：正格子叩き目Bのもの、c類：正格子叩き目Cのもの、d類：斜格子叩き目Aのもの、e類：斜格子叩き目Bのもの、f類：斜格子叩き目Cのもの、g類：長方形格子叩き目のもの、である。

I A類は完形に近いものや瓦の一辺が明らかなものが5点出土している。瓦の平面形は長方形に近く、瓦一枚の大きさは長さ42.5cmと45cm、広端部幅34.8cm、狭端部幅24.4～30cmを測る。断面形は円弧形を呈し、その形状より4枚作りの平瓦と考えられる。この類は820点出土しており、1号灰原と1号溝跡より出土したものがその約81%を占めている。

この類の格子叩き目には同一の叩き目が重複し、2次叩きしているものも含んでいると考えられる。またc・d・e・g類のように格子叩き目後ナデ調整によるスリ消しが行なわれているものが比較的多くみられる。

凹面には糸切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、模骨痕、布綴じ痕などが観察される。糸切り痕は斜・横方向のものが多く、模骨痕は約3～5cmの比較的幅の広いもので、桶板の枚数は7枚から8枚である。模骨痕は凸部がつぶれ気味のものが多く、凸型台の圧痕と考えられるスジ状の圧痕が布目痕を切って多く観察される。粘土板合わせ目痕は132点中16点が認められ、S形3点とZ形5点がある。

第8表 平瓦構成比率



布縫じ痕は12点に観察され、布と布を合わせてかがり縫いをし、さらに上下の布をぐし縫いしたもの（第50図1、写真36-12）で、かがり縫いとぐし縫いの間隔が広いものと狭いものとがある。

凹面や凸面の両側面にはヘラケズリによる面取りが行なわれている。特に凸面の両側面は、大きくヘラケズリされているものが多い。

I B類 凸面が格子叩き目され、さらに種類の異なる叩き目が重複する2次叩きのものである。その種類によって11類に細分され、a類：正格子叩き目A→斜格子叩き目Aのもの、b類：正格子叩き目A→斜格子叩き目Bのもの、c類：正格子叩き目B→正格子叩き目Aのもの、d類：正格子叩き目B→斜格子叩き目Aのもの、e類：正格子叩き目B→斜格子叩き目Bのもの、f類：正格子叩き目B→斜格子叩き目Bのもの、g類：正格子叩き目B→長方形格子叩き目のもの、h類：正格子叩き目B→平行叩き目Cのもの、i類：斜格子叩き目A→正格子叩き目Bのもの、j類：斜格子叩き目B→正格子叩き目Bのもの、k類：斜格子叩き目A→長方形格子叩き目のもの、である。2次叩きが部分的に観察されているが、小破片などはIA類に分類している可能性がある。また2次叩きが全面に及び1次叩きが部分的にみられるものと、反対に2次叩きが部分的にみられるものがある。IB類はIA類同様粘土板桶巻き作りの平瓦で、43点と出土量は少なく小破片のものが多い。一枚の大きさが推定されるものは2点あり、瓦の大きさは長さ39.8cmと40.8cm、広端部幅約25cmを測る。平面形は長方形に近く、断面形は円弧形を呈し、その形状より4枚作りの平瓦と考えられる。

製作技法や叩き目、糸切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、布縫じ痕、面取りなどはIA類と同様の特徴がある。なお1号灰原出土のF b-185（第36図4）は広端部左側に小さな隅切りがある。

平瓦II類

粘土板桶巻き作りの平瓦で、凸面が平行叩き目されるものである。その種類や調整などによってさらに6類に細分される。a類：平行叩き目Aのもの、b類：平行叩き目Bのもの、c類：平行叩き目Cで叩いた後ヘラケズリ・ナデ調整によるスリ消しのもの、d類：平行叩き目C・Dの2種類のもの、e類：平行叩き目Eのもの、f類：平行叩き目Fのもの、である。この類は平瓦の11.1%を占める511点が出土し、その中でも1号灰原と1号溝跡より74.6%の381点が出土している。II類の中ではII b類とII c類が32.9%と32.1%と最も多く、II a類が15.5%の割合を占めている。

II a類 2・5号窯跡、2号窯跡前庭部南側攪乱よりほぼ完形のもの2点、完形に近いもの8点が出土し、瓦一枚の大きさは長さ40.6~45.2cm、広端幅30~33.5cm、狭端幅推定30~30.5cmを測る。平面形は長方形であり、断面形は円弧形に近いものもあるが、中央部が平坦に近く

側面が上方へ折れ曲がるような「—」状を呈するものが多い。凸面の側面は大きくヘラケズリによる面取りがなされ、広端部の両側および狭端部の一部に小さな隅切りが行なわれている。小さな隅切りは、広端部両側の隅をほぼ全部切り落としたもので、狭端部の隅切りは1点だけにみられ、狭端部のすべてにあるかどうか不明である。

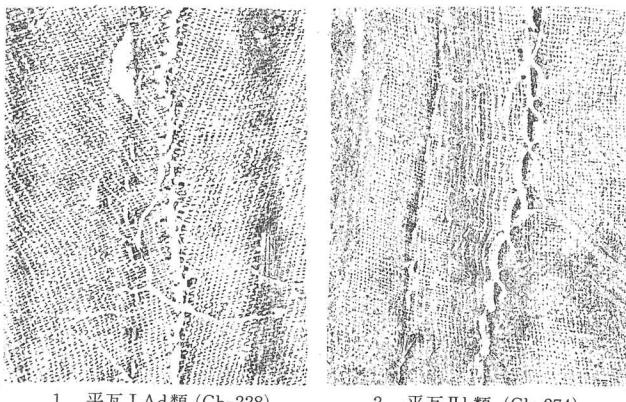
凸面の叩き目は平行叩き目Aが重複し、2度にわたり叩かれている。1次叩きは平瓦の狭端部を奥に置いた場合、右上から左下の斜方向に走り、2次叩きは同方向や横方向、反対の斜方向と様々である。2次叩きにより1次叩きはその痕跡が残る程度であり、叩き目や面取り以外には凸面調整がほとんど加えられていないものである。

凹面には糸切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、模骨痕、布綴じ痕が観察される。糸切り痕は縦方向のものもあるが、主に横・斜方向のもので、粘土板の合わせ目の部分を境に糸切りの方向が連続しないで変化している。粘土板の合わせ目痕は10点中4点にみられ、Z形である。模骨痕は3~4cmの幅で、凸部はつぶれ気味であり不明瞭のものが多い。布目痕は部分的に消えており、その部分には縦方向の細かいスジ状の圧痕が観察され、凸型台の圧痕かと考えられる。さらに布目痕のつぶれや消えている範囲は凹面側縁部付近が顕著である。また布綴じ痕は2点にみられるが、かがり縫いは不明瞭となっている。

II b類 II類の中では出土量が最も多く32.9%を占めており、一辺の大きさが明らかなもの3点以外はすべて小さな破片である。瓦の平面形は長方形であり、長さ37.5cm、狭端幅30cmを測る。断面形はII a類と同じような「—」状を呈し、側面が大きく面取りされる形状も似ている。凸面は平行叩き目Bが重複し2度にわたり叩かれている。叩き目の方向はII a類と同様である。

凹面には糸切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、模骨痕、布綴じ痕(第50図2、写真36-11)が観察される。糸切り痕は斜方向であり、粘土板の合わせ目の部分を境に糸切りの方向が連続しないで変化している。粘土板の合わせ目痕はZ形であり、模骨痕は2.5~3.5cmの幅であるがII a類同様つぶれ気味で不明瞭である。

II c類 II類中32.1%とII b類とほぼ同じ出土量で、一辺の大きさが明らかなものが5点ある。瓦の大きさは長さ38.5~40.2cm、狭端幅28.5cmを測り、平面形は長方形、断面形は円弧形



1. 平瓦 I Ad類 (Gb-228) 2. 平瓦 II b類 (Gb-274)

第50図 平瓦の布綴じ痕 (縮尺1/2)

で、その形状により4枚作りのものと考えられる。破片のものが大半を占め、1号灰原と1号溝跡から90.2%が出土している。II a・II b類は叩き目以外ほとんど凸面調整が見られないのに対して、II c類はナデ・ヘラケズリ調整によるスリ消しが施されている。凹面には糸切り痕、模骨痕、布目痕があり、まれに粘土板合わせ目痕、布綴じ痕が観察される。糸切り痕は斜方向もあるが横方向のものが多くみられ、模骨痕は2.7~4.0cmの幅で、不明瞭なものが多い。また、ナデ・ヘラケズリ調整が全体的に及んでいるものもある。平瓦凹凸面の側縁・広狭端縁にはヘラケズリによる面取りがある。

II d類 2種類の平行叩き目があり、平行叩き目C→平行叩き目Dの順に叩かれている。II類の中では最も少ない30点で、1号灰原と1号溝跡からのみ出土している。すべて破片で不明な点が多く、一枚の大きさも狭端幅29.7cmを測るだけである。平面形は長方形に近く、断面形は円弧形でその形状より4枚作りと考えられる。

II e類 II c類と同様の可能性もあるが叩き目が不明瞭でスリ消しはあまり見られない。平面形は長方形で、長さ42.4cmを測る。断面形は円弧形で、その形状により4枚作りと考えられる。模骨痕は不明瞭で凸型台の圧痕と思われる痕跡がある。布綴じ痕は3本縫いのものがある。

II f類 平行叩き目Fであり、叩き目が不明瞭のもので33点が出土している。平面形は長方形に近いもので、一枚の大きさが長さ39.3~40.3cmを測る。断面形は円弧形で、その形状より4枚作りと考えられる。布綴じ痕や粘土板合わせ目痕のS形が観察されている。

平瓦III類

粘土板桶巻き作りの平瓦で、凸面が繩叩き目のものである。平瓦全体の中では、43.6%と最も多い2,007点が出土している。スリ消しや平行叩き目、調整などにより7類に細分される。a類：繩叩き目後縦方向のスリ消しのもの、b類：III a類の広端縁に平行叩き目Cのあるもの、c類：繩叩き目スリ消し後に平行叩き目Cのあるもの、d類：繩叩き目後ほぼ全面ヘラケズリのもの、e類：III b類のものでほぼ全面ヘラケズリのもの、f類：繩叩き目後横方向のスリ消しのもの、g類：繩叩き目であるが小破片のため分類不能のもの、である。この類の平瓦は2・4・5号窯跡より79.7%を占める1,599点が出土している。

凹面は糸切り痕、布目痕、模骨痕、粘土板合わせ目痕、布綴じ痕が観察され、特に模骨痕は明瞭に残っている。

III a類 凸面が繩叩き目後スリ消しのもので、III類の80%を占める1,606点が2・4号窯跡などより出土している。ほぼ完形に近いものが31点あり、平面形は台形、断面形は円弧形である。凸面の調整は縦方向の直線の繩叩き目であり、縦方向のナデ調整によるスリ消しが行なわれている。凹面の調整は糸切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、模骨痕、布綴じ痕などが観察される。2号窯跡と4号窯跡の平瓦は一枚の大きさや分割枚数などに相違点がある。

〔2号窯跡〕 完形に近いものが10点出土している。一枚の大きさは長さ39.3～50.0cm、広端幅30.0～32.4cm、狭端幅22.9～28.5cmを測り、断面の形状より4枚作りのものと考えられる。

凹面の糸切り痕は横・斜方向が多く、模骨痕は明瞭に観察される。模骨痕の幅は1.5～3.3cmで、桶板枚数は12～14枚を数える。粘土板合わせ目痕は登録された25点中12点に観察され、Z形とS形とがあり、その部分は縦方向にナデ調整され消されているものが多い。布綴じ痕はかがり縫いであるが、不明瞭なものが多い。凹凸面の側縁と狭端縁にはヘラケズリによる面取りが多く行なわれている。また、側面・小口面はヘラケズリされるものが一般的であり、少量ではあるが分割しただけで側面にヘラケズリがなく、分割した破面がそのまま残っているものもある。

〔4号窯跡〕 完形に近いものが21点出土している。一枚の大きさは長さ38.0～42.6cm、広端幅27.1～31.6cm、狭端幅23.1～28.3cmを測り、断面の形状より3枚作りのものと考えられる。凹面の糸切り痕や布目痕、模骨痕や凹凸面の面取りは2号窯跡のものと同じである。模骨痕は明瞭に観察され、幅が1.6～2.7cmで桶板枚数は12～14枚を数える。布綴じ痕や粘土板合わせ目痕、分割した破面のままのものがまれに観察される。粘土板合わせ目痕は3例あり、Z形とS形がある。

III b類 III a類と同類かもしれないが、凸面が縄叩き目後スリ消しされ広端縁に平行叩き目Cが軽く叩かれているものである。この叩き目は不明瞭であり、桶をはずして乾燥する際に軽く叩かれている補助的な叩きと考えられる。^(註8)

この類は2号窯跡より比較的多く出土している。ほぼ完形に近いものが2号窯跡から9点、4号窯跡から1点が出土している。瓦の平面形は台形を呈し、一枚の大きさが長さ40.0～45.6cm、広端幅29.1～31.8cm、狭端幅26.5～28.4cmを測る。断面形は円弧形で、その形状より4枚作りの平瓦と考えられる。

III c類 III a類のものに平行叩き目Cが2次叩きされているもので、ほとんど4号窯跡から出土しており、完形に近いものが6点ある。瓦の平面形は台形で、一枚の大きさが長さ38.3～43.0cm、広端幅26.2～29.5cm、狭端幅22.3～26.6cmを測る。断面形は円弧形で、その形状より3枚作りのものと考えられるが、焼成時の歪みが著しく不明なものもある。

III d・III e類 III a・III b類のものがほぼ全面にヘラケズリ調整されるもので、2・4号窯跡から少量出土しているだけである。III d類は2号窯跡からほぼ完形のもの3点が出土し、瓦の平面形は台形で、一枚の大きさが長さ41.5～46.0cm、広端幅34.2cm、狭端幅27.0～29.5cmを測る。III e類はほとんど破片のものであり、大きさなどは不明である。

III f類 凸面が縄叩き目後ナデ調整による横方向のスリ消しが行なわれているもので、比較的多くの破片が各遺構から出土している。5号窯跡出土のG b-180(第27図1)が大きさの明らかなもので長さ41.4cm、中央部幅30.0cmを測る。

III g類 凸面が縄叩き目であるが小破片のため分類できないものである。

平瓦IV類

粘土板桶巻き作りの平瓦で、凸面に叩き目が行なわれたものかどうか不明のものである。完形に近いものがないため、他の分類のものも含んでいる。調整により3類に細分される。a類：全面がヘラケズリされるもの、b類：全面がナデ調整のもの、c類：ハケメ状（？）のもの、である。この類は平瓦の13.9%を占める641点が出土し、1号灰原と1号溝跡から75.2%にあたる482点が出土している。

凹面もナデ・ヘラケズリが行なわれているものが多く、部分的に糸切り痕、布目痕、模骨痕などが観察されるだけで、まれに粘土板合わせ目痕や布綴じ痕がある。

平瓦V類

小破片のものや凸面が剥離しているため不明な平瓦をこの類とした。

軒丸瓦

5号窯跡、1号灰原、1号溝跡から総数23点が出土しており、すべて単弁八葉蓮華文軒丸瓦1種類である。1号灰原出土の軒丸瓦には、瓦当面が完形のものが4点あるが、窯壁が溶け出して完全に接着しており、同様の軒丸瓦と考えられる。

軒丸瓦 I類

単弁八葉蓮華文軒丸瓦であり、瓦当文様の明らかなもの11点が出土している。文様は同類であるが瓦当面の直径や細部の鋭さから2類に細分される。

I a類 1号灰原や1号溝跡より単弁八葉蓮華文軒丸瓦10点が出土している。すべて瓦当部分の破片であり、軒丸瓦の全容については不明である。瓦当部の直径は16.5～17cmを測り、内区と周縁の間には1条の凸圈線が巡る。内区は直径約11cmで花弁と間弁と中房からなり、花弁はやや平坦で子葉は細い棒状となり、間弁は花弁を取り囲み、その端部は盛り上がりイチョウ形を呈する。中房は直径3.8cmの円形で、蓮子は中央に1個、周辺に6個の計7個がある。丸瓦との接合方法は軒丸瓦の裏側に丸瓦にあうように凹みを彫って接合する印籠つぎであり、Fa-5のように裏側に刻み状のものをつけているものもある（写真30-1）。

I b類 瓦当文様はI a類と同じ単弁八葉蓮華文軒丸瓦であり、5号窯跡燃焼部床面直上よりFa-1（第24図1）1点が出土している。瓦当部の直径が推定18.6cmを測り、I a類より大形の軒丸瓦である。I a類より花弁や子葉が大きく、凸圈線や間弁は明瞭で端部の盛り上がりも大きく鋭い。この軒丸瓦は范への押し付けが強く、I a類のものがどちらかと言えば不明瞭であるとの対照的である。

軒丸瓦 II類

周縁部及び凸圈線の破片、あるいは丸瓦部の破片であるため、軒丸瓦の瓦当文様が不明なものが12点出土している。凸圈線は I a 類と類似するものであり、同類の単弁八葉蓮華文軒丸瓦と考えられる。

軒平瓦

軒平瓦は総数298点が出土し、そのうち、93.6%を占める279点が5号窯跡と1号灰原、1号溝跡から出土している。この軒平瓦は、すべて粘土板桶巻き作りのロクロ挽き重弧文軒平瓦で、頸部の形態は段頸と無段頸の2種類あり、その形態や凸面の叩き目などによって3類に分けられる。

軒平瓦 I 類

ロクロ挽き重弧文軒平瓦で、頸部は平瓦部凸面の広端部に粘土板を重ねて作り出した段頸のものである。凹面には布目痕、横方向の糸切り痕、模骨痕などがあり、断面形が円弧形を呈する粘土板桶巻き4枚作りの軒平瓦と考えられる。

平瓦部凸面の叩き目によってさらに3類に細分される。a 類：凸面が正格子叩き目のもの、b 類：凸面が平行叩き目のもの、c 類：頸部が破片で不明のもの、である。I 類は165点が出土しており、I a 類107点、I b 類9点、I c 類49点である。

I a 類 平瓦部凸面が正格子叩き目される段頸のもので、完形品はなくすべて破片である。頸部は平瓦部より粘土を接合した部分から剝離しているものがほとんどである。瓦当面の大きさは厚さが4～4.5cmを測り、唯一幅の明らかなG a-26（第32図7）は下弦幅28cmを測る。この類の頸部は幅約5～6cm、厚さは約2cmで平瓦部に接合されており、その文様はすべて無文で横方向のナデおよびヘラケズリ調整が行なわれている。

軒平瓦の平瓦部には平瓦 I A a 類・I A b 類が用いられ、そのまま頸部を接合させているようである。頸部接合には、平瓦凸面あるいは頸部面などに刻みを入れるのが一般的であるが、この類のものは平瓦部凸面の叩き目にそのまま頸部を接合しているため、その部分から剝離し、平瓦凸面部に施された格子叩き目が頸部内面に陰刻の圧跡として残っているものが多い。

平瓦部凸面の調整は、ほぼ全面にナデ・ヘラケズリ調整によってスリ消しされ、部分的に格子叩き目が残っているG a-25（第32図5）とほとんどスリ消しされ頸部剝離面の平瓦に格子叩き目がみられるだけのG a-36（第43図6）とG a-58（第33図1）がある。

I b 類 平瓦部凸面が平行叩き目される段頸のもので、平瓦部は平瓦 II a 類と II b 類が用いられているが、破片のため全体は不明である。頸部の文様は無文で横方向のナデ調整である。出土量は少なく、5号窯跡前庭部出土のG a-6（第24図3）は、平瓦部には平瓦 II a 類が用

いられ、残存する長さは15cm、残存幅15cm、瓦当面の厚さは4cmを測る。

I c類 段顎のもので、顎部のみの破片であるため叩き目が不明な軒平瓦である。顎部の文様は無文で横方向のナデ調整されている。

軒平瓦II類

ロクロ挽き重弧文軒平瓦で、平瓦部凸面の広端部に粘土を重ねて厚くしているが、顎部は平瓦部分との段が見られない無段顎の軒平瓦である。広端部凸面に粘土板を重ね、瓦当側が厚く中央に向かって薄くなる断面三角形状を呈するものである。平瓦部の凹面は布目痕、横方向の糸切り痕、粘土板の合わせ目痕、模骨痕、布綴じ痕などがあり、断面形が円弧形を呈する粘土板桶巻き4枚作りの軒平瓦と考えられる。

平瓦部凸面は平行叩き目の有無によってさらに2類に細分される。a類：凸面が平行叩き目のもの、b類：凸面がナデ調整のもの、である。II類は129点が出土し、II a類35点、II b類94点である。

顎部は無段顎であり、平瓦部凸面の叩き目の有無を除けばII a類とII b類の区別がつかないもので、I類と同様に接合した顎部が剝離しているものが多い。剝離した平瓦凸面には平行叩き目、顎部内側にはその圧痕や部分的に布目痕の一部が観察される。顎部の文様は無文で、縦方向のナデ・ヘラケズリ調整が粗く行なわれ、平瓦部の凸面も同様である。

平瓦部は平瓦II c類が用いられ、完形のものはないが1号灰原出土のG a-32（第33図7）が最も残りが良く、残存長30cm、幅32cmを測り、断面形は円弧形を呈する。この類のものは焼成不良で赤褐色を呈するものが多い。

軒平瓦III類

顎部が欠損する平瓦部の小破片であるため、I類及びII類に分類できないロクロ挽き重弧文軒平瓦で、7点が出土している。

熨斗瓦

5号窯跡と1号灰原よりそれぞれ1点ずつが出土している。平瓦IA類と同じもので、凸面の叩き目は長方形格子叩き目と正格子叩き目Cのものがある。G d-1（第24図4）は5号窯跡前庭部1層出土のもので、最大幅約15cm、残存長18cmを測る。凸面は長方形格子叩き目後ナデ調整による横方向のスリ消しが行なわれている。凹面は糸切り痕、布目痕、模骨痕が認められる。側面は片方がヘラケズリされ、もう一方は分割した破面のままである。

1号灰原1層出土のものは、最大幅15.5cmを測り、凸面が正格子叩き目C後縦方向のヘラケズリがほぼ全面に行なわれているものである。凹面は糸切り痕、布目痕、模骨痕があり、一部縦方向のヘラケズリが行なわれている。

隅切り瓦

隅切り瓦は5号窯跡と1号灰原より11点が出土し、いずれも平瓦の隅を大きく切り落としたものである（第40図2、第41図1・2）。これに用いられる平瓦にはIA類・II類・IV類・V類のものがある。そのうち全体がある程度明らかなもの3点が1号灰原より出土しており、IA b類・II c類・IV類が1点ずつある。隅切りの方向は凹面を上にして広端面を手前に置いた場合、狭端部から側面にかけて左側が切り落とされている。その他破片のもので左側が切り落とされるものが5点、右側が切り落とされるものが3点ある。

平瓦のIB類やII a・II e類の中には、広端部あるいは狭端部に小さく隅切りするものが13点出土しているが、これは隅切り瓦とは明瞭に区別されるものである。

埠

1号灰原と1号溝跡より4点が出土し、いずれも破片であるため不明瞭である。1号灰原出土の2点は比較的良好に残っているもので、H-1（第41図3）は平面形が方形又は長方形のもので、残存長12cm、幅15cm、厚さ5.8～6.1cmを測る。H-2（第41図4）は隅切りされた方形又は長方形のもので、残存長9cm、幅13.5cm、厚さ4.0～4.3cmを測る。表裏とも平行叩き目され、その後ナデ調整されているが磨滅しているため不明瞭である。その他小破片が2点あり、1点はH-1・2と同じ種類のもの、もう1点は1号溝跡出土の全面に平行叩き目されるものである。

（3）瓦の出土傾向（9・10・11表）

ここでは、窯跡や灰原などの遺構ごとの出土量や組み合わせについてみてみたい。

2号窯跡 出土瓦のほとんどは繩叩きの平瓦III類が主体を占め、焼成部から前庭部13層にかけてほぼ一面に出土している。焼成部床面の施設瓦には平瓦III類と丸瓦III・IV類のほか、ロクロ挽き重弧文軒平瓦I・II類、平瓦I類がある。さらに前庭部排水施設の丸瓦にはII類とIII類が併用されており、前庭部床面出土には平瓦II a類の完形品がある。

4号窯跡 丸瓦と平瓦の二種類だけで、平瓦と丸瓦は繩叩きのIII類が主体を占める。2号窯跡の平瓦は同じIII類のIII a・III b・III f類が多いのに対し、4号窯跡はIII a・III c類が多く、瓦の分割枚数も相違している。丸瓦は2・4号窯跡ともIII類とIV類が出土している。

5号窯跡 丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、道具瓦があるが、そのほとんどは平瓦である。軒丸瓦は单弁八葉蓮華文軒丸瓦I b類とII類、軒平瓦はロクロ挽き重弧文軒平瓦I類・II類がある。丸瓦はI～V類が出土しており、2・4号窯跡ではIII類が多いのに対し、5号窯跡ではIII類は28.6%と減少し、I・III・IV類がほぼ同じ割合でみられる。平瓦はIII類が多いが、2・4

号と比べ I・II類の出土量も多く、全体の約3割を占める。瓦は燃焼部から前庭部にかけて多く出土しており、焼成部床面では平瓦・丸瓦の破片もあるが、須恵器壺・蓋が多く出土している。焼成部出土の瓦は小破片であり、焼台として使用されているものと考えられる。

1号灰原 各遺構の中で最も多く
1,642点が出土しており、全種類がある。そのほとんどは平瓦で、81.3%を占めている。軒丸瓦は今回の調査で最も多い13点が出土し、瓦当文様の不明なII類を除けば、単弁八葉蓮華文軒丸瓦Ia類である。軒平瓦はロクロ挽き重弧文軒平瓦I~III類で、ほかの遺構の中で最も多い185点が出土している。平瓦と丸瓦はIII類が極端に減少し、I・II・IV類が多い。これは2・4号窯跡の平瓦と丸瓦がIII類主体であるのとは対照的である。

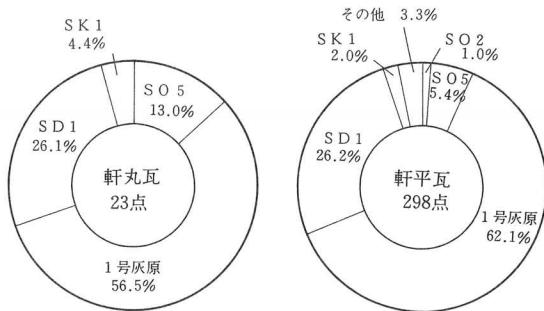
1号溝跡 1号灰原出土の瓦と多くの接合関係があり、両者に遺構の切り合いもなく灰原の形成過程で同時に埋まっており、出土する瓦も1号灰原と同じ傾向といえる。

以上のように、2・4号窯跡と1号灰原・1号溝跡から出土する瓦類の内容にはその種類や分類された瓦類、叩き目などに相違点が存在し、異なった傾向性を示している。5号窯跡はその双方に類似する出土傾向を示しているが、5号窯跡の軒丸瓦や軒平瓦は2・4号窯跡からはほとんどみられず、1号灰原・1号溝跡の出土の軒丸瓦と軒平瓦と同類である。このことから5号窯跡は1号灰原・1号溝跡に近いものであり、大きく2つの瓦群に大別される。

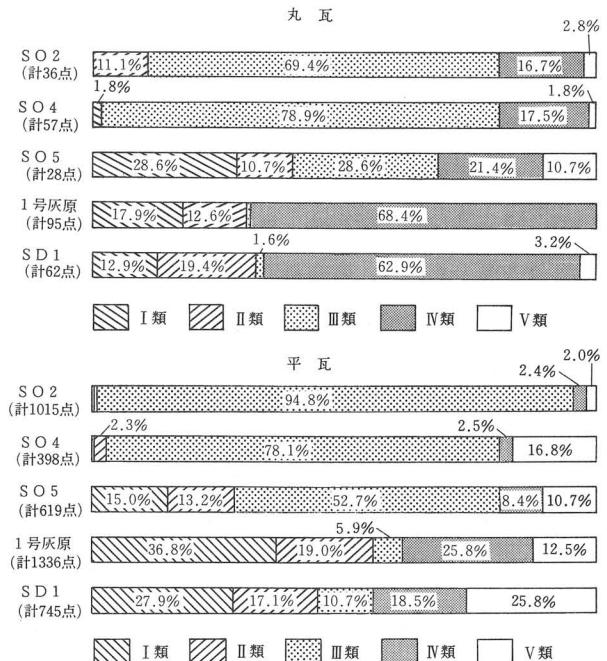
(A群の瓦) 5号窯跡とその灰原出土の軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦I・II・IV類、平瓦I・II・

IV類

第9表 遺構別軒丸瓦・軒平瓦構成比率



第10表 遺構別丸瓦・平瓦構成比率



第11表 瓦博類遺構別集計表

瓦博類總數5250點

〔B群の瓦〕 2・4号窯跡出土の丸瓦III・IV類、平瓦III・IV類

(4) 瓦の年代

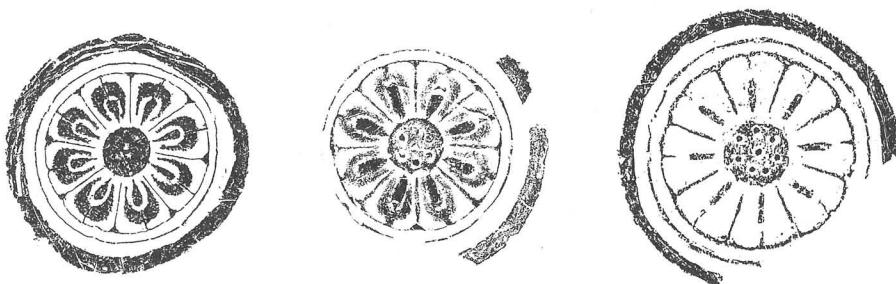
A群は単弁八葉蓮華文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦、格子叩き目の平瓦I類と丸瓦I類、平行叩き目の平瓦II類と丸瓦II類、全面がヘラケズリ、ナデ調整される平瓦IV類と丸瓦IV類の一群である。

軒丸瓦は周縁と内区との間に凸圈線が巡り、花弁がやや平坦で子葉が棒状となる単弁八葉蓮華文軒丸瓦であり、これと組み合う軒平瓦はロクロ挽き重弧文軒平瓦である。

この軒丸瓦や軒平瓦と類似するものとしては、宮城県古川市名生館遺跡・伏見廃寺跡や福島県郡山市麓山窯跡から出土している「山田寺系」^(註9)の単弁八葉蓮華文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦の組合せがある。これらの3遺跡の軒丸瓦と本窯跡A群の軒丸瓦は、瓦当面の直径や中房の蓮子の数が相違するが、周縁と内区との間に凸圈線が巡ることや花弁が平坦で棒状の子葉をもつ特徴に類似性が認められる。ロクロ挽き重弧文軒平瓦については、粘土板桶巻き作りで、名生館遺跡・伏見廃寺跡が三重弧文軒平瓦^(註10)（段頸）、本窯跡A群が重弧文軒平瓦（段頸、無段頸）、麓山窯跡が重弧文軒平瓦（段頸）である。平瓦部凸面は名生館遺跡・伏見廃寺跡がロクロナデ、花文状叩き目であり、本窯跡が正格子叩き目と平行叩き目、麓山窯跡が斜格子叩き目である。

以上のように、本群の軒丸瓦と軒平瓦のセットは、細部において若干の違いはあるものの、全体的な特徴が名生館遺跡・伏見廃寺跡や麓山窯跡と類似する単弁八葉蓮華文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦が組み合う点で強い類似性が認められる。名生館遺跡や麓山窯跡出土の軒丸瓦と軒平瓦は7世紀末葉から8世紀初頭の年代と考えられていることから、本窯跡出土の軒丸瓦や軒平瓦も同じ時期と考えても大過ないであろう。

次にA群の平瓦と丸瓦については、粘土板桶巻き作りの平瓦と粘土板巻き作りの無段丸瓦で



名生館遺跡
(註9より転載)

大蓮寺窯跡 (A群瓦)

麓山窯跡
(註11より転載)

第51図 単弁蓮華文軒丸瓦 (縮尺1/5)

あり、5号窯跡の灰原で軒丸瓦・軒平瓦と共に伴していることから、この平瓦と丸瓦の年代も軒丸瓦・軒平瓦と同時期と考えられる。また平瓦I類と丸瓦I類、平瓦II類と丸瓦II類の凸面の叩き目は前者が格子叩き目で、後者が平行叩き目であり、この同じ叩き目がロクロ挽き重弧文軒平瓦のIa類とIb類にみられることからも同様のことが理解される。

B群の繩叩き目後スリ消しの平瓦III類と丸瓦III類は、粘土板桶巻き作りの平瓦と粘土板巻き作りの無段丸瓦であり、年代を知り得る共伴資料がないため詳細は不明である。多賀城跡では、粘土板桶巻き作りの平瓦は創建期かそれ以前とみられており、II期以降からは一貫して一枚作りになると言われている。また、丸瓦については多賀城創建瓦を焼成した日の出山瓦窯跡や木戸瓦窯跡などから出土のものは粘土紐巻き有段丸瓦（多賀城編年の丸瓦II B類）である。^(註14)本窯跡B群の丸瓦III類は多賀城創建瓦の丸瓦II B類とは異なるものであり、仙台市郡山遺跡から出土する繩叩き目後スリ消しの粘土板巻き作り無段丸瓦に近い特徴である。^(註15)したがって、B群の下限については、多賀城創建期のころと考えられる。

B群の上限については、2号窯跡の前庭部の排水施設に使用された丸瓦はIIa類とIII類が交互に並べられていること、焼成部床面の施設瓦の中にロクロ挽き重弧文軒平瓦が使用されていること、さらに前庭部床面の平瓦IIa類の平行叩き目がロクロ挽き重弧文軒平瓦Ib類の叩き目と同じものであることから、ロクロ挽き重弧文軒平瓦と同じ時期かそれに後続する時期と考えられる

以上のことより、B群の平瓦と丸瓦の年代は、おおむね7世紀末葉から8世紀前葉のころと考えられる。

2. 須 恵 器

須恵器は総数526点が出土しており、5号窯跡や5号窯跡の灰原である1号灰原・1号溝跡などより出土している。器形には蓋・壺・高台付壺・高壺・甕・壺・鉢などがあり、その大部分は甕の破片である。そのうち、灰原と5号窯跡焼成部出土の須恵器とはそれぞれ異なった特徴がみられることから、ここではA・B群土器に分けてその特徴について述べてみたい。

A群土器（第52図）

5号窯跡補修壁、1号灰原、1号溝跡などから出土しており、蓋・壺・高台付壺・高壺などがある。1号土坑確認面からも同様な特徴の壺・蓋が出土している。灰原出土の遺物については灰原という性格上、時間幅のあるものも含んでいるものと考えられるが、一応ここではA群土器として扱った。

蓋

I類 天井部は丸味をおびてそのまま口縁部にいたり、内面にかえりのある蓋である。つまりは欠損しているため不明であるが、天井部は回転ヘラケズリされている。かえりは比較的明瞭にあるもの(1・4)とかえりが退化してわずかにあるもの(2・3)とがある。

II類 天井部は低くて水平に近い大形の蓋で、内面にかえりのないもの(5)である。口縁部は短く丸みをもってそのまま端部にいたる。つまりは不明で、天井部は手持ちヘラケズリ調整が行なわれている。

壺

I類 体部外面に段があるので、口径の大きさで2つに細分される。a類：口径の大きいもの(6・7)、b類：口径の小さいもの(9)である。

I a類は5号窯跡西側補修壁の中から出土しているもので、底部は丸底のものと考えられる。体部は丸味をもち、体部中央付近の外面にわずかに段が形成されるものである。I b類は1号土坑確認面出土の小形のもので、体部外面にわずかに段が形成され、体部がやや直立気味のものである。1号灰原、1号溝跡からも同様の段のある小破片が出土している。

II類 体部外面に沈線がある大形のもの(8)で、平底のものと考えられる。体部は直線上に外傾し、体部外面の上下2段に4本の沈線があるものである。体部下端は回転ヘラケズリ調整され、体部と底部の境は不明瞭である。

III類 小形のもの(10)で、底部は平底で体部下端に回転ヘラケズリ調整されるものである。

高台付壺

I類 体部は直線上に外傾し、口縁部がわずかに外反するもの(11・12)で、短い高台が付いている。体部と底部の境は明瞭である。

高壺

I類 体部中央の外面に明瞭な段、内面に屈曲がある大形のもの(13)で、口縁部は外傾し、口縁端部は水平となる。底部と体部との境は不明瞭で、体部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整が行なわれている。脚部は底部中央部に付けられているが欠損している。

鉢

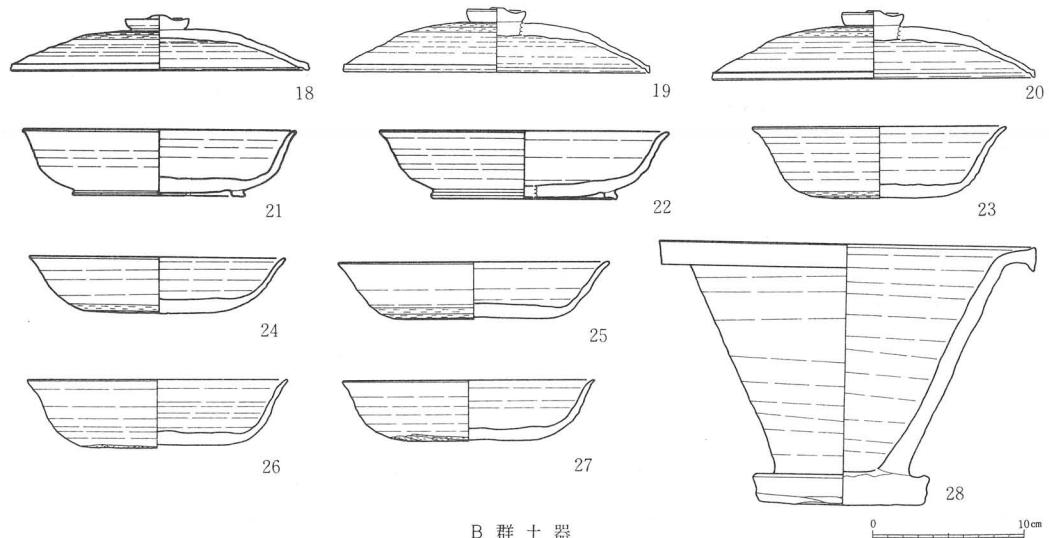
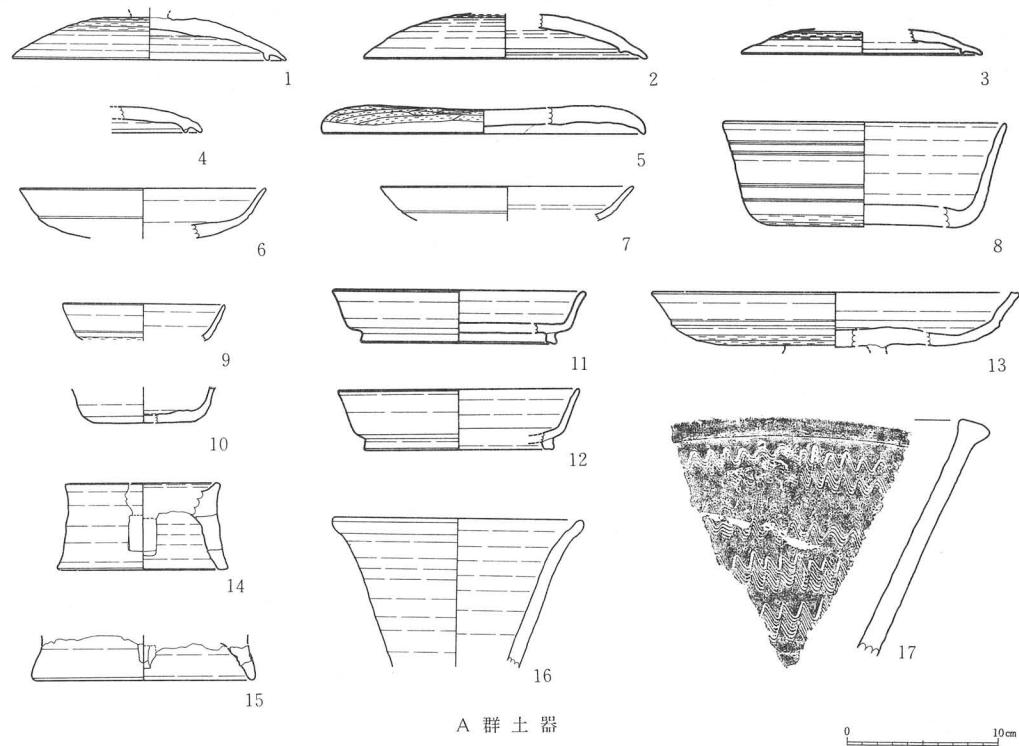
I類 体部が直線上に外傾し、口縁部はやや外反するもの(14)で、口縁端部は丸く仕上げられている。

II類 体部が直線上に外傾してそのまま口縁部にいたり、口縁部は上から押しつぶされて内外面が厚くなり、口縁端部は外傾する。体部外面には4条の波状沈線文が施されている(17)。

円面硯

硯部から脚部のもの(14)と脚部のもの(15)がある。共に破片であり、脚部に方形の透かしがある

もので、脚部は外方へ開きそのまま端部にいたり、丸く仕上げられている。



第52図 A・B群土器集成図 (縮尺1/5)

B群土器（第52図）

5号窯跡焼成部の床面上および床面に近い層より一括出土したもので、蓋・壺・すり鉢などがある。

蓋

I類 内面のかえりはなく、天井部が丸味をもってそのまま口縁部にいたる大形の蓋で、口径18.5~22.2cmを測る。つまみは扁平な宝珠形のもので、つまみ周辺の天井部は約1/3ほど回転ヘラケズリされるものがある。口縁部の形状はやや外方へ短く折り曲げられるもの(18)と下方に短く折り曲げられるもの(19・20)とがあり、口縁部の外面はつまみ出されて凸線や稜となり、内面は沈線状に凹んでいるものもある。

壺

I類 壺の底部は丸底に近い平底のもので、体部はやや丸味をもって立ち上がり口縁部が外反し、口縁端部は鋭く仕上げられている。底部の切り離しは回転ヘラ切りされ、底部と体部の境が不明瞭なものである。すべて再調整が加えられ、再調整の種類によってさらに3類に細分される。a類：体部下端から底部全面にわたり回転ヘラケズリ調整されるもの(23)、b類：底部の切り離しは回転ヘラ切りされ、体部下端から底部周縁部にかけて回転ヘラケズリされるもの(24・25)、c類：体部下端から底部全面にわたり手持ちヘラケズリされるもの(26・27)であり、Ia類が2点、Ib類が5点、Ic類が2点出土している。口径は16.0~18.0cm、底径8.2~9.8cm、器高3.8~4.8cmを測る。胎土は砂粒を多く混入しており、焼成はあまり良くないので、色調は赤褐色ないし茶褐色を呈する。

高台付壺

I類 底部は丸底で、体部は丸味をもって立ち上がり口縁部が外反する。高台は短く付けられ、高台と底部がほぼ同じ位置にあるものもある。2点が出土しており、底部が回転ヘラケズリ調整のもの(21)と底部の切り離しが回転ヘラ切りのもの(22)がある。

すり鉢

I類 底部は厚い円板状のもので、体部は直線上に外傾して口縁部が大きく外反し、その端部は上下にややつまみ出して口縁帶となしている(28)。完形品1点と底部片1点があり、底部の側面から底面にかけては手持ちヘラケズリ調整が行なわれている。

このように、A群土器とB群土器に分類された。そこでA群・B群土器の年代について考えてみたい。

A群土器の特徴としては、内面にかえりのある蓋I類と内面にかえりのない蓋II類、さらに体部外面に段や沈線のある壺I類やII類、高壺I類、高台付壺I類などにその特徴が見い出さ

れる。

陶邑古窯跡群では、内面にかえりのある蓋はIII期からみられ、かえりのあるものとないものが共存するのはTK48型式、かえりが消滅するのはMT21型式であり、TK48型式は7世紀後葉の時期、MT21型式は奈良時代の初期のものとされている。^(註16)

A群土器の蓋I類・II類に類似するものとしては、仙台市郡山遺跡のS I 390住居跡や福島市小倉寺高畠窯跡出土のものがある。郡山遺跡S I 390住居跡はII期官衙の第4段階で、7世紀末葉から8世紀初頭に位置づけられている。高畠窯跡2・3号窯跡では、やや丸底風の坏と平底の坏、蓋の内面にかえりがあるものとないものとが共伴して出土しており、8世紀初頭と考えられている。A群土器の蓋のかえりは退化形態のもので、かえりがあるものとないものが出土しており、ほぼ7世紀末葉から8世紀初頭と考えられる。

体部に段がある坏Ia類は土師器を模倣したかのような器形であり、坏Ib類は段のある小形の坏である。このような体部に段をもつ坏などは郡山遺跡のS I 143住居跡や蔵王町塩沢北遺跡1号住居跡、麓山窯跡B窯跡などに類例が求められ、7世紀末葉から8世紀初頭と考えられている。^(註17)^(註18)^(註19)^(註20)^(註21)

これらのことから、A群土器の年代については7世紀末葉から8世紀初頭の年代幅の中に位置づけられるものと考えられる。この年代観は单弁八葉蓮華文軒丸瓦やロクロ挽き重弧文軒平瓦のA群瓦の年代とおおむね一致する。

B群土器の坏I類は丸底に近い平底のもので、体部はやや丸味をもちながら外傾し、口縁部が外反するものである。底部の切り離しは回転ヘラ切りされ、すべて再調整が加えられている。再調整には回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリがあり、体部下端から底部全面のものと体部下端から底部周縁にかけて行なわれているものとがある。高台付坏は底部が丸底で、体部が丸味をもって外傾し、口縁部が外反するもので、坏I類と同様の器形である。高台は短く付けられている。蓋は扁平な宝珠形のつまみで、まだ宝珠形の面影を残している。内面のかえりはなく天井部が高い大形のもので、口縁部は短く下方あるいはやや外方に折り曲げられている。

以上がB群土器の特徴であるが、このような土器群に類似するものとしては、高畠窯跡、福島県相馬市善光寺窯跡群9号窯跡、涌谷町長根窯跡群、色麻町日の出山窯跡群、大和町鳥屋窯跡群などがある。

8世紀初頭と考えられている高畠窯跡では、蓋の内面にかえりのあるものとないもの、坏はやや丸底風のものと平底のものとが共存して出土している。B群の坏I類は丸底に近い平底のものであり、高畠窯跡の丸底風の坏に類似しているが、蓋の内面にかえりがないことより高畠窯跡に後続するものと考えられる。また、ほぼ同じころに位置づけられている長根窯跡群A地点1号窯跡では、丸底の坏と大形の蓋、高台付坏などが出土しており、蓋の形状やつまみ、口

縁端部の形状などはA群土器蓋 I類に類似するものと考えられる。

8世紀前葉と考えられている鳥屋三角田南窯跡や善光寺窯跡群9号窯跡出土の壺は、ほとんど平底のもので、底部と体部の境が明瞭で体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリの再調整が加えられている。善光寺窯跡群9号窯跡では、底部の切り離しは回転ヘラ切りと静止糸切りがあり、体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリの再調整が加えられている。また、ほぼ同じ頃の日の出山窯跡群では、丸底の壺も出土しているが、主体は静止糸切りの平底の壺で、手持ちヘラケズリの再調整が加えられている。^(註24)

B群土器壺 I類については、善光寺窯跡群9号窯跡第1次床面出土の壺に類似性がみられるが、静止糸切りの壺は1点も出土しておらず、器形的にも丸底に近い壺であることから善光寺窯跡群9号窯跡の壺よりも先行するものとみられる。

これらのことから、B群土器の年代については、長根窯跡群A地点1号窯跡と善光寺窯跡群9号窯跡の中間に位置づけられるものであり、8世紀初頭から8世紀前葉の時期と考えられる。

その他に、A・B群土器に含まれない壺2点と甕1点が2号窯跡崩壊土最上層から出土している。壺はいずれも底部の切り離しが回転ヘラ切り無調整のものである。

VI. 遺構について

調査によって発見された遺構には、窯跡5基、灰原1カ所、溝跡6条、土坑2基、通路状遺構、ピットなどが検出されているが、ここでは窯跡を中心に考えてみたい。

1. 窯跡の構造と操業期間

調査区A・B区より5基の窯跡が検出され、地山をトンネル状に割り抜いた地下式窯窯と窯の形に掘り窪めて構築した半地下式窯窯の二種に大別される。地下式窯窯は3基（2・4・5号窯跡）があり、半地下式窯窯は2基（1・3号窯跡）がある。これらの窯跡は、窯の構築場所が傾斜面の上下2カ所の位置に分布し、上の斜面の窯跡は、4・5号で標高約30～31.5m以上に構築されている。下の斜面の窯跡は1・2・3号で標高26～30mに構築されている。

地下式窯窯には焼成部の床面が無段の地下式無段窯窯と床面が階段状となる有段の地下式有段窯窯があり、前者が5号窯跡、後者が2・4号窯跡である。

地下式無段窯窯 5号窯跡は窯体の下半部が検出され、焼成部の一部や煙道部と窯体上部は削平のため壊されている。窯の規模は残存長約7m、焼成部中央幅約2.2m、燃焼部幅約1m、前庭部幅約3.7mを測る。

焼成部床面は無段で、その傾斜角度は18°と2号窯跡の焼成部床面の角度に比べ緩やかであ

る。両壁下に幅5～10cmの排水溝が検出され、焼成部と燃焼部の境で曲がっている。その焼成部と燃焼部の境付近の西壁はスサ入り粘土で補修されており、東壁も同様であったと考えられるが崩壊しているため不明である。燃焼部の平面形は長方形形状を呈し、床面の傾斜角度は6°とほぼ平坦となる。前庭部は方形を呈し、床面は2号窯跡のように平坦ではないがほぼ類似する形状である。

1号灰原と1号溝跡は、単弁八葉蓮華文軒丸瓦やクロ挽き重弧文軒平瓦をはじめとするA群の瓦と少量のA群の須恵器や円面鏡の出土状況やその傾向性などにより、5号窯跡の灰原とみて間違いないものと考えられる。

地下式有段窯 2・4号窯跡があり、ともに焼成部が階段状の床面である。比較的遺存状況が良好な2号窯跡は、残存長7.5m、焼成部最大幅1.4m、前庭部幅3.3mを測る。

焼成部床面は奥行20～30cm、高さ20～30cmの階段状で11段が検出されている。4号窯跡のものは6段あるが2号窯跡のような整然としたものではなく、やや不規則な床面で奥行10～30cm、高さ5～10cmであり、高さが低い点やや異なっている。焼成部床面の階段上には、その平坦面に合わせて丸瓦や平瓦を分割し、数段に重ねて平坦面を作つて焼台としている。また、焼成部幅は1.1mと1.4mで無段のものより狭く、床面の傾斜は2号窯跡が約33°と急であり、4号窯跡は5号窯跡と同じ18°とやや緩やかである。このように2号窯跡と4号窯跡では、床面の階段や傾斜角度などやや様相を異にしている。

燃焼部の平面形は長方形形状を呈し、床面の傾斜角度は6°とほぼ水平となる。2号窯跡の前庭部は、床面が燃焼部から連続して平面形が方形のものであるのに対し、4号窯跡の前庭部は燃焼部をそのまま延長した部分とその両側に一段高い床面からなる方形のものと考えられ、2号窯跡の前庭部とは相違する部分もある。

半地下式無段窯 1・3号窯跡があるが1号窯跡は大部分壊されて焼成部の一部が検出されたに過ぎず、3号窯跡が比較的遺存状況が良い。3号は残存長4.5m、幅1.2mで焼成部から奥壁にかけて検出され、燃焼部、煙道部はすでに壊されている。あまり焼けた状態ではなく、軟らかな床面で、その傾斜角度は26～30°である。この2基の窯跡は焼成部床面に段などの施設されていない無段窯である。

以上のように地下式無段・有段窯、半地下式無段窯の3つのタイプの構造の窯跡が検出された。次に、各々の窯跡の操業の期間について考えてみたい。

1号・3号窯跡は遺物がほとんど出土していないため、窯跡の年代については不明である。台ノ原・小田原古窯跡群では、陸奥国分寺創建期以降の瓦窯跡が多く発見され、半地下式無段窯が主流を占めているようである。さらに内藤政恒氏の「歴史考古13」の報文では大蓮寺窯跡（報文では小田原案内の瓦窯址）から採集された歯車文軒丸瓦（？）と大蓮寺所蔵の重弁蓮華

(註27)

文軒丸瓦が紹介されており、それぞれ奈良時代後半と平安時代の瓦と考えられる。1・3号窯跡はそれらの遺物を焼成した可能性も考えられる。

2号窯跡は、前庭部床面と焼成部床面から前庭部第14層上面にかけて一面に検出される面があり、前庭部には床面が2枚あったことが考えられた。前庭部床面では、A群の瓦である平瓦II a類のほぼ完形のものが出土し、さらに、焼成部から前庭部14層上面では、B群の瓦である平瓦III a・b類、丸瓦III類が出土している。A群の瓦は7世紀末葉から8世紀初頭、B群の瓦はおおむね7世紀末葉から8世紀前葉と考えられる。この窯跡は瓦を専用に焼成した窯跡で、操業期間は7世紀末葉から8世紀前葉である。

4号窯跡はB群の平瓦III a・III c類、丸瓦III類・IV類が主体的に出土し、2号窯跡の第2次操業の時期とほぼ同じと考えられ、平瓦と丸瓦を専用に焼成した瓦専用の窯跡と考えられる。

5号窯跡は、灰原出土の单弁八葉蓮華文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦のA群の瓦より7世紀末葉から8世紀初頭、さらに最終段階に焼成した須恵器のB群土器より8世紀初頭から8世紀前葉の年代と考えられる。この窯跡は瓦・須恵器を焼成した窯跡で、操業期間は7世紀末葉から8世紀前葉である。

3基の地下式窯は、おおむね7世紀末葉から8世紀前葉の中に位置づけられたが、この3基の窯跡が同時に操業していたかどうかについては不明である。仮に時間差があったとしてもそれほど差があるものとは考えられず、比較的短い時間差の中の変遷と考えられる。また2号・4号窯跡ではB群の瓦の平瓦III類が出土し、細部では多少相違している点もあるが、窯単位の焼成する瓦の相違としてみておきたい。

今回の調査は限られた範囲の中で前述した窯跡が検出された。大蓮寺窯跡では1975年の調査において^(註28)5世紀代の須恵器窯跡と工房跡と考えられるテラス状遺構が検出されている。この地点は、第2・3次調査区より北東に約50m離れた場所で、テラス状遺構からA群の瓦と同類のロクロ挽き重弧文軒平瓦や平瓦が出土している。この瓦は今回調査した5号窯跡と同じ製品か、あるいは同一の瓦工人集団で焼成されたものと考えられる。このような状況から、今回の調査区以外、特に東側に同様の窯跡が存在する可能性が考えられる。

さて、8世紀前後の窯跡としては、宮城県内では多賀城創建瓦を焼成した日の出山窯跡群や木戸瓦窯跡などの瓦窯跡、須恵器を焼成した長根窯跡群、鳥屋窯跡群などの須恵器窯跡があり、また福島県内でも高畠窯跡、善光寺窯跡群、麓山窯跡などがある。麓山窯跡を除きほとんど地下式無段窯であり、この時期の一般的な形態として捉えることができる。

2号窯跡に類似するような地下式有段窯の窯跡としては、宮城・福島県内では知られておらず、8世紀前葉とみられる京都府丹波周山窯址1号窯跡や7世紀第4四半期～8世紀第2四半期と考えられている東京都多摩ニュータウン遺跡No.513遺跡1・3号窯跡などが比較的類似す

るものである。No.513遺跡は地下式有階有段窯で、有階と無階の違いはあるが2号窯跡の前庭部の形状はNo.513遺跡1・3号窯跡に類似している。

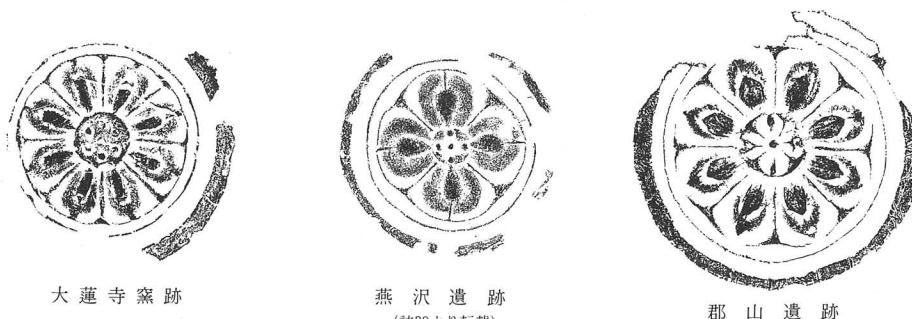
2. 瓦の供給

大蓮寺窯跡出土の単弁八葉蓮華文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦、格子・平行叩き目の丸瓦と平瓦の一群は7世紀末葉から8世紀初頭と考えられた。ここでは、これらの瓦の供給先について考えてみたい。

本窯跡出土の単弁八葉蓮華文軒丸瓦は、これまでのところ内藤政恒氏が報告した例以外は出土しておらず、供給された遺跡については不明である。しかし、このような瓦は官衙や寺院などに供給されたものであり、この時期の官衙や寺院跡は仙台市郡山遺跡と以前から官衙あるいは寺院ではないかと考えられている燕沢遺跡が知られている。^(註37)

本窯跡の南約7kmのところには、多賀城創建以前の官衙跡と寺院跡が発見されている郡山遺跡が位置しており、7世紀末葉から8世紀初頭にかけてのII期官衙跡と寺院跡から単弁八葉蓮華文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦、丸瓦、平瓦が出土している。^(註38)しかし郡山遺跡の軒丸瓦と本窯跡出土の軒丸瓦を比較してみれば、郡山のものは花弁がやや尖り気味で中房の蓮子など相違しており、平瓦や丸瓦の叩き目も違っているなど本窯跡出土のA群の瓦とは異なった特徴を示している。

次に燕沢遺跡出土の遺物と比較してみると、周縁と内区の間に圈線が巡る単弁四葉蓮華文軒丸瓦が表採されており、すでに指摘されているように7世紀末葉から8世紀初頭と考えられて^(註39)いる。この軒丸瓦の凸面部には平行叩き目が施され、凹面には糸切り痕、布綴じ痕、凸型台圧痕が観察される粘土板巻き作りの無段丸瓦である。丸瓦凸面部の叩き目は、本群の丸瓦II a類の平行叩き目Aと同類の叩き目であり、また凸型台圧痕もみられることから丸瓦II a類と共通していると考えられる。このような丸瓦は、燕沢遺跡第1次～第4次調査で一定量が出土している。また第1次～第3次調査では、ロクロ挽き重弧文軒平瓦のほか、本群の瓦と製作技法が



第53図 仙台市内出土の単弁蓮華文軒丸瓦

対応する凸面に格子・平行叩き目のある平瓦が一定量出土している。すでに燕沢の報文でも指摘されているように本窯跡の製品とみられ、かつ比較した結果も同様のことが言える。^(註40)

以上のことから、本窯跡より出土した単弁八葉蓮華文軒丸瓦やロクロ挽き重弧文軒平瓦の一群は、これまでのところ燕沢遺跡に供給された可能性が最も高いものと考えられる。燕沢遺跡ではこの時期の遺構についてはほとんど不明であるが、以前より寺院や官衙の存在が考えられてきた遺跡であり、7世紀末葉から8世紀初頭の遺構や遺物の発見については、今後の調査に期待するところが大きい。

さらに調査で出土した単弁八葉蓮華文軒丸瓦は、名生館遺跡・伏見廃寺跡や麓山窯跡出土の軒丸瓦と同じ技法をもつ同一系統の工人グループのものと考えられ、郡山遺跡や多賀城跡の国府系の軒丸瓦とは別の系統と考えられる。このような異なる軒丸瓦がほぼ同じ頃に仙台市内に発見されたことは、仙台平野における多賀城創建以前の官衙・寺院跡を考える上で貴重な発見であった。

VII. ま と め

大蓮寺窯跡第2・3次調査によって得られた調査成果は次のとおりである。

1. 大蓮寺窯跡は台ノ原・小田原古窯跡群の東端にある窯跡群であり、これまでの調査で5世紀代の須恵器窯跡1基、7世紀末葉～8世紀前葉の瓦窯跡3基と工房跡1基、奈良・平安時代(?)の瓦窯跡2基が発見された遺跡であることが明らかとなった。
2. 今回の調査で発見された遺構は、7世紀末葉～8世紀前葉の地下式無段窯1基、同時期の地下式有段窯2基、奈良・平安時代(?)の半地下式窯2基、時期不明の土坑2基(?)、通路状遺構やピットなどである。
3. 今回の調査で、窯跡などから単弁八葉蓮華文軒丸瓦、ロクロ挽き重弧文軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦(熨斗瓦、隅切り瓦)、埠などの多量の瓦埠類と須恵器が出土している。
4. 単弁八葉蓮華文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦のセットは、5号窯跡及びその灰原と考えられる1号灰原と1号溝跡より出土しており、名生館遺跡・伏見廃寺跡や麓山窯跡出土の軒丸瓦と同じ系統のもので、7世紀末葉～8世紀初頭の年代に位置づけられた。
5. 単弁八葉蓮華文軒丸瓦やロクロ挽き重弧文軒平瓦、同時期の丸瓦・平瓦は、本遺跡の北東約1.5km離れた燕沢遺跡に供給された可能性が高いことが指摘された。

最後に、A群の瓦以外の遺物については十分検討できなかった。さらに軒平瓦の顎部が有段と無段があり、軒平瓦の凸面の格子叩き目と平行叩き目、平瓦・丸瓦の凸面の格子叩き目と平

行叩き目などに違いがみられ、それが同じ時期の種類の違いか、あるいは時間差と考えられるかについての検討は、今後の問題としておきたい。

註

- (1) 渡辺泰伸・結城慎一 1976：「仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告」『陸奥国官窯跡群』
- (2) 内藤政恒 1939：「宮城県利府村春日瓦窯焼場大沢瓦窯址研究調査報告」東北帝国大学法学部奥羽史料調査部研究報告第1
内藤政恒 1963：「仙台市台ノ原・小田原瓦窯址群と出土の古瓦(一)」『歴史考古』9・10合併号
内藤政恒 1964：「仙台市台ノ原・小田原瓦窯址群と出土の古瓦(二)」『歴史考古』11号
内藤政恒 1964：「仙台市台ノ原・小田原瓦窯址群と出土の古瓦(III)」『歴史考古』12号
内藤政恒 1965：「仙台市台ノ原・小田原瓦窯址群と出土の古瓦(IV)」『歴史考古』13号
- (3) 伊東信雄 1950：「燕沢古瓦出土地」『仙台市史3』
- (4) 渡部弘美 1982：「燕沢遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第39集
渡部弘美・佐藤 裕 1984：「燕沢遺跡」仙台市文化財調査報告書第62集
結城慎一・中富 洋他 1988：「燕沢遺跡」仙台市文化財調査報告書第116集
田中則和・工藤信一郎 1992：「燕沢遺跡第4・5・6次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第154集
- (5) 伊東信雄・氏家和典 1968：「仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書」仙台市文化財調査報告書第3集
- (6) 佐原 真 1972：「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号では、「粘土板合せ目面」の重ね方には、二種類あり、これを桶の上からみた形状によって、S・Zと区別しているので、ここでもこれに従った。
- (7) 『第17回古代城柵官衙遺跡検討会』の資料では、「凸型台圧痕（木目状）」としているが、宮城県多賀城跡調査研究所の進藤秋輝・高野芳宏の両氏の御教示により、木目状圧痕ではなく、何らかの凸型台圧痕であるとのことから、ここでは凸型台の圧痕と考えられるスジ状の圧痕とした。
- (8) (註6)と同じ。
- (9) 進藤秋輝 1978：「多賀城系古瓦の二系統」『研究紀要V』宮城県多賀城跡調査研究所
宮城県多賀城跡調査研究所 1981：「名生館遺跡I－玉造棚跡推定地－」多賀城関連遺跡発掘調査報告書第6冊
- (10) 佐々木茂楨 1971：「宮城県古川市伏見廃寺跡」『考古学雑誌』第56巻第3号
- (11) 梅宮 茂 1960：「郡山市麓山窯跡調査報告書」福島県文化財調査報告書第8集
高松俊雄 1984：「郡山市麓山瓦窯跡出土の瓦について」『福島考古』第25号記念号
- (12) 福島県立博物館 1988：「陸奥の古瓦——瓦が語る福島の古代史——」
辻 秀人 1992：「陸奥古瓦の系譜」『福島県立博物館研究紀要』第6号
1992年の研究紀要では、郡山市麓山窯跡、古川市伏見廃寺、古川市名生館遺跡、仙台市大蓮寺窯跡の「单弁八弁蓮華文軒丸瓦」は、広い意味で山田寺の流れにあるとしたうえで、広義の「山田寺式」の範疇にも入らず、直接に大和山田寺の系譜に位置づけるのは困難であるとしている。上記の4遺跡の軒丸瓦の棒状の子葉の形状などの特徴は、上野上植木廃寺、金井廃寺出土瓦、武藏大谷窯跡、勝呂廃寺出土瓦などに類似を見い

出し、関東の上野あるいは、武藏にその系譜を求めている。

- (13) 『名生館遺跡I』では、「四重弧文軒平瓦」と記載されているが、重弧文の弧文は凹線の数を数えることにし、三重弧文軒平瓦と呼称した。
- (14) 宮城県多賀城跡調査研究所 1980: 「多賀城跡 政府跡 図録編」
宮城県多賀城跡調査研究所 1982: 「多賀城跡 政府跡 本文編」
進藤秋輝 1976: 「東北地方の平瓦桶型作り技法について」『東北考古学の諸問題』
- (15) 木村浩二他 1987: 「郡山遺跡VII」仙台市文化財調査報告書第96集
- (16) 田辺昭三 1966: 「陶邑古窯址群I」平安学園考古学クラブ
田辺昭三 1981: 「須恵器大成」
- (17) 木村浩二他 1984: 「郡山遺跡IV」仙台市文化財調査報告書第64集
- (18) 工藤雅樹 1969: 「福島市小倉寺高畠遺跡発掘調査報告」『福島市文化財』福島市文化財報告書第7集
- (19) 木村浩二他 1982: 「郡山遺跡II」仙台市文化財調査報告書第38集
- (20) 小川淳一 1980: 「塩沢北遺跡」『東北自動車道関係遺跡調査報告書III』宮城県文化財調査報告書第69集
- (21) 木本元治 1975: 「郡山市麓山瓦窯跡出土の須恵器」『しのぶ考古5』
木本元治 1990: 「南東北地方における歴史時代の須恵器編年I」『伊東信雄先生追悼 考古学古代史論攷』
- (22) 註(17)と同じ
- (23) 佐々木茂楨・桑原滋郎 1971: 「長根窯跡」
岡田・佐々木・桑原 1972: 「長根窯跡群II」
桑原滋郎・辻 秀人 1976: 「長根窯跡群III」
- (24) 東北学院大学考古学研究部 1973: 「鳥屋窯跡群三角田南地区発掘調査報告書」『温故第9号』
- (25) 木本元治・大越道正 1989: 「善光寺遺跡(第二次)」『国道113号バイパス遺跡調査報告V』福島県文化財調査報告書第211集
- (26) 岡田・工藤・桑原・佐々木・進藤 1970: 「日の出山窯跡群」宮城県文化財調査報告書第22集
- (27) 註(2)と同じ
- (28) 註(1)と同じ
なお、仙台育英学園高等学校に収蔵している大蓮寺窯跡テラス状遺構出土の瓦については、渡辺泰伸氏の御好意により実見させていただいた。その結果、ロクロ挽き重弧文軒平瓦や平瓦については、胎土、焼成、叩き目が同じものであった。
- (29) 註(26)と同じ
伊東信雄 1981: 「宮城県史34(資料篇11)」
- (30) 註(23)と同じ
- (31) 註(24)と同じ
- (32) 註(18)と同じ
- (33) 註(25)と同じ
木本元治・福島雅儀他 1988: 「善光寺遺跡」『国道113号バイパス遺跡調査報告IV』福島県文化財調査報告書第192集
- (34) 註(11)と同じ

- (35) 京都大学文学部考古学研究室 1982：「丹波周山窯址」
- (36) 比田井克仁 1991：「一地方窯成立の史的契機」『研究論集X』東京都埋蔵文化センター
- (37) 註(2)と同じ
原田良雄 1974：「東北古瓦図録」
- (38) 註(15)、(19)と同じ
木村浩二他 1985：「郡山遺跡V」仙台市文化財調査報告書第74集
- (39) 渡部弘美 1987：「燕沢遺跡出土の軒丸瓦（資料紹介）」『年報8』仙台市文化財調査報告書第107集
- (40) 註(4)と同じ

参考文献

- 稻垣晋也 1971：「古代の瓦」『日本の美術No66』
- 大川 清 1973：「日本の古代瓦窯」
- 岡田茂弘・桑原滋郎 1974：「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要I』
- 木村浩二他 1981～92：「郡山遺跡 I～XII」
- 工藤雅樹・桑原滋郎他 1974：「大木戸窯跡群第1次調査報告」『国見町の文化財』国見町文化財調査報告書第3集
- 白鳥良一 1980：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』
- 白鳥良一 1992：「陸奥国における城柵・官衙の土器」『古代の土器研究－律令の土器様式の西・東』
- 中村 浩他 1976～78：「陶邑 I～III」『大阪府文化財調査報告書第28～30輯』
- 中村 浩 1981：「和泉陶邑窯の研究」
- 奈良国立文化財研究所 1978：「飛鳥・藤原宮発掘調査報告II」奈良国立文化財研究所学報第31冊
- 奈良国立文化財研究所 1976：「平城宮発掘調査報告VII」奈良国立文化財研究所学報第26冊
- 奈良国立文化財研究所 1991：「藤原宮と京 展示案内」
- 福島県教育委員会 1985：「関和久遺跡」福島県文化財調査報告第153集
- 宮城県教育委員会 1987：「硯沢・大沢窯跡ほか」宮城県文化財調査報告書第116集
- 森 郁夫 1992：「都城の土器集成」『古代の土器I』
- 渡辺泰伸 1990：「瓦生産の諸段階 古代東北地方における瓦生産導入期」『伊東信雄先生追悼 考古学古代史論攷』
- 渡辺泰伸 1991：「須恵器の編年－9 東北－」『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』

写 真 図 版

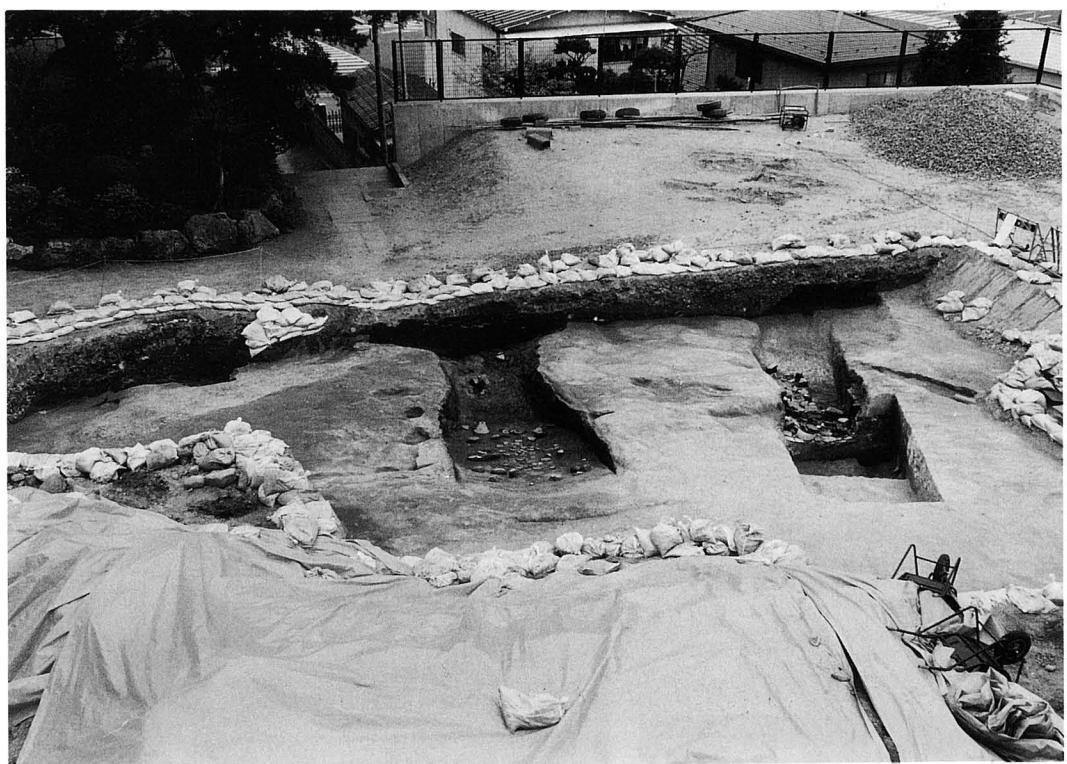


写真1 4・5号窯跡



写真2 1号窯跡

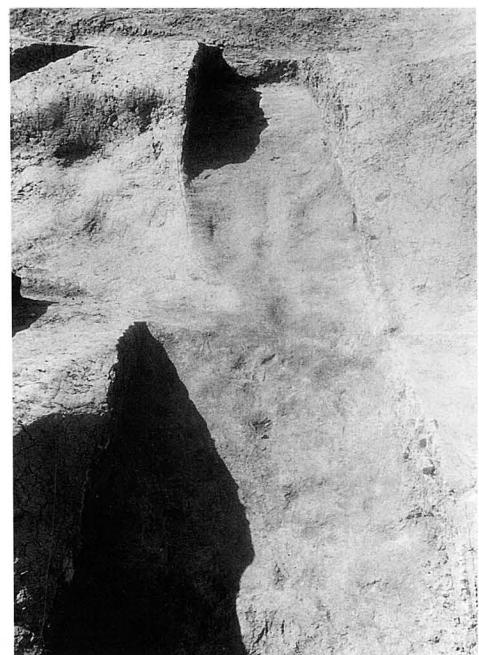


写真3 3号窯跡



写真4 2号窯跡



写真5 2号窯跡

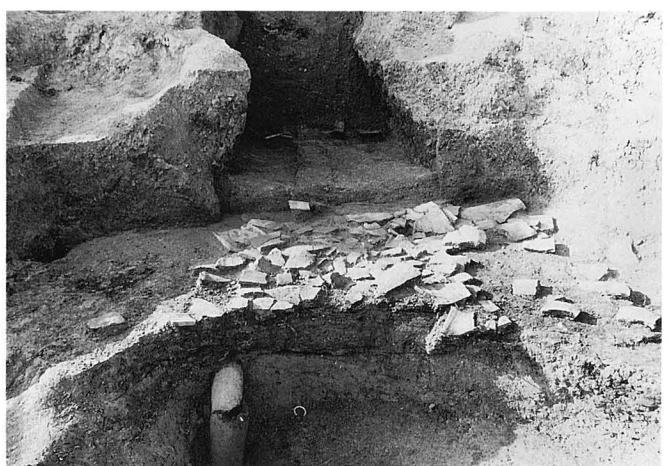


写真7 2号窯跡前庭部遺物出土状況



写真6 2号窯跡遺物出土状況

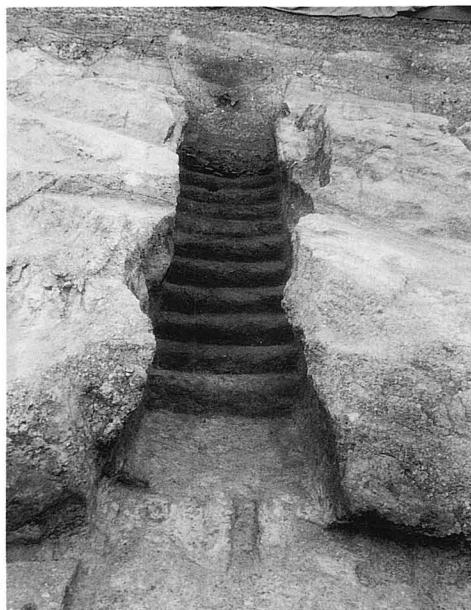


写真8 2号窯跡▶



写真9 5号窯跡遺物出土状況



写真10 5号窯跡



写真12 5号窯跡遺物出土状況



写真11 5号窯跡
軒丸瓦出土状況



写真13 5号窯跡すり鉢出土状況



写真14 4号窯跡



写真15 4号窯跡遺物出土状況



写真16 4号窯跡焼成部施設瓦

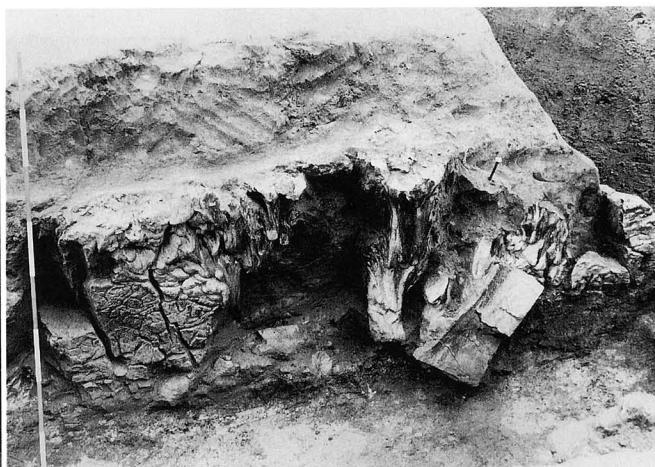


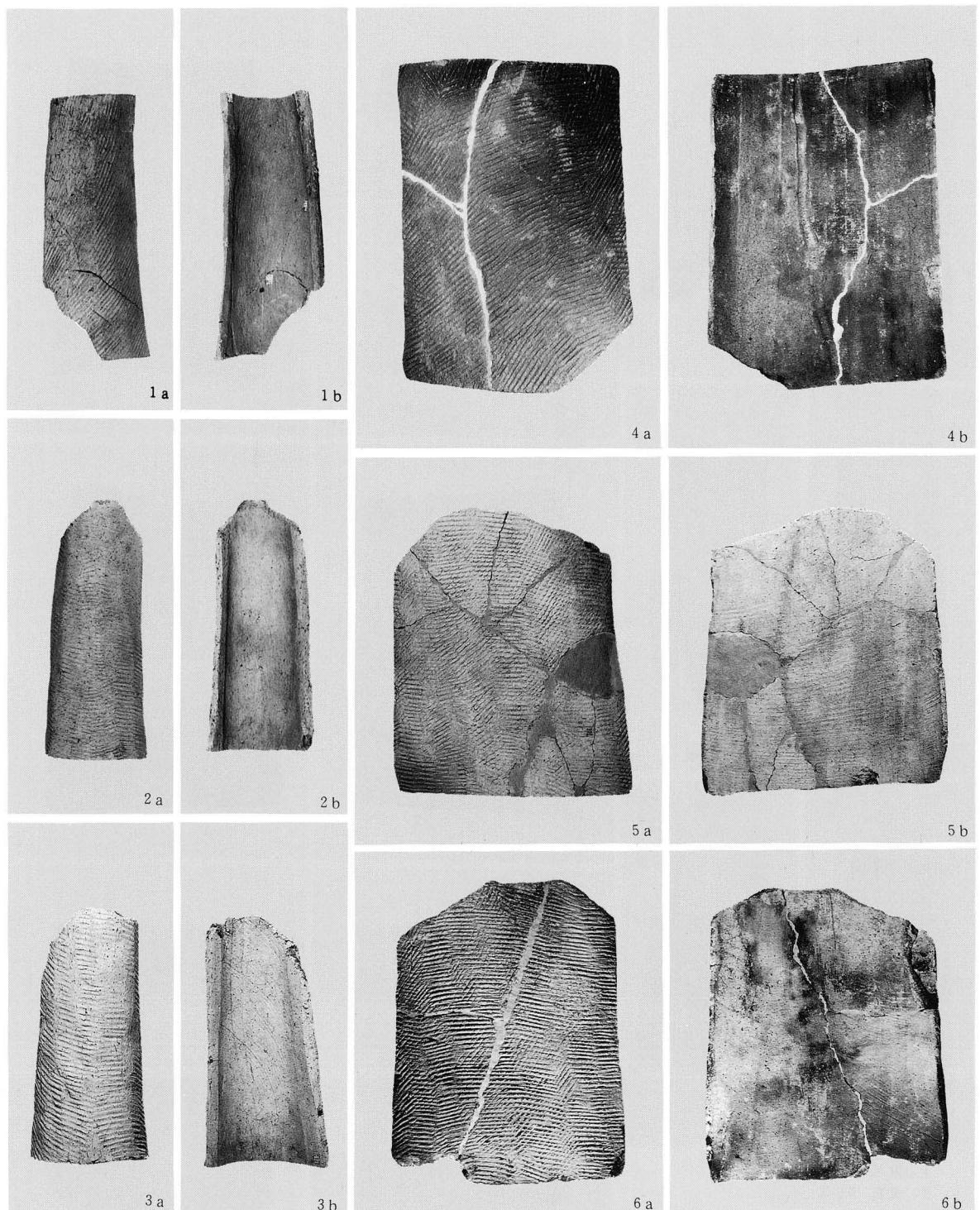
写真17 4号窯跡窯壁



写真18 1号灰原



写真19 1号溝跡



1. 丸瓦 Fb-1 2. 丸瓦 Fb-2 3. 丸瓦 Fb-3
4. 平瓦 Gb-1 5. 平瓦 Gb-2 6. 平瓦 Gb-4

写真20 2号窯跡出土遺物 (1)

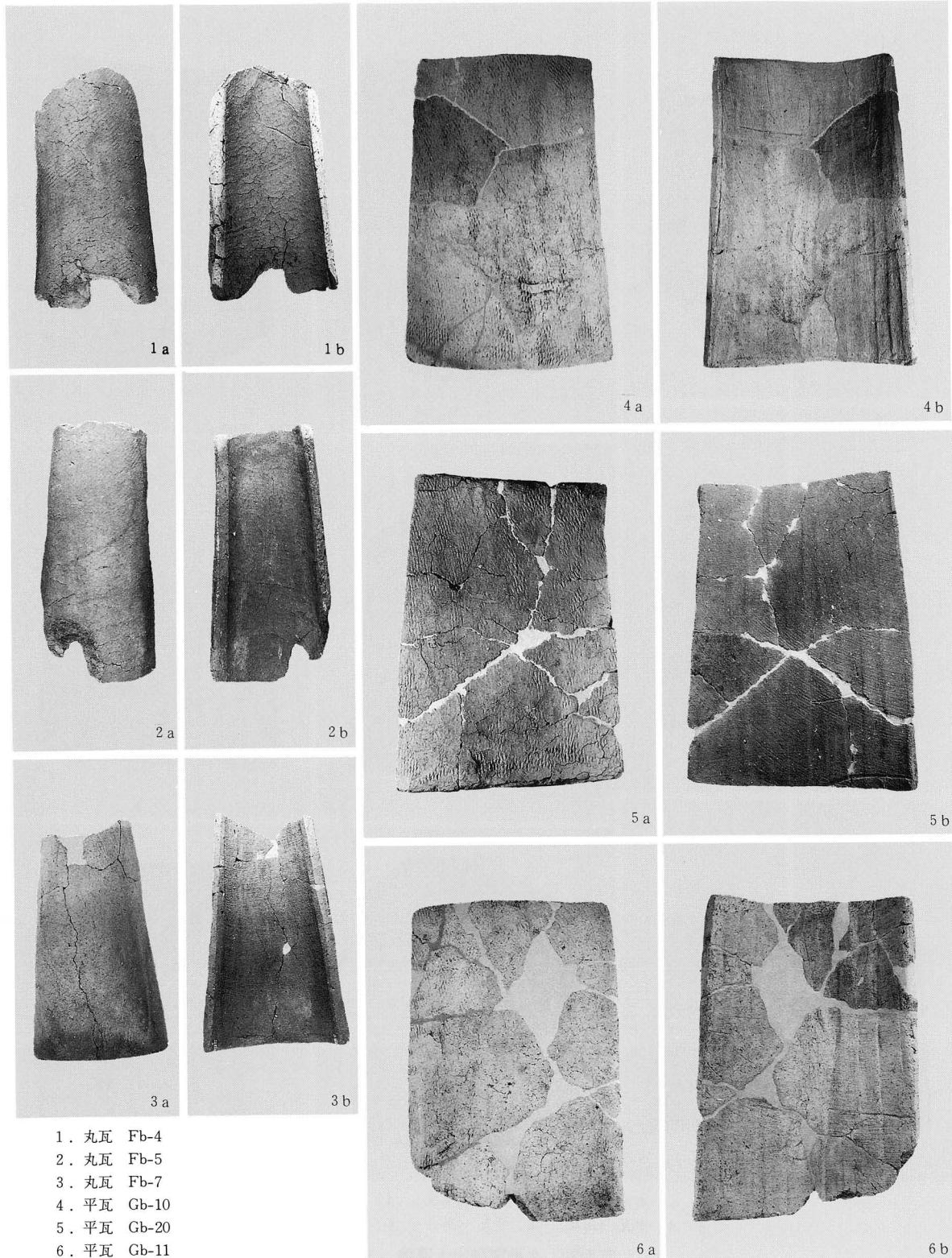


写真21 2号窯跡出土遺物（2）

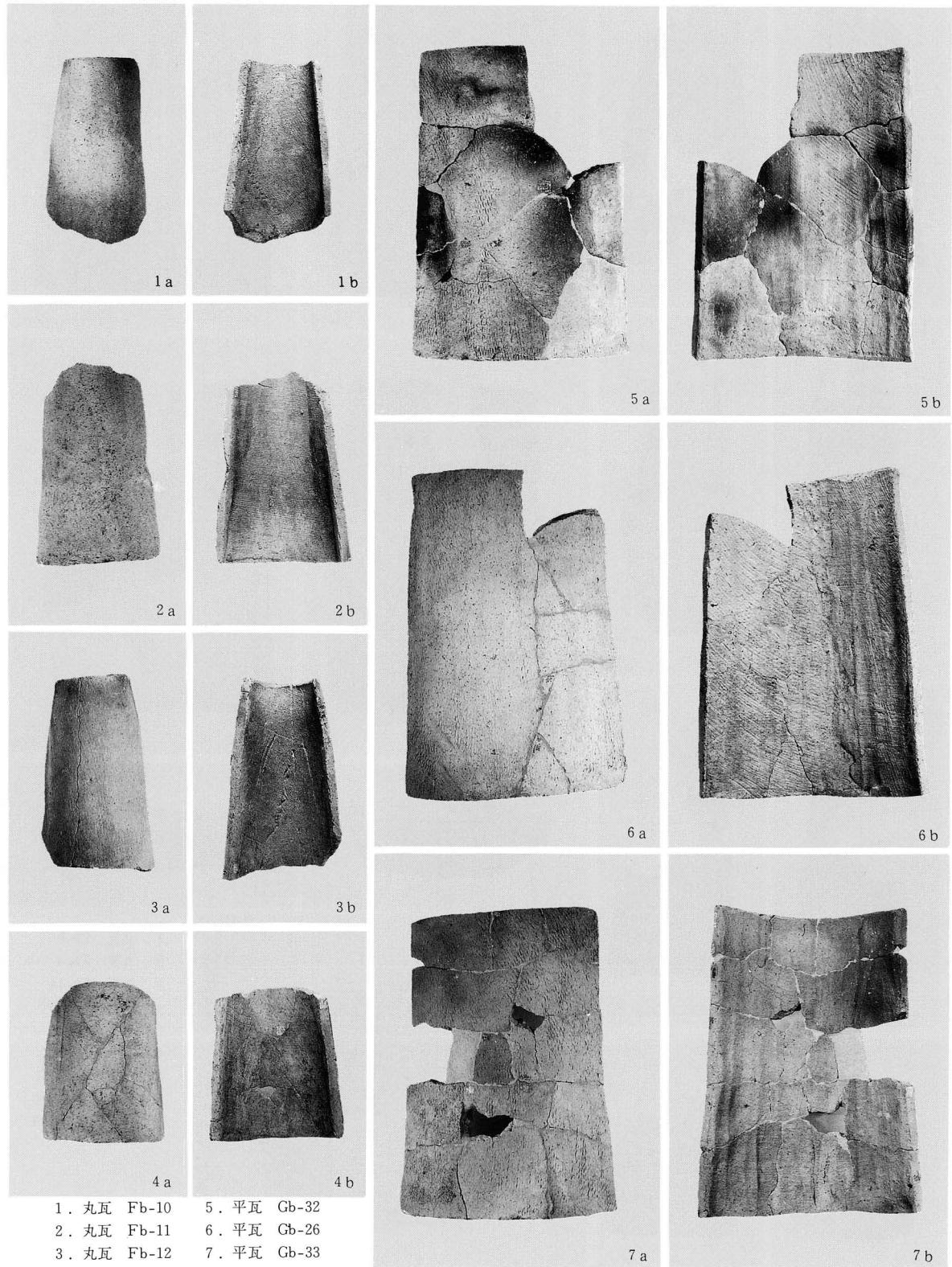


写真22 2号窯跡出土遺物（3）

- 1. 丸瓦 Fb-10
- 2. 丸瓦 Fb-11
- 3. 丸瓦 Fb-12
- 4. 丸瓦 Fb-13
- 5. 平瓦 Gb-32
- 6. 平瓦 Gb-26
- 7. 平瓦 Gb-33

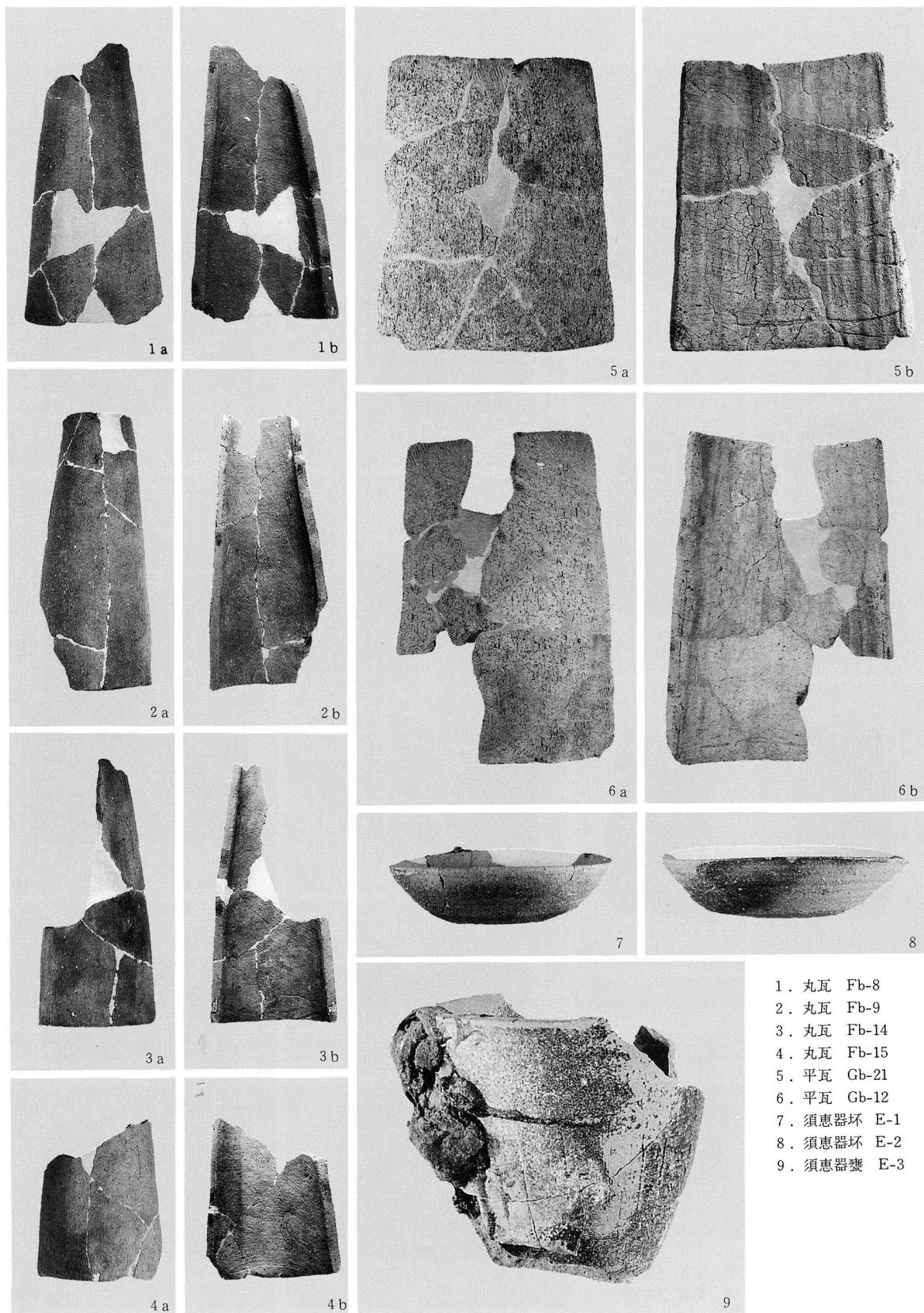


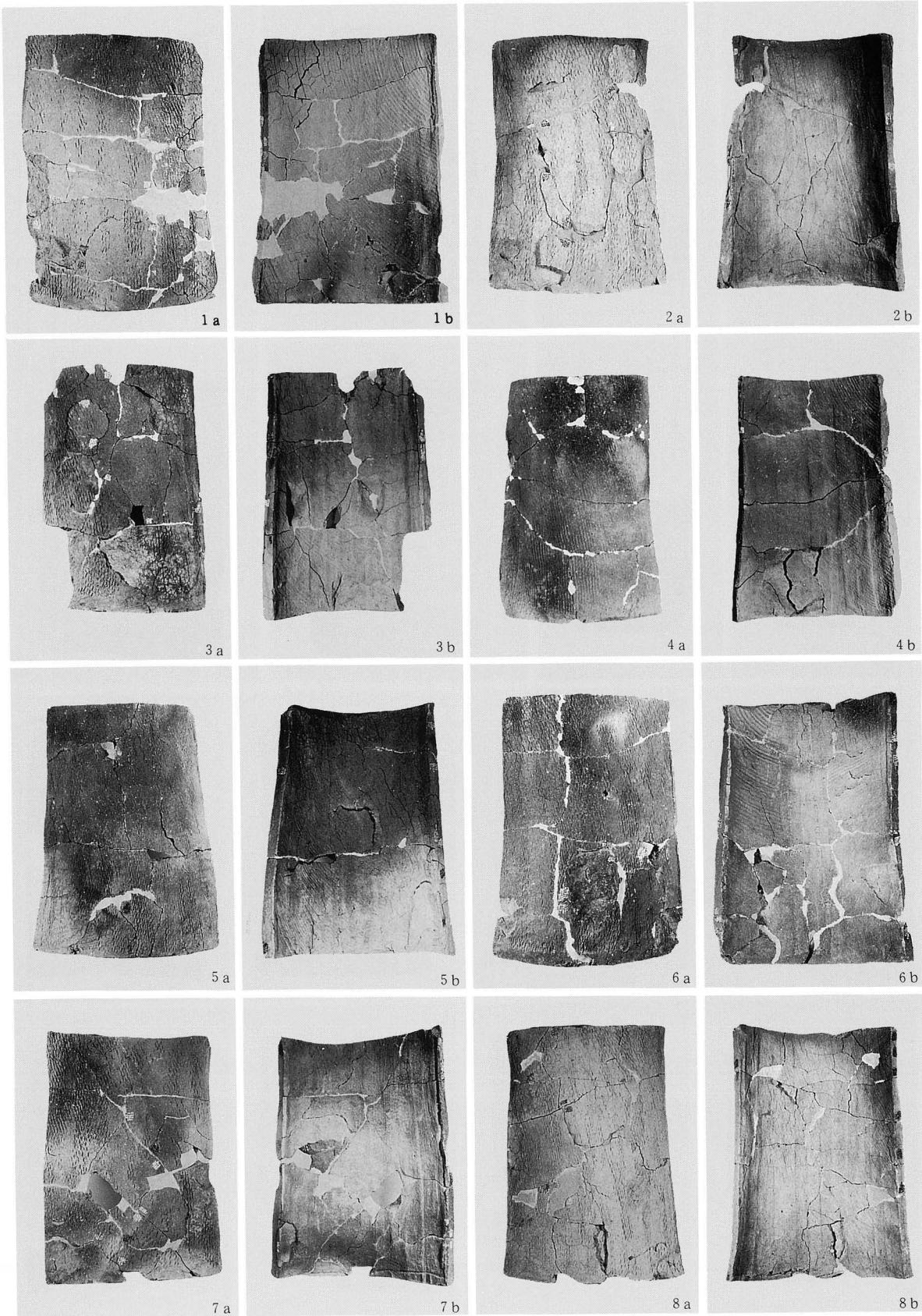
写真23 2号窯跡出土遺物（4）

1. 丸瓦 Fb-8
2. 丸瓦 Fb-9
3. 丸瓦 Fb-14
4. 丸瓦 Fb-15
5. 平瓦 Gb-21
6. 平瓦 Gb-12
7. 須恵器坏 E-1
8. 須恵器坏 E-2
9. 須恵器壺 E-3



1. 丸瓦 Fb-25 2. 丸瓦 Fb-27 3. 平瓦 Gb-72 4. 平瓦 Gb-75
 5. 平瓦 Gb-73 6. 平瓦 Gb-74 7. 平瓦 Gb-76 8. 平瓦 Gb-77

写真24 4号窯跡出土遺物（1）



1 . 平瓦 Gb-82 2 . 平瓦 Gb-83 3 . 平瓦 Gb-84 4 . 平瓦 Gb-85
 5 . 平瓦 Gb-87 6 . 平瓦 Gb-86 7 . 平瓦 Gb-89 8 . 平瓦 Gb-90

写真25 4号窯跡出土遺物 (2)

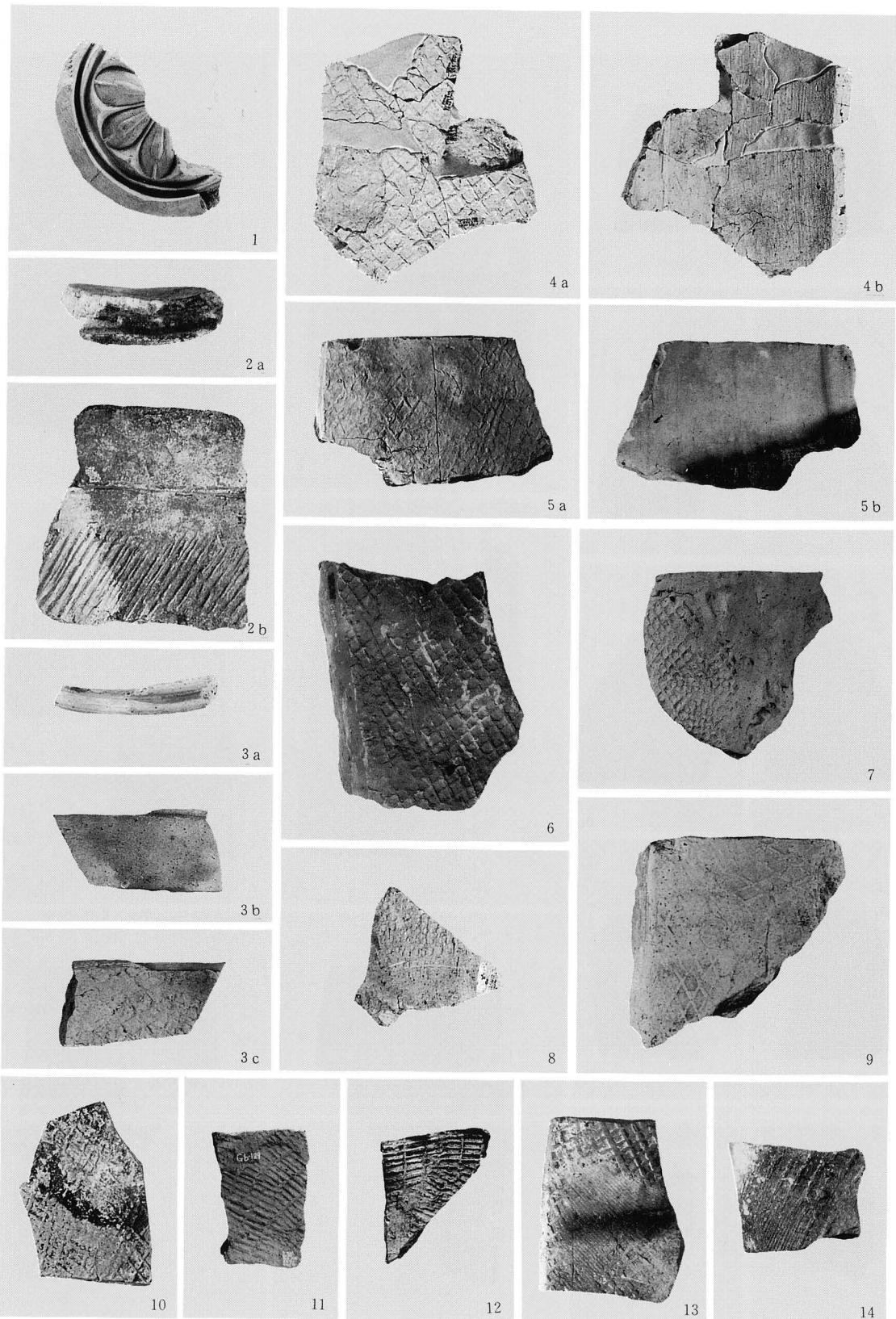
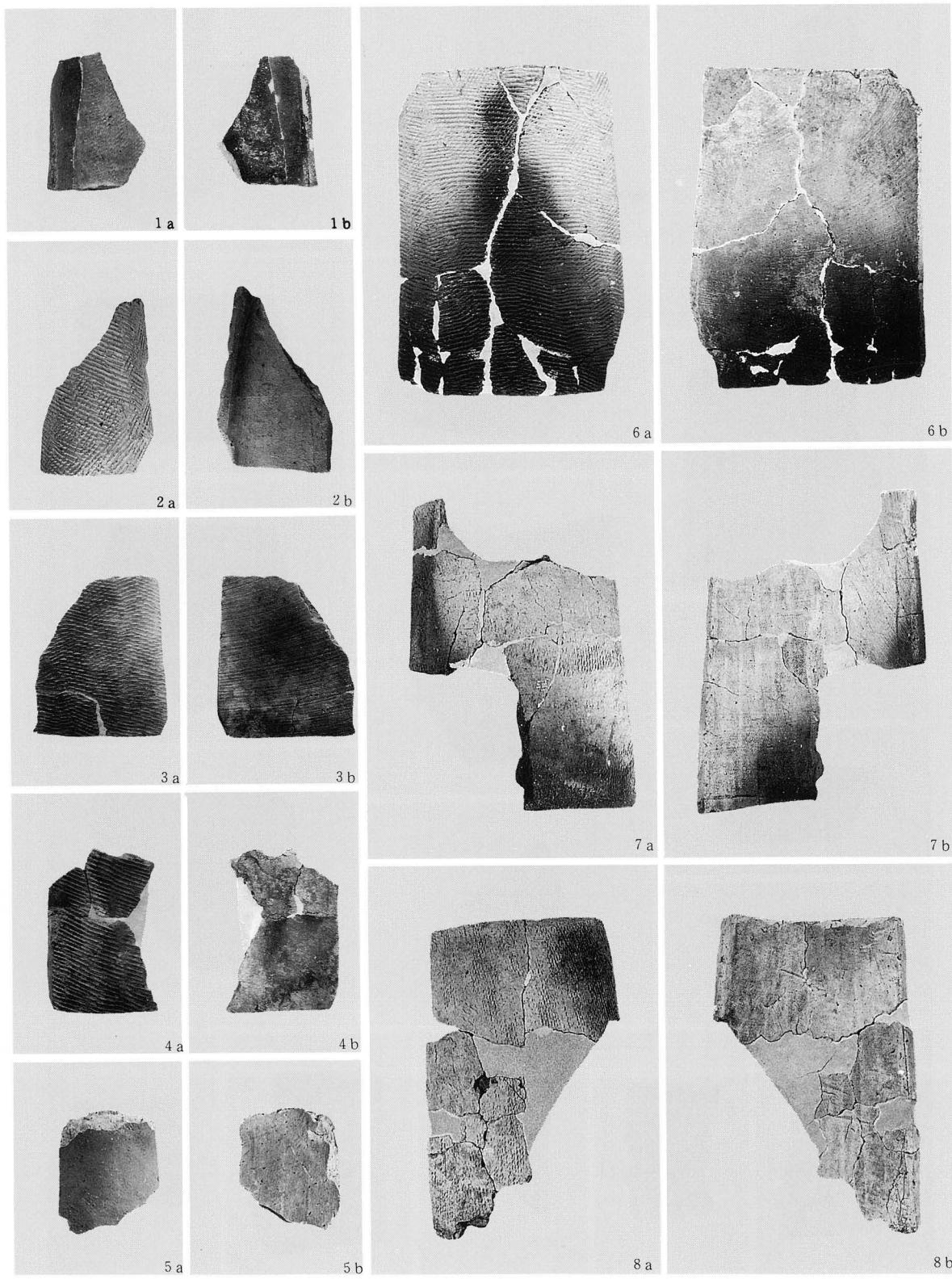
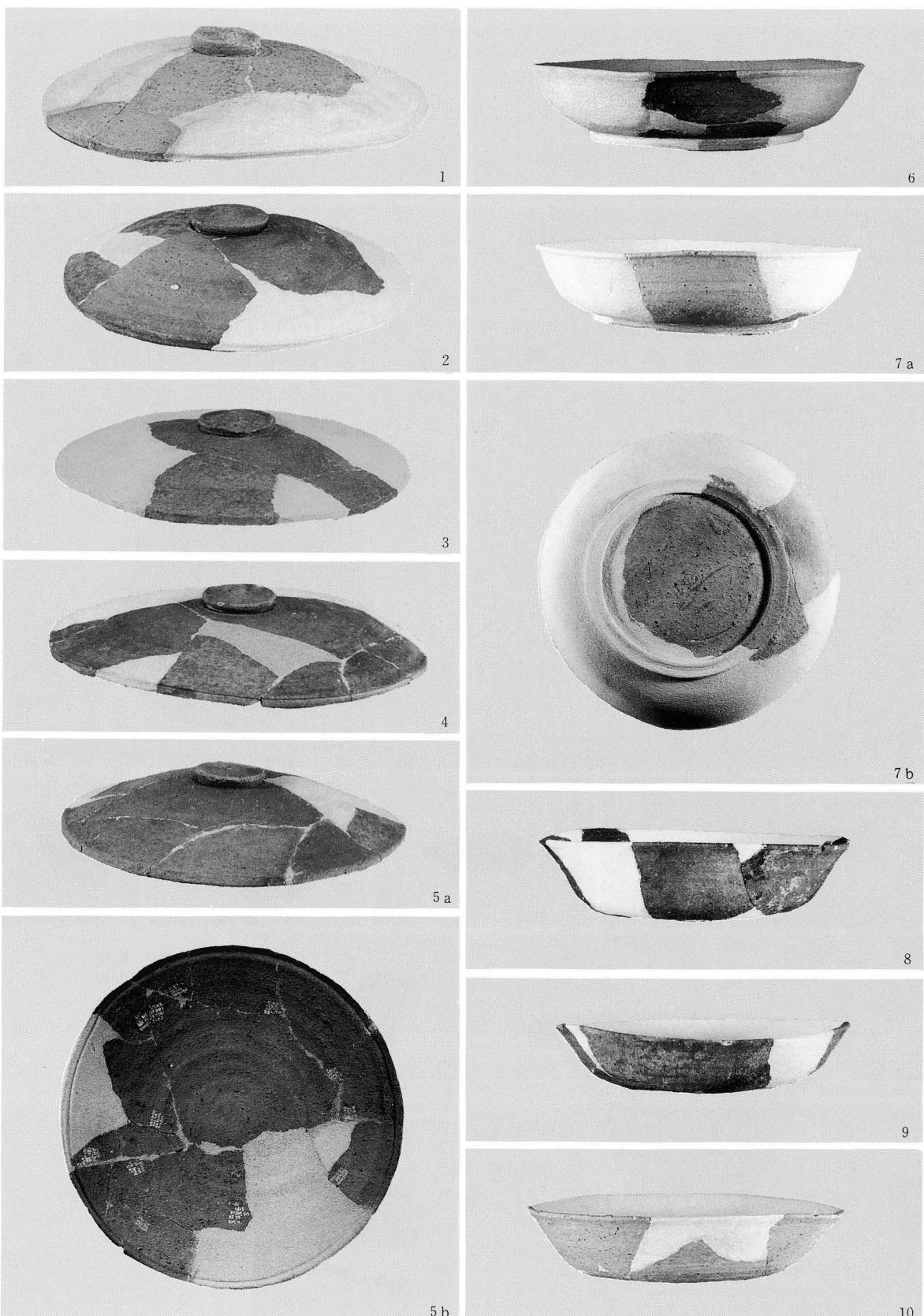


写真26 5号窯跡出土遺物（1）



1. 丸瓦 Fb-37 2. 丸瓦 Fb-35 3. 平瓦 Gb-148 4. 平瓦 Gb-147
5. 熨斗瓦Gd-1 6. 平瓦 Gb-144 7. 平瓦 Gb-180 8. 平瓦 Gb-156

写真27 5号窯跡出土遺物（2）



1. 須恵器蓋 E-55 2. 須恵器蓋 E-50 3. 須恵器蓋 E-59 4. 須恵器蓋 E-51 5. 須恵器蓋 E-49
6. 須恵器坏 E-17 7. 須恵器坏 E-16 8. 須恵器坏 E-11 9. 須恵器坏 E-12 10. 須恵器坏 E-22

写真28 5号窯跡出土遺物 (3)

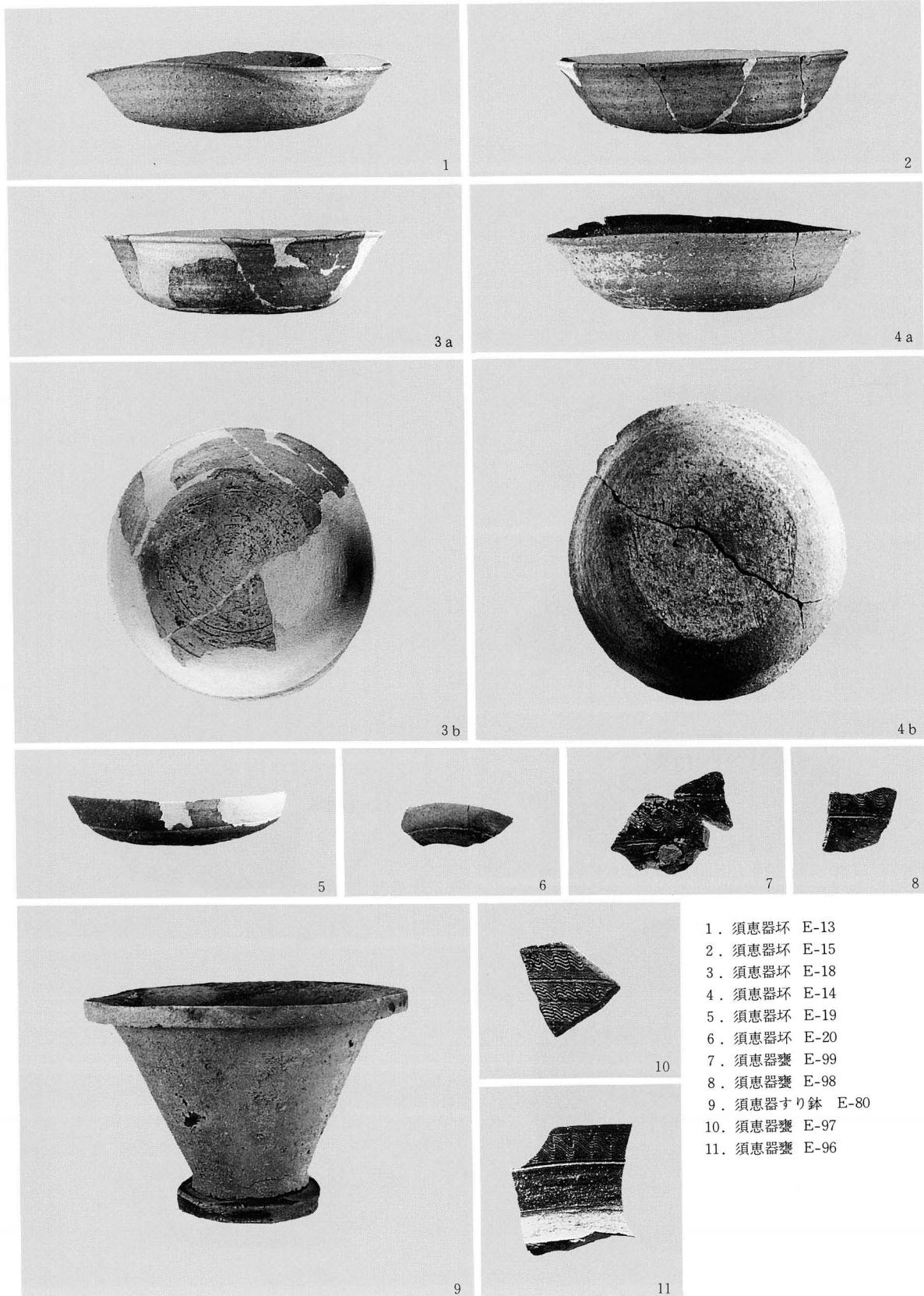


写真29 5号窯跡出土遺物（4）

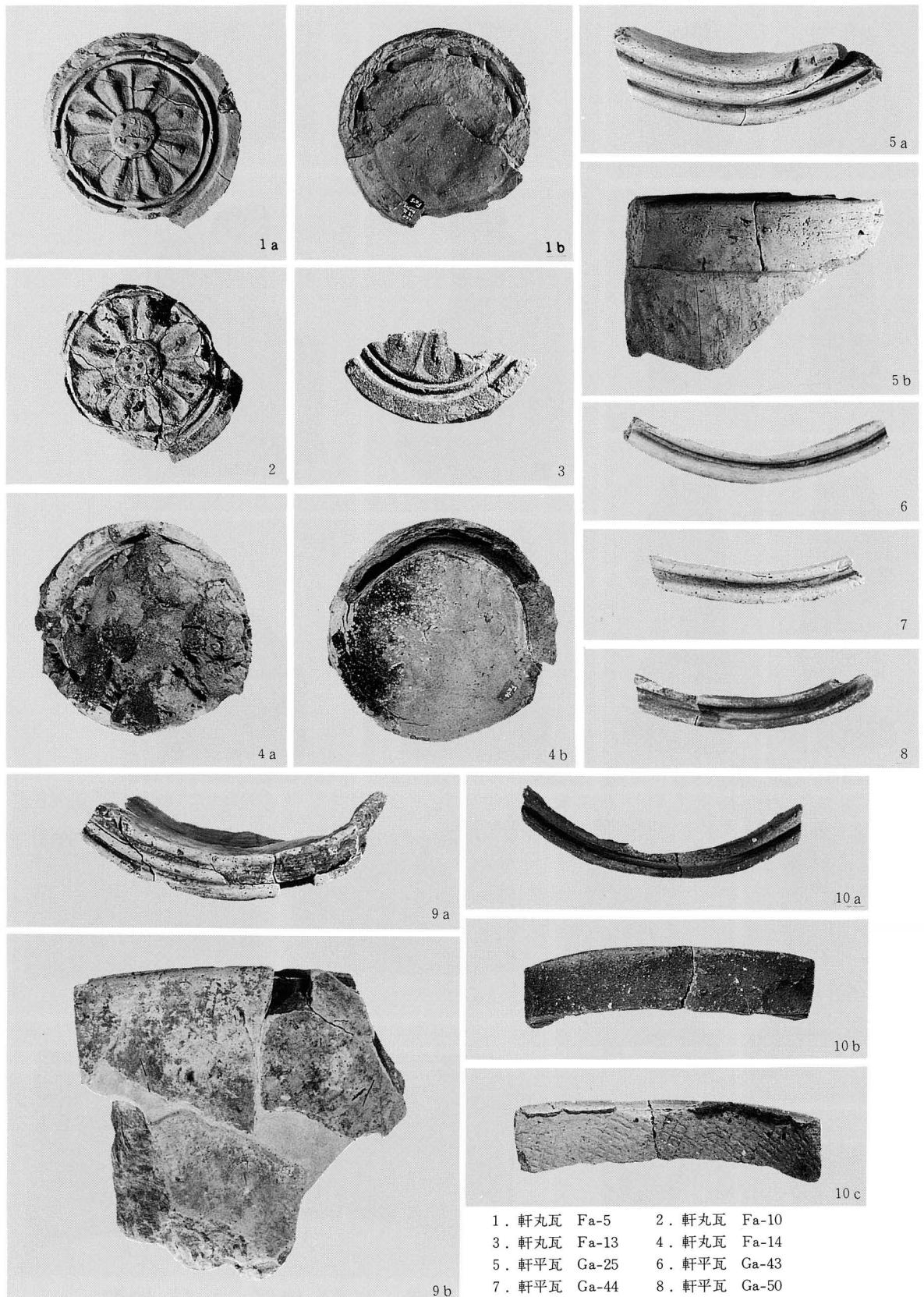
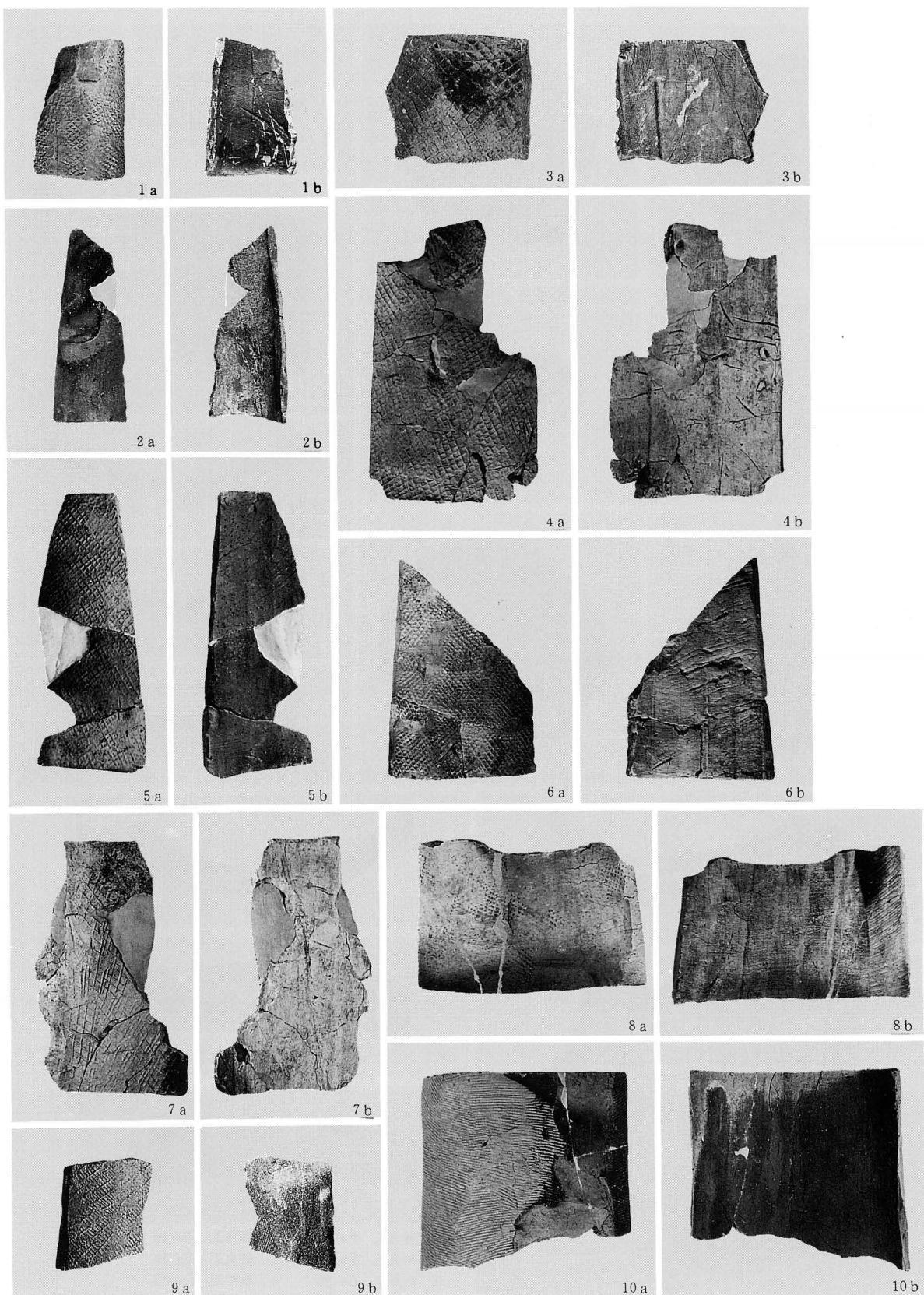
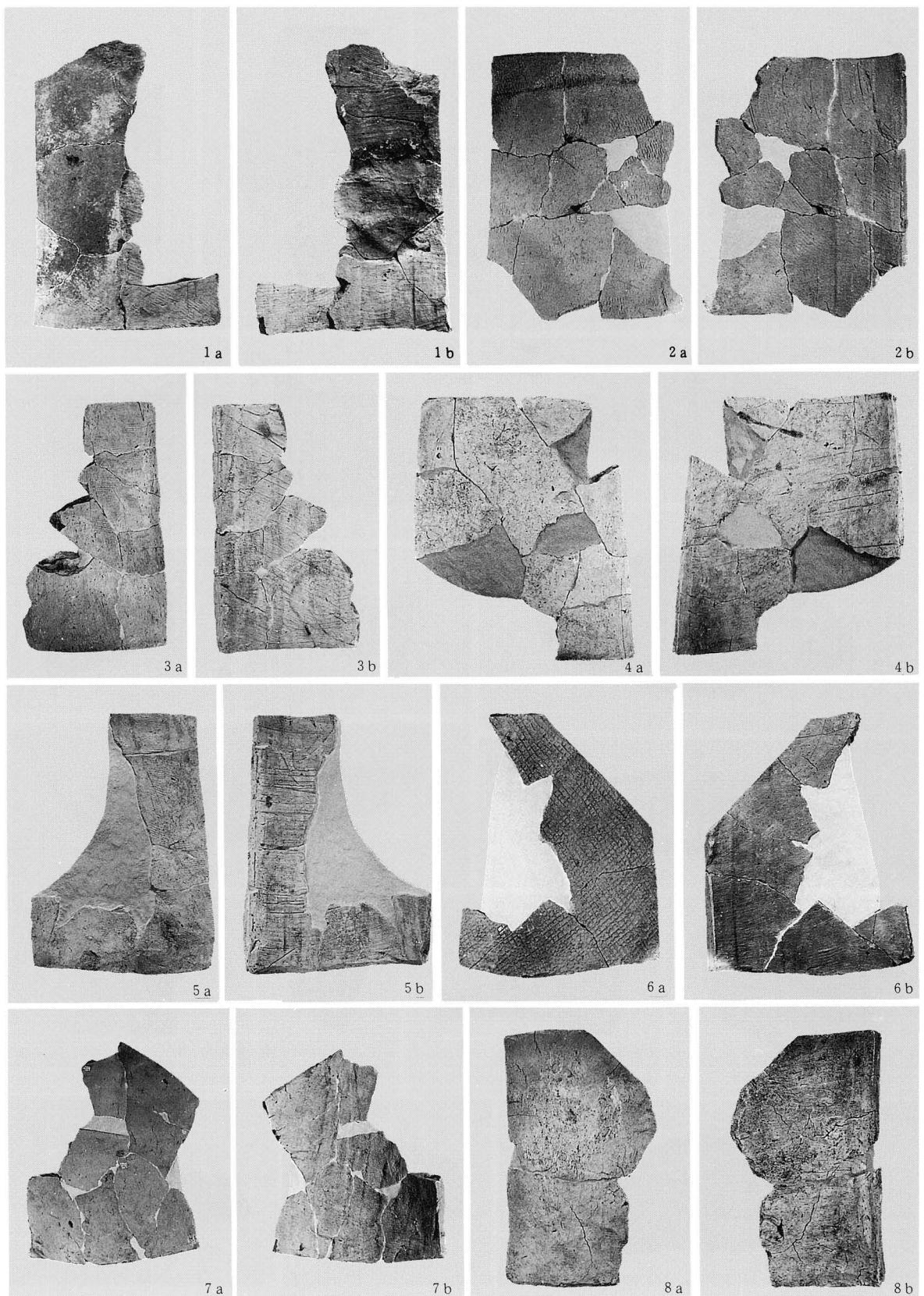


写真30 1号灰原出土遺物 (1)



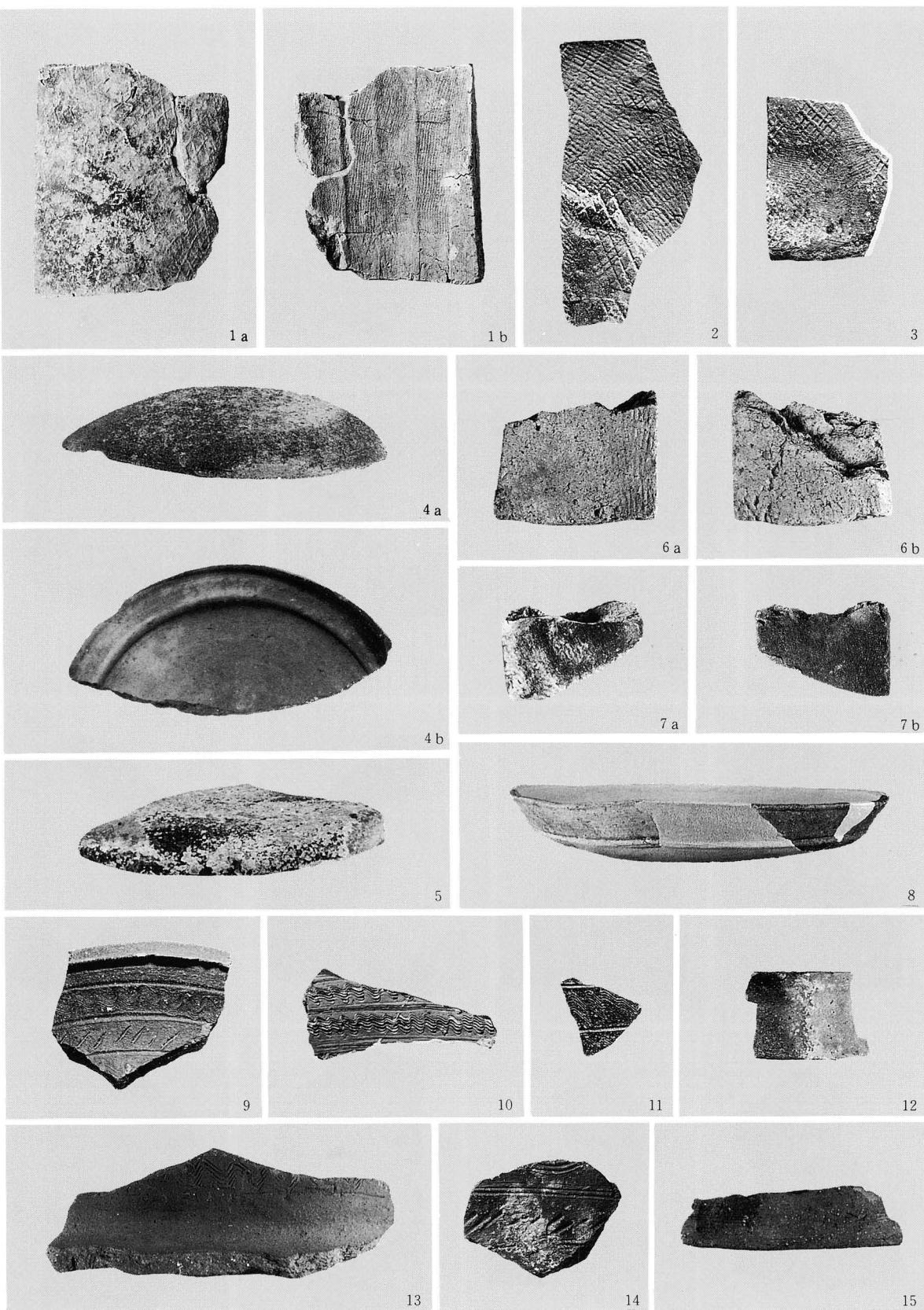
1. 丸瓦 Fb-59 2. 丸瓦 Fb-77 3. 平瓦 Gb-184 4. 平瓦 Gb-181 5. 平瓦 Gb-203
6. 平瓦 Gb-189 7. 平瓦 Gb-185 8. 平瓦 Gb-240 9. 平瓦 Gb-252 10. 平瓦 Gb-274

写真31 1号灰原出土遺物 (2)



1. 平瓦 Gb-239 2. 平瓦 Gb-313 3. 平瓦 Gb-285 4. 平瓦 Gb-321
5. 平瓦 Gb-286 6. 隅切り瓦Gc-3 7. 隅切り瓦Gc-6 8. 隅切り瓦Gc-7

写真32 1号灰原出土遺物（3）



1. 平瓦 Gb-205 2. 平瓦 Gb-267 3. 平瓦 Gb-268 4. 須恵器蓋 E-180 5. 須恵器蓋 E-183
 6. 塚 H-1 7. 塚 H-2 8. 須恵器高坏 E-167 9. 須恵器甕 E-198 10. 須恵器甕 E-205
 11. 須恵器甕 E-209 12. 円面硯 E-189 13. 須恵器甕 E-203 14. 須恵器甕 E-208 15. 円面硯 E-190

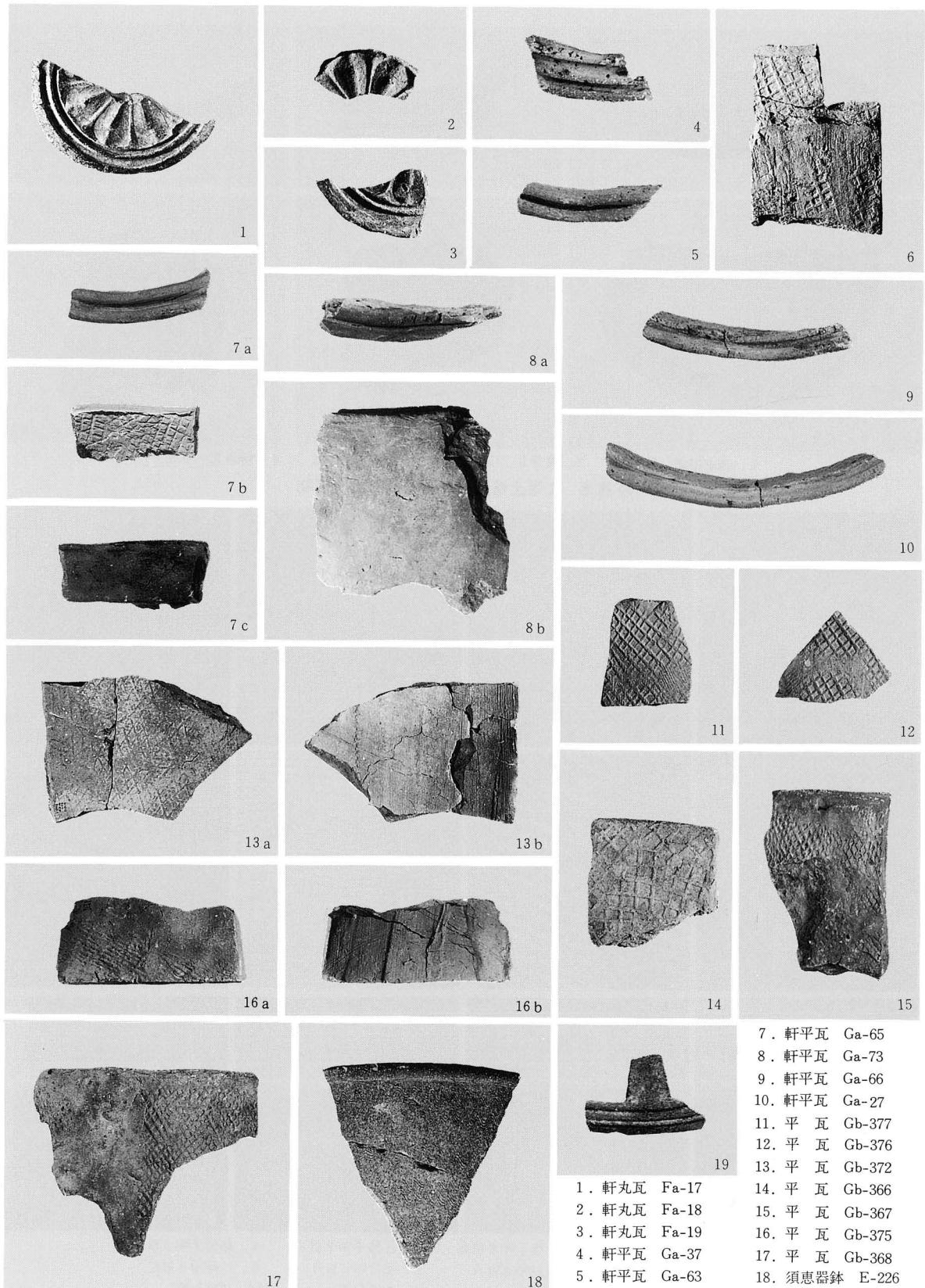
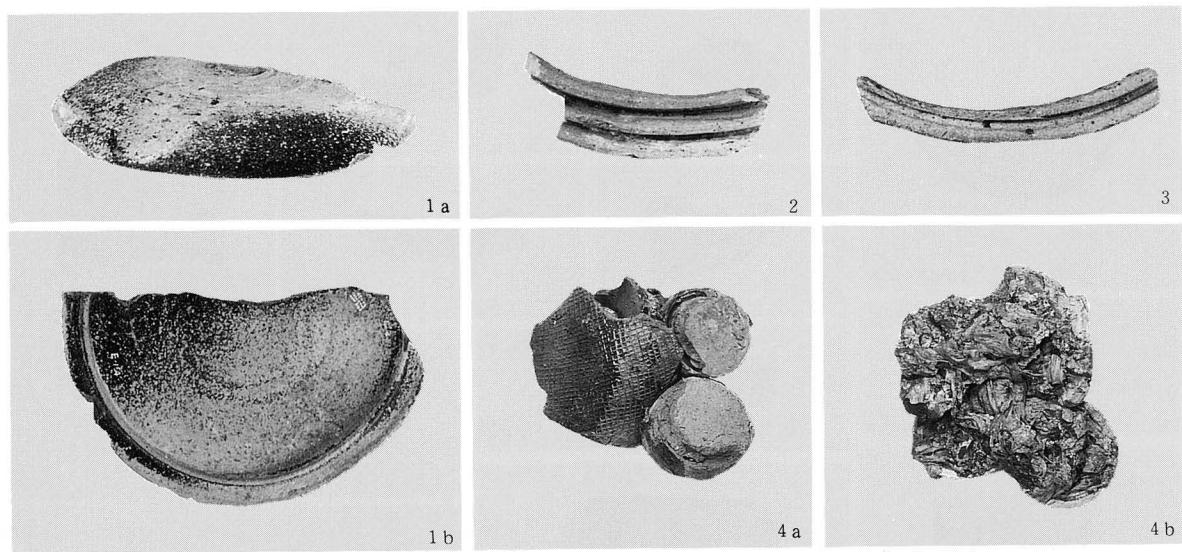


写真34 1号溝跡出土遺物

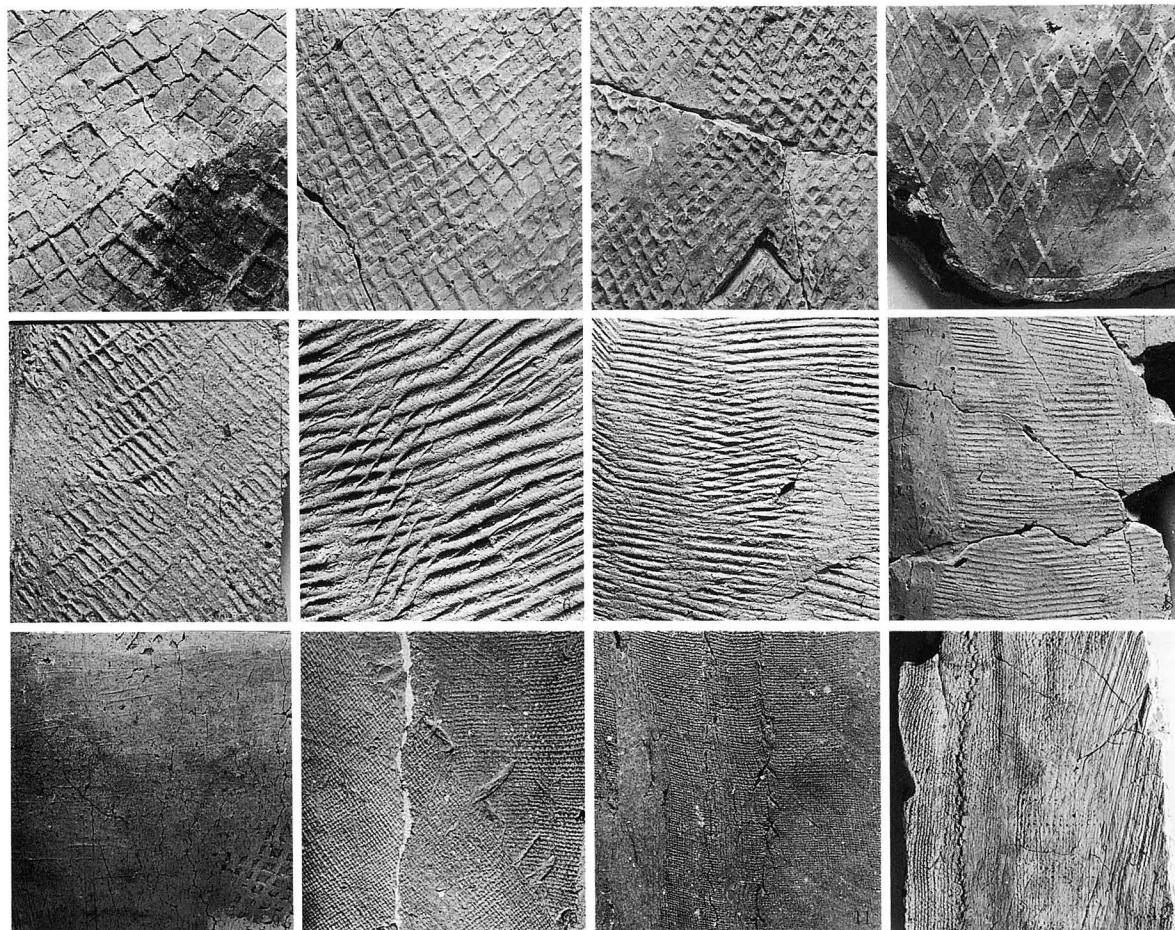
- | |
|-----------------|
| 7 . 軒平瓦 Ga-65 |
| 8 . 軒平瓦 Ga-73 |
| 9 . 軒平瓦 Ga-66 |
| 10 . 軒平瓦 Ga-27 |
| 11 . 平 瓦 Gb-377 |
| 12 . 平 瓦 Gb-376 |
| 13 . 平 瓦 Gb-372 |
| 14 . 平 瓦 Gb-366 |
| 15 . 平 瓦 Gb-367 |
| 16 . 平 瓦 Gb-375 |
| 17 . 平 瓦 Gb-368 |
| 18 . 須恵器鉢 E-226 |
| 19 . 円面観 E-222 |

- | |
|---------------|
| 1 . 軒丸瓦 Fa-17 |
| 2 . 軒丸瓦 Fa-18 |
| 3 . 軒丸瓦 Fa-19 |
| 4 . 軒平瓦 Ga-37 |
| 5 . 軒平瓦 Ga-63 |
| 6 . 軒平瓦 Ga-36 |



1. 須恵器蓋 E-154 2. 軒平瓦 Ga-21 3. 軒平瓦 Ga-38 4. 軒丸瓦・平瓦

写真35 1号土坑周辺・1号灰原出土遺物



1. 正格子叩き目A 2. 正格子叩き目B 3. 正格子叩き目C 4. 斜格子叩き目A
5. 長方形叩き目 6. 平行叩き目A 7. 平行叩き目B 8. 平行叩き目C
9. 無文叩き目 10. 布合せ目痕 11. 布綴じ痕 12. 布綴じ痕

写真36 瓦凹凸面の痕跡

文化財課職員録

課長 白鳥良一

管 理 係	調査第一係	調査第二係
係長 菅原澄雄	係長 加藤正範	係長 田中則和
主任 村上道子	主任 結城慎一	教諭 太田昭夫
主事 佐藤正幸	教諭 佐藤好一	主事 佐藤甲二
〃 高橋三也	主任 篠原信彦	〃 渡部弘美
〃 庄子 厚	〃 木村浩二	〃 斎野裕彦
〃 佐藤寿江	〃 佐藤 洋	〃 荒井 格
	主事 吉岡恭平	〃 中富 洋
	〃 金森安孝	〃 平間亮輔
教諭 小川淳一	教諭 五十嵐康洋	
主事 工藤哲司	〃 菅原裕樹	
〃 主浜光朗	主事 渡部 紀	
〃 長島栄一	教諭 熊谷裕行	
〃 工藤信一郎		
教諭 神成浩志		
〃 竹田幸司		
〃 稲葉俊一		
主事 佐藤 淳		
教諭 川名秀一		

仙台市文化財調査報告書第168集

大蓮寺窯跡

—第2・3次発掘調査報告書—

1993年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷 (株)東北プリント

仙台市青葉区立町24-24

T E L 263-1166

